
剣と勇気を、与えてください

羽場速雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣と勇気を、与えてください

【Zコード】

Z8748F

【作者名】

羽場速雄

【あらすじ】

ファルアリア王国の片田舎にある街道町サイレア。旅人を相手に食堂を営む一家に生まれたレイル・フュンフルは、豪雨の翌日に、ギヨーム川へ釣りに出かけ、川縁に倒れ伏す1人の美しい女性を目にすることとなる。彼女、コイリス・レンフィアとの運命的な出会いが、少年を新たなる道へと導く。

雲一つない青空がどこまでも広がっている。全ての息吹に等しく恵みを与える太陽だけが天空を支配していた。

照りつける暖かい日差しをかざした手で遮りながら、短い袖の短衣にズボン姿のレイル＝フュンフルは緑一面に覆われた丘を越え、釣り竿を肩に担いだまま栗毛色の短い髪を風になびかせて斜面を一気に駆け下る。齡14歳を迎えたものの、まだまだやんちゃなところは抜けきつておらず、そんな彼の活動的な性格を如実に表しているかのようだった。

昨日までの豪雨が嘘のような天気だが、彼の眼前に広がる丘の下を横切る形で流動している川は自然の猛威による爪痕を如実に残していた。

伝え聞く、西の国々を横切る大河ロアヌールの壮大さとは比べものにならないだろうが、それでも普段より2倍近い川幅となつた、サイレア近郊を流れるギヨーム川を見るとあの豪雨がいかに壮絶なものだったか窺い知ることができる。普段ならば投げた石が対岸に届く程度なのだが、同じことをしてもまったく及ぶべくもないだろ。

とはいって、川に来た目的は石を投げて遊ぶなどという稚拙なことなどではない。肩に担いだ獲物がそれを表している。

本来なら豪雨の後などは川が荒れ濁っているため、魚たちも泳ぎ回らざじつとしており、釣りをするには適さない。

しかし、彼は知っていた。このような荒れた時こそ縦横無尽に泳ぎ回る魚がいることを。それが、この川の名を冠したギヨームという魚であるということ。ここぞとばかりに喜び勇んで出かけたのはギヨームを釣るためであり、今日ばかりは恒例の『特訓』も休むことにしたのだった。

「この辺りでいいや。ようし、釣るぞ

竹から作つた竿先に括りつけた木綿糸の釣り糸から垂れる釣り針を勢いよく放つ。否、放とうとした。

ところが、レイルの手は釣り針を放つことはなかつた。彼の視線は川べりのある一点に凝縮されていたのだから。

それは、本来ならばそのようなところにはありえない光景。

濡れているものの暖かさとどこか優しさを感じさせる亞麻色の髪長い髪。対照的に白磁器のように透き通るようなうなじ。年季が入つていてるもの、身にまとつた小奇麗な薄茶色の旅人が着るドレスは見るものに清潔感を感じさせるだろうし、濡れそぼつた衣装のせいで浮き出でしまつた身体のラインはほつそりと華奢で、あたかもよくできた人形のようだつた。唯一、右手にしつかりと握られた長細いこげ茶色の無骨なトランクケースが清廉さを想起させる彼女とは対極の存在であつたが。

レイルの灰色の瞳には、川べりに打ち上げられた1人の若い女性の姿が映りこんでいたのである。彼女はうつぶせに倒れ、身じろぎ一つしなかつた。

呆気にとられ、反射的に釣竿と釣つたギヨームを入れるために持つてきた木桶を取り落とす。大地に転がつた木桶は乾いた音を立て、呆然としていたレイルの意識を逆に呼び戻した。

「し、死んでる、のか？」

死体を見るのは初めてではない。決して何度も見たい代物でもなかつたが、今日の前で倒れている女性はかつて見た死体とは似て非なるものだつた。その肌艶は生きているようであつたし、死体の身体が動くはずがない。

「い、息してる！？」

そう、動くはずがないのだ。彼女は死体ではなかつた。呼吸をしているために、わずかながら肩が上下している。レイルは躊躇しつつも一大決心をし、恐る恐る女性に近づいた。

腰を屈め、そつと顔を覗き込む。その間にも反応は一切ない。

思い切つてしまがみ込むと、恐々ながら女性の身体に手をかけ、

彼女を仰向けに抱き起こした。彼女の身体はレイルよりも大きく、抱き起こすのに相当な力がいるのかも知れないと思っていたが、それはまったくの杞憂であり、彼女の身体は絹糸のようにならに軽かつた。

その身体の軽さに驚いたのもつかの間、レイルはさらに驚く光景を見せつけられることとなる。

小ぶりで、それでいてしつかりと高さの自己主張を忘れていない整った鼻筋。首筋と同様、白く透き通るような頬がほんのりと朱色に彩られ、ほつそりとした輪郭に包み込まれている。血色を失つてはいるものの、形の整った小さな唇は小花のような可憐さまでは失くしていない。

見たことがないほど美しい女性だった。閉じられたまぶたの奥にあるまだ見ぬ瞳も、間違いなく見るものを魅了するであろうと、ようやく青年への階段を昇り始めたレイルにも疑いなく信じられるほどに。

旅人から耳にする富廷の貴婦人たちのきらびやかな美しさとは違う、清楚で気高い無垢なる美しさだった。

我を忘れて20歳前後と思われる彼女の美貌に魅せられ、引き込まれるように見つめてしまう。もつとも、それもすぐに終わることとなるが、なぜなら、彼女の頭から、額を伝つて赤い筋が流れでていたのだから。

「た、大変だ！　は、早く手当てしないと……」

その肌とはこれ以上もなく不釣合いなほど鮮血を見せつけられたレイルは我を取り戻した。

最初、自分より多きこの女性を抱えては連れて行けないだろうと腰を浮かしかけたが、すぐに先ほど見た目とは裏腹に至極軽かつたことを思い出し、彼はそのまま女性を両手で持ち上げようとした。

ところがだ。身体自体はやはり驚くほど軽かつたのだが、持ち上げようとした最中、彼女の身体に錨がついているかのように上がりなくなった。見ると、だらりと垂れ下がった先にはあのトランクケースがあり、意識を失っているのにもかかわらず彼女の手は取っ手

をつかむことを止めていたのだ。

よほど大事なものが入っているのかもしれないが、今は中身を心配している暇はない。レイルは中腰になつて彼女をかかえたまま、器用に取つ手の根元をつかんで彼女ごとトランクを持ち上げようとしたのだから。大地に根がはりついたかのような重さに、レイルは目を丸くする。

「な、なんだこれ！？」

つい声を上げてしまう。それもそうだ。なぜなら、そのトランクケースはどれだけ力を込めてもわずかばかりも持ち上がるとはなかつたのだから。大地に根がはりついたかのような重さに、レイルは目を丸くする。

これほどの重さのあるトランクなど、この華奢な細腕でどのように持ち上げることができたのだろうか。だいたいが川を流されてきたと思われる現状下で、彼女とともに岸辺に流れ着けたということが驚きである。普通ならば川底に沈んだまま絶対に浮かび上がつてはこないだろう。

美貌の麗人がこんな川辺で息も絶え絶えになつていることだけでも頭のなかが混乱しているのに、まったく不可解な現象が続き目を白黒させてしまう。

ただ、たつた一つわかっている事実も彼は忘れていた。すなわち、このままでは腕のなかの女性の命が危ないということを。レイルは思い立つた。一旦女性を下に降ろすと、握り締めた取っ手から指をはがしにかかる。トランクを一緒に持つていけないのなら、ここに置いていくしかない。彼女にとつて大事なものかもしれないが、命には代えられないだろう。それに、この辺りをうろつく人間はそうそういないし、なによりこれだけ重ければ容易に持つていけるなどということもないはずだ。彼女が回復したら取りに来てもらえばいい話で、今はとにかく一刻を争う。

固く握り締めた指を解くのは想像以上に困難だったが、それでもどうにか彼女からトランクを離すことに成功し、再度彼女を抱き上げる。今度は彼女の身体の軽さだけが腕の中を占めた。

とはいって、彼の年齢で成人女性一人の、それも自分より大きい人物の身体を抱き上げるのは大変な労力を要するものだが、どうにか成し遂げられたのは普段から身体を鍛えていたことが功を奏した形だった。

が、自助努力が実を結んだ結果に喜ぶ余裕など今のレイルにあるはずもなく、一目散に小走りで村へと向うのだった。

木戸の閉じられた窓の縁に置かれたランプのほのかな灯りだけが、薄暗い室内を照らし出している。

背もたれを前にし、その上に腕を組み合させて載せ、椅子を跨ぐようにして座りながら、レイルはベッドに横たわる女性をただただ見つめていた。ランプの灯りが薄つすらと照らす彼女の頬は相変わらず白かつたが、唇には血色が戻り始めていた。頭部には包帯が巻かれており、その美貌との差が痛々しさをより強めている。

レイルが彼女を助け起して自宅のある町サイレアへと連れ帰つてから3日が経つた。彼女はその間一度として意識を取り戻すこともなかつた上に発熱も引き起こし、苦しそうに度々うめいていた。

ただ、今ではその状態も落ち着き、規則正しい寝息に胸を上下させている。つきつきりと看病してきたレイルは胸を撫で下ろしたも のだった。

もちろん彼の功績だけではなく、まず最大の協力者は両親であり、彼らの手助けなしにはこゝはいかなかつた。

彼女を連れ帰つた時、食堂を嘗むいつも気難しく頑固な父ロイド¹¹ フュンフルはレイルの簡単な説明を聞いただけで客間の一つへ連れ込み、彼女を休ませたのだ。融通が利かないことが知れ渡つており、その有り様を最も見せつけられてきた息子としてはあまりの決断の早さに驚いたものだったが、彼女を一刻も早く休ませるには願つたり叶つたりの反応だった。

また、心優しく暖かい母ミラン=フュンフルがいなければ、女性相手にどう処置をすればいいかなどわからないまま右往左往するしかなかつたろう。彼女が客間に運ばれると、ミランはすぐに医者を呼ぶよう指示を出し、さらに濡れた彼女の服を脱がしにかかつた。もちろん、レイルとロイドを客間から叩き出してからである。

後はもう、レイル自身は右往左往しているしかなかつたが、そこ

は大人たちがこれ以上もない手際のよさで事態を動かした。

ロイドが連れてきた町医者によると、頭部に裂傷を負つてはいるが外傷的には大事ないということ。ただ、体力を著しく消耗している上に、おそらくこれから発熱するであろうから予断は許されず、絶対安静で十分に休養を取らせること、と指示されていた。。

命に大事はない、と決して医者が言わなかつたことに脂汗を滲ませたが、だからといってレイルにどうこうできることもなく、つきつきりの看病に志願するのが精一杯のことだった。

両親はそれを了承し、彼女の面倒を彼に任せてくれた。汗ばんだ肌着の着替えや温水を浸した布で体を拭いてやる等の行為はもちらんミランが行つたが。

以来、レイルは彼女が病床に伏せる客間に詰め、彼女の様子を四六時中見守つてきたのである。発熱し、苦しんでいる様を見てもなにもしてやれないという現実に耐え難いやるせなさが胸一杯を占めたが、少しでも力になればと彼は彼女の手を握り、優しくさすつてやつた。

もちろんそれが功を奏したわけではないだろうが、彼女の熱は徐々に下がり、今ではこうして落ち着いたのである。

後は意識を取り戻してくれるのを待つばかりだが、こればかりはまさに神のみぞ知るところだろう。小さくため息をつき、背もたれに重ねた両腕の上に顔をうずめる。いつ果てることのない状況に、さすがに疲れがきていた。ここ数日はろくな睡眠もとつていないうことも疲れを加速させていた。

自然とまぶたが重くなり始め、意識が薄らいできている。だいたいが今はもう真夜中であり、本来ならばとくに眠りの世界へと入っている頃だ。

さすがにそろそろ一度仮眠を取らうかとも思つたが、そんな意識すらもそのままどろみたい欲求に押し流されつつあった。

まぶたを閉じたい欲求いよいよ支配権を強め、心地よい夢の世界への扉が目の前に開きかけている。レイルは欲求の赴くまま、身を

委ねようとした。

声が聞こえた。

夢を見始めたのかと思った。

否、それは夢ではなかった。

「ニニ」、は、どこ?」

再び聞こえた声。それは夢の世界の声などではなく、紛れもなく己が鼓膜を打つ声。か細く、力はなかつたが、凜然とした響きをたたえつとも可愛らしいその声は、ベッドに横たわる女性が奏でる『生命の証』であった。

それまで睡魔に苛まれていたのが嘘のように覚醒したレイルは、慌てて身を起こして寝ぼけ眼に力を入れる。

彼女がまぶたを見開いていた。弱々しくではあるが、開かれたまぶたの奥にある瞳を真っ直ぐこちらに向けていた。

初めて見る彼女の瞳は、彼女に見えた時に感じた通り見る者を魅了する美しいものだつた。遠く澄み渡る大空を思い起こさせる空色の瞳に自分の姿が写り込んでいる光景を目にし、つい引き込まれそうになってしまふほどだ。

どう声をかけていいかわからず、言葉にならない言葉を口のなかで反芻してとまどつていると、彼女は再び小さな唇を開いた。

「イリアンド、は? ディーンも、ハンスも、いないの? ダルジイ、は、どうしたの、かしら」

人の名前だろうか。さすがにまだ辛いのか、途切れ途切れに言葉を発している。

「こんな姿、アイシャやヒューバートが見たら、きっと、文句言つに、違ひないわよね。情けない、つて

なにを言つているのかさっぱりわからなかつたが、彼女の様子が契機となつて医者の言つていたことを思い出した。彼女は頭に傷を負つていたため、外傷的には酷くはないがもしかしたら目を醒ました時になんらかの障害が出るかもしれない、ということ。大抵の場合として、記憶の混乱が起こる可能性がある、とも口にしていたこ

とを脳裏に浮かべた。

「起き、なきや。ルクトテクターを、用意して、頂戴」

熱病にうなされたかのように口々に言葉を発する彼女を見守つて
いたが、身を起こそうとした時点ではすがに止めに入る。

「だ、駄目だよまだ寝てなくちゃ！」

「こうして、いられないわ。ああ……そう、それから、エル、エル
を」

上体を起こしかけた彼女の肩を押さえ再び横にならせようとする
が、起きようとする力は尋常ではなかつた。これが3日3晩生死の
縁を彷徨つた後の力とは到底思えない。それよりも、彼女のような
華奢な女性がこれほどの力を出せることが驚きだつた。

まだ成人していなとはい、男であり日々鍛錬を重ねているレ
イルの腕力をものともしない彼女の力に完全に負けていたものの、
それでも彼は必死に彼女の肩を押さえようと頑張る。

と、ぴたりと彼女の動きが止まつた。上体に入つていた力もそれ
以上は込められていないことがよくわかる。

突如行動を静止させた彼女の様子に、レイルは戸惑いながらもこ
の機会を逃さず、再びベッドへ横にならせることに成功した。

ひとまず一難去つたわけだが、亜麻色の髪の彼女は安寧を許して
はくれなかつた。今度は目を見開いたまま、まるで呪文を唱えるか
のごとく同じ言葉を続けて紡ぎ出していたのだから。

「……エル？ エル、エル……」

エル、という言葉にどんな意味があるのか皆目見当もつかなかつ
たが、彼女にとつてとても重要な言葉らしいことだけはわかる。気
でも触れたのかとも思つたが、何度も同じ言葉を口にしている彼女
の瞳に、徐々に理性の光が灯り始めていることに気づき、考えを改
めた。熱病にかかつた患者のものではなく、自我を持つた女性の瞳
がそこに現出したのだから。

「そうだ……エル、私、あの橋で……」

どうやらなにかを思い出したのか伏目がちにまぶたを細めると、

彼女はそうつぶやいた。そして、再び目を開き、虹色の瞳を中腰で立ち尽くしていたこちらへと向けてきたのである。

「貴方が、助けてくれたの？」

首を傾けて真っ直ぐに見つめてくる彼女。いきなり話を振られ、ことの推移を見守っていたレイルは目を瞬かせた。

「えつ？ いや、その、ええと、ああ、そ、そ、うなんだけど」

彼女が落ち着いたのに併せて彼自身も落ち着いたのだが、冷静になつてみると美しい顔立ちで真っ直ぐに見つめられてしまえば、異性に興味を持ち始めた年頃の男の子としては冷静さが吹き飛んでしまうのはいた仕方ないことだった。口のもりがちに一言返すことが精一杯なのも無理からぬことだ。

「そう、ありがとう、本当に。貴方は、命の恩人ね」

彼女はそこで初めて微笑みを浮かべた。天使の微笑みだった。少なくとも、レイルにはそう思えた。

顔を赤らめ、どうしていいかわからず視線を泳がせていると、彼女はそんなレイルの様子に再び微笑みつつ、名前を名乗った。

「私は、ユイリス。ユイリス＝レンフィア」

「あつ、お、俺、俺はレイル、レイル＝フュンフルだよ」

「レイル……いい名前、ね。命の恩人の名前、一生、忘れない、から」

まだ苦しさは抜けないだろ？に、彼女 ユイリスは急に表情を改め、感謝の気持ちを込めてくれているであろう真摯な面持ちを寄越していた。

それがわかるだけに、伝わってくる感謝の思いについての恥ずかしさと、そもそも感じている妙齢の女性に対する照れでレイルは反射的に踵を返してしまつ。

「あつ、そ、そうだ。は、腹減ってるだろ？ 3日3晩飲まず食わずじゃ参っちゃうもんな、は、ははは。な、なんか食いもん持つてくるよ。父さんと母さんにも知らせてくるから、ちや、ちやんと寝てなくちや駄目だからな！」

コイリスの方を振り替えずに言い散らかし、そのまま逃げ出すようにして客間から外へ出た。慌しく閉めたドアに背を預けると、動悸が激しくなった胸を落ち着かせるようにそのまますやすやすの床へ座り混んでしまう。

真っ暗な廊下にあたかも反抗するかのようになじみの紅く染まつた頬が熱い。どうしてこんなにも胸が高鳴るのか理解できず、不可思議な感情のやり場に困つたが、それでも彼女が、コイリスが目を醒ましてくれたことは全てを吹き飛ばしてくれる。

「なんだかよくわからないけど、コイリスが無事ならそれでいいや。つて、父さんたちにも知らせないと」

深夜ではあるが、彼女が目を醒ましたらすぐに知らせることきつく言われている。レイルは気持ちを切り替え、慌てて両親の寝室へと駆け出した

ユイリス＝レンファの回復ぶりは皆一様驚くほどだった。3日3晩意識を失い、さらにあれほど衰弱していたのにもかかわらず、目を醒ました翌々日には普通に歩けるまでになっていたのだ。

飲まず食わずのままでいたためもあるが、見かけによらない旺盛な食欲によつて失つた体力を養うことができたのも回復に寄与していたに違いないものの、彼女自身の生来持つていた生命力が大いに下地となつてゐるのだろう。

とはいゝ、しばらくの養生は絶対に必要と医者が言つていた手前もあり、レイルの両親はユイリスに対し、この地へのしばらくの逗留を申し出た。せつかく助けた手前、本当に大丈夫になるまで養生してもらわねば根本的に人のいい両親だけに納まりがつかなかつたのだろう。

首に鎖でもつけかねない勢いで心配する彼らに対し、ユイリスも素直に領きテルミト亭への逗留を受け入れるのだった。

テルミト亭とはフュンフル夫妻が切り盛りする食堂で、街道筋にあるサイレアに立ち寄る旅人たちを相手に商いを営んでいた。1階を食堂にし、2階をフュンフル一家が生活の場にしている形で、ユイリスは2階の一角にある客間にしばしの居候をすることとなつたのである。

大人同士で取り交わしたことだつたが、もちろんレイルも彼女の逗留は願つたり叶つたりのことだつた。なぜだかよくわからないが、とにかく気になる存在のユイリスがしばらくとはいゝ自分の家にいてくれるとなれば嬉しくないはずがない。

回復すればするほど面立ちから疲れの色が消え、萎れかかつていた美しい花が再び精氣を取り戻し明るく咲きほころようだつた。衰弱の極みにあるにもかかわらず、真摯な面持ちで御礼の言葉を口にしてくれたあの夜のユイリスを忘れはしなかつたが、今の、健康美

溢れる彼女の笑顔はなにも変わらないような気がしてならない。

助け出された時に来ていた旅人の服は洗濯されていたもののそれ以外に着る物がないため、ミランから借り受けたスカートの裾を揺らしながら隣を歩くユイリスの顔を横目でそつと見上げ彼女の整った面立ち瞳に映し出しても、その思いは益々強くなるのだった。

「あら、私の顔になにかついてる？」

気分が良さそうに穏やかな表情をしたまま前を向いて歩いていた彼女の視線が、なんの前触れもなくこちらへ向けられた。

「あっ、べ、べつになにもついてないよ。ちょっと、見ただけだよ」「そうなの？……あ、もしかして私があんまりにも綺麗だから見とれちゃった？」

本当はまさにその通りなのだが、彼女自身は絶対にそのように思つていらないに違いないのにもかかわらず、わざとらじに悪戯っぽい笑みを浮かべてこちらを覗きこんで来る。

「そんなこと、考えたこともないよ」

ちょっととした悪ふざけをしてきているのはわかつてたが、頬を膨らませてまつたく関心がない様子を装う。すると、ユイリスはなにやら残念そうに口を尖らせていた。

見た目はそんなことをしそうにもないのだが、意外と子供じみた態度や振る舞いをするというユイリスの意外な面は、それはそれで面白かった。美人は得てして気位が高く気難しいと勝手に思い込んでいただけに、彼女のように自分の美しさを歯牙にもかけない存在は新鮮この上ない。

そう考えると悪ふざけをあつさり流されてしまい、残念そうにしている彼女の態度は至極笑え、照れ隠しに冷たくあしらつた舌の根が乾かないうちにレイルはつい噴出してしまつ。

「なにを笑っているの？」

「なんでもない。それよりほら、見えてきた」

納得いかない様子の彼女を余所に、低い下草の草原を踏み歩きな

がら先を目指す。目的地、ギョーム川だ。

青空と暖かい日差しのもと、今日こうして出張つてきているのは、ユイリスを見つけた時に彼女が手にしていたものの、持っていくことができずに置き去りにしたままだったトランクを取りに行くためだ。彼女を助け出した時以来、すっかり忘れ去つてしまつていたが、彼女が所在を尋ねてきたことで記憶が甦つた。

ことの経緯を説明し、やもうえず放置してきたことを恐る恐る伝えると、ユイリスは嫌な顔一つせず、『私のことを助けるためだつたんだもの。気にしないで』と言つてくれたのだ。

彼女の性格は段々わかつってきたため叱責されることはないだろうとは思つていたが、こうも柔軟な対応を取られてしまうと逆に心苦しくなるのもまた然り。よつて、レイルの方からギョーム川の川縁に置いてきたトランクのもとへ案内すると買つて出るのも自然な流れだつた。

数日ぶりに訪れたギョーム川は、氾濫した際の荒れ模様からすつかり在りし日の姿に戻つていた。そのため拡大した川岸も元の位置へと收まり、過日ユイリスを助けた辺りも水の痕跡は少しもなかつた。ただ、川の流れがあつたと思われる、大地を削り取つたような痕は残つてあり、ユイリスを助け出した際の記憶を呼び起させた。陽光の明かりに照り返すギョーム川の幻想的な美しさに見とれつつも、目的の物を探す。

もしかすると無くなつてしまつたのかも、と急に不安が首をもたげてきたが、危惧は霧散した。トランクはあの日同様の居住まいのまま、大地に鎮座していたのだから。

古ぼけたトランクのもとに歩み寄ると、ユイリスはスカートの裾を膝裏に綺麗に置んではしゃがみ込んでいた。無言でトランクを見つめる彼女の視線は、先ほどまでの明るいものとは微妙に異なる。なにかを懐かしむような、それでいて悲しむような色を含んでいた。

「あのさ、ユイリス。その中身って、なにが入つてるんだい？」えらく重くて、俺持ち上げることすらできなかつたから、さ

トランクの表面を撫でつけるように手のひらを置いたまま、思い出に浸るかのように身動き一つしなくなつたコイリスに、レイルは手持ち無沙汰も相まってそれとなく尋ねてみる。

するとコイリスは、ゆっくりとこちらを見上げ、困ったような微笑を浮かべ、伏目勝ちに視線を外した。それだけだった。そこには精一杯の気遣いと御礼の気持ちと、明確な『拒絶』が込められていた。思えば彼女の口からまだその身の上は聞かされていなかつた。ロイドとミランが彼女と話している時にこつそり聞き耳を立てたのだが、西方から来たこと、諸国のような文化や伝統を見るために旅をしていること、そして旅の最中の嵐に見舞われて鉄砲水に飲み込まれてしまつた末にギヨーム川の川岸へ打ち上げられてしまつたことしかわからなかつたし、彼女もそれ以上のことは話していなかつた。

聞き耳をたてていたことはその後すぐに両親にもコイリスにも発覚してしまい、引っ込みがつかなくなつたために思い切つて彼女に身の上を尋ねてみたのだが、先ほどと同様の複雑な微笑でかわされてしまつた。なにより、両親がそれ以上の追求を許さなかつた。人それぞれ、聞かれたくないこと触れられたくないこともある、と奢められて。

6歳までおねしょをしていたことをお前も誰にも知られたくないだろうと、自らの汚点を例に挙げられたのには辟易したが、両親が言いたいこともよくわかつたのでそれ以降はコイリスに過去を聞くようなことはしなかつた。

しなかつたのだが、つい口が滑つて質問してしまつた。鉄砲水に飲み込まれても決して離さなかつたトランクである。いわくつきなのは間違ひなく、彼女の過去がつまつてていると言つても過言はないに違ひない。そこまで意識することができずに口にしてしまつたのは明らかに失言だった。

「ごめん。なんか俺、気が回らなくて」

ばつが悪くなり、素直に謝る。すると、コイリスは静かに首を横

に振った。

「気にしないで。なにも言わない私がいけないのだから。『ごめんなさいね、命の恩人を前にしているのに』

「いや、そ、そんなことないよ。ほら、父さんたちも言ってただろ？『人それぞれ、聞かれたくないこともある』ってさ。だからユイリスこそ謝ることなんてないんだ」

両手を振って慌てて彼女の言葉を遮る。一度彼女の花咲く微笑を見てしまうと、思いつめたような表情は見せられるでこちらが辛くなってしまう。言葉と身振りで彼女の気持ちを盛り立てるど、ユイリスは顔を上げ、上目遣いに『あの微笑み』を浮かべていた。

「ありがとう、レイル。優しいのね」

昔を思い出したのか、ユイリスの瞳は心なしか薄つすらと涙に濡れているようだった。

それはもちろん気のせいかもしぬなかつたが、なんとも言えない眼差しで見つめられた上に感謝の言葉を投げかければ、大人の女性への応対などに慣れていないレイルがどきどきしてしまっても無理からぬことだった。

言葉を失い、顔を真っ赤にして口をぱくぱくさせてしまう。なんだかつい先日体験したような気がしたが、思い出している余裕などなく照れ隠しに視線を外すのが精一杯だった。

すると、しばし間を置いた後、ゆっくりと言葉を紡ぎ始めるユイリス。

「……このトランクにはね、私の過去とともに、私が背負った『業』がつまっているの。一生忘れられない、忘れてはならない『業』が」静かな語りだった。ユイリスが過ごしてきた過去は、きっと彼女の姿とは正反対の、決して平坦ではない日々が続いてきたのだろう。短い言葉のなかに込められた深い思いがひしひしと伝わってくる。

語りながら視線をトランクへと移していたユイリスの背中は、どこか悲哀に満ちていた。つい先ほどまで笑顔を見せていたその表情

も、灯が落ちたランプのように影が射している。

やはり、昔に思いを巡らせていいのだ。いつたいどんな苦難があつたのかは想像だにできなかつたが、決して裕福とはいえないといえサイレアで平穏な日々を送つてきた自分は遙かに恵まれているであらうことはよくわかつた。

そう考へると、悲しそうにしているコイリスを見ていられず、なんとか元氣づけてやりたい、などといつ殊勝な思いが首をもたげる。とはいへ、この状況で、それも妙齡の女性に對して氣の利いたことを口にできるほど人生経験を積んでいるかと言えばもちろんあるはずもなく。自分でも思つてもみなかつたことを口走つてしまつ。

「あ、あのや、無学で悪いんだけ……『業』つて、どうこいつ意味？」

まつたくもつて空氣を読むこともへつたくれもない発言である。こんなことを言いたかつたわけではないのに、ヒロの未熟さを呪つてみるが後の祭りだ。

コイリスは顔を上げてくればしたものの、案の定田を丸くしたまま小首を傾げている。

「いや、あの、なんだか珍しい言葉で気になつたりやつたりしてさ、その」

どうにか挽回してみよつと試みるもの、口から出るのは意図不明な発言ばかり。脂汗が背中を伝つが、こんな変な汗をかくのは初めてだ。レイルは泥沼にはまりつつあつた。

ど、子犬がじゅれついているかのよつな笑い声が。コイリスだ。

口元を手のひらで押さえ、次から次へとこぼれ出る笑い声を押しとどめよつと背中を丸めている。

「コ、コイリス？」

動搖している有様について呆れ果てられた末のことか。なんだか逃げ出したくなる思いにかられつつ、彼女の名前を呼ぶ。

するとコイリスは、目尻に浮かんだ『笑い涙』を「ごめんなさい」と言ひながら指先で拭つていた。

「そっか、そうだったのよね。ここ一帯の文化圏、うつうん、宗教圏には『業』って言葉、ないものね。それなのに私つたらなに馬鹿なこと言つてるのかしら。見識がないのは私の方ね。自分の間抜けさについて笑つちやつたわ」

悪戯っぽく小さく舌を出すユイリス。普段通りの調子の彼女だ。経過はともかく、結果よければ全てよしといつことで、レイルは己の痴態を水に流すことにした。

「『業』、のことだつたわね」

とりあえず彼女が元気を取り戻してくれたことにレイルが胸をなでおろしていると、彼女はトランクを置いたまま立ち上がり、雲一つない青空を見上げ、言った。

「人が生きしていく上で積み重ねていく、善いこと、それから悪いこと。簡単に言うとそんなところかな。前者を善業、後者を悪業と言つて、それ必ず自分へと返つてくるものとされているのよ。善いことを積み重ねれば善いことが、悪いことを積み重ねれば、悪いことが」

一言一言ゆづくりと紡ぎ出すよつとして語りつつ、彼女は思い出したなにかを確かめるかのように腹の前で指を組み合わせている。背に流した亞麻色の髪が、彼女の言葉と調和するかのように静かに揺れていた。

「そんな業が、このなかにつまつているわ。それが善業なのか悪業なのか、私には決められない。それがいづれかに属するのか。このトランクと、それから……この青い空の向こうにいる人々が決めてくれるわ」

言つて、ユイリスは首を巡らし、西方彼方の空へ瞳を向けた。そちらの方角の遙か遠くにはサイレアが属しているファルアリア王国の国境であるウェゼルレーイ山脈が行く手を阻むかのようにそびえ立つてゐる。彼女が言わんとしているのはもしかしたら天上の国のことかもしれなかつたが、実際に存在しているあの山脈の向こうを指し示しているのであれば、そこにあるのは確か

「レイル」

コイリスに倣つてウェゼルレーン山脈の方を眺めつつ、その向こうにある国の名前を脳裏に浮かべようとしていると、急に名前を呼ばれたために思考を中断させる。彼女の方を見上げると、空色の瞳がこちらを見つめていた。

時に天真爛漫な少女の微笑みを浮かべたかと思えば、今のように清楚な気品を漂わせる大人の女性そのものの真剣な表情を向けてくる。幼子と大人の心を併せ持つたようなこの不思議な女性に見つめられるとなにも考えられなくなりそうになるが、そこをどうにか踏み止まる。

「貴方、『騎士』になりたいのよね」

彼女の瞳を見返すと、思つてもみなかつた言葉が投げかけられてきた。

「どうしてそれを」

「『ご両親から聞いたの、話の流れでね。でも、』ご両親はテルミト亭を継いで欲しいと思っている。それを聞いて、なぜ私より身体の小さな貴方がここから私をテルミト亭運ぶことができたのか納得したわ。きっと隠れて鍛錬を行つている　騎士になるために、つて」

息を呑んだ。騎士願望のことについて、ではない。身体を鍛えていることを見抜かれていたことについてだ。頑として騎士への道を否定している両親に知られないよう、慎重に慎重を重ねて続けていた鍛錬のことをあつさり見抜かれてしまつたのだから、驚かない方が無理というのだ。

すると、大丈夫、と言つて彼女は軽く頭を振つた。

「ご両親にそのことは伝えてないわ。私はあくまで部外者だから、貴方たち親子の問題に介入する権利なんてないもの」

驚愕がそのまま表情に出てしまつていたのだろう。己が抱いた危惧を、そこからものの見事に見透かされてしまつたことについてさらに目を丸くする。

同時に、彼女が気づいたことは、両親も同様の結論にたど

りつきやしないかという不安が首をもたげ、表情を強張らせている
と

「多分、『）両親は気づいていないと思うわ。私という突然の来訪者のことで頭が一杯みたい。だから、貴方が私を運べたこと、気づく間もなく忘れてしまつていいようだから』」

またしても、である。もしかすると彼女は本当に人の心を読める力があつて、なにからなにまで全てお見通しなのかもしれないと本気で思いたくなつた。

「狐につままれた顔してるわね。でも、別に不思議なことじやないわよ。培つた觀察眼と経験則の賜物、つて奴ね。もつともつとレイルも様々な体験をしていけば、自然とわかるようになるわ」

「そ、そうなのか。でも、なんだかそういうの面倒くさいだな。俺は別にそこまでわからなくともいいや」

相手の思考や感情の微妙な起伏がわかれれば会話する上で便利かもしれないが、どうも自分には馴染みそうもない。だいたいがほんの少しユイリスに見透かされただけで混乱してしまつ自分には100年経つても觀察眼やら経験則なるものを培えそうもなく、自嘲の苦笑いを浮かべてしまつ。

それにしても、どうしてユイリスはいきなり騎士の話を持ち出してきたのだろうか。はたと根本的なことに気づく。

「ところでさ、なんでいきなり騎士になりたいのよねつて確認したんだよ。もしかして、俺が騎士を目指すことに反対なのか？」

「あら、それなら貴方の鍛錬のことを含めて、あることないことをとうに『）両親へ話しているわ。辛辣な注釈もたつぱり添えてね。それで済むことでしょう？』」

小首を傾げて肩を竦めたユイリスの言つ通りだ。どうやら彼女は別にこちらの意思を挫こうとしているわけではなさそうだった。

ほつと胸を撫で下ろしたのも束の間、レイルは彼女の口から次に発せられた言葉に耳を疑つた。

「貴方に伝えたいことがあつたから、だから確認したの。貴方の口

から、騎士の道への思いが確かなのかどうかを

騎士の道への思い つまり、なぜ騎士を目指すのか、といつこ

とに他ならない。

騎士を目指す彼にとって、そのことは最も大切なことでありながら、実は最も触れられたくないことでもあった。彼は『ある重大な思い』を胸中に隠し持っていたのだから。

だからこそ、具体的に『騎士への道』などという言葉が出てしまえば、敏感に反応せざるを得ない。裏のない、澄んだ空色の双眸が真つ直ぐ見つめているのだから、なおのことである。

ユイリスはあくまで『レイルの思いを確認した事実をさらに反芻しただけ』だ。

だが、過敏に反応してしまったレイルは、理性では彼女の言葉の意味を理解しつつも感情が先走ってしまっていた。

すなわち、自分の奥底にある思いを包み隠すために、わざわざ自ら騎士への思い その場しのぎでしかない思いを口にしてしまったのだから。

「よ、4年前ぐらいだったかな。サイレアに立ち寄った元騎士のおつさんがないでさ、色々話を聞かせてもらつたんだ。そのおつさんの活躍ぶりがなんてか、こう俺の心を揺さぶつたっていうかなんていふか」

元騎士の活躍ぶりを表すかのように身振り手振りを交え、さらに拳を握り締めて思いを込めている様を表現してみせつつ、身体を動かすために外していた視線をちらと戻してみる。

ユイリスの目は、彼の話に笑うでもなく、嗜めるでもなく、ましてや怒るでもなく、ただただ静かに見開かれているばかり。こういう時はなんの反応もないことが最もやりづらい。

「と、とにかく、俺は騎士の格好よさに魅せられたってわけなんだ」「だから俺は騎士を目指した」と、言葉を続けようとしたが、薄蒼い眼差しに咎人の罪科を確認するために神が使うという『正義の天秤』の存在を思い出して重ねてしまつたレイルは、それ以上唇を

動かすことができなかつた。

ただ、先ほどのように胸の内を見透かされていやしないかと心配になり、空色の双眸から逃れるように瞳を閉じて胸前で腕を組んで胸を張つた。

男はこうでなくつちや と、手前勝手な思いを込めたつもりの体勢であり、もちろん単なる虚勢である。これ以上詮索されないめの現実からの逃避そのものだつた。

「ありがとう、話してくれて」

どういう反応をされるか、あたかも審判を待つ罪人のような気持ちに心を支配されそうになつていると、凜とした声が鼓膜に響いた。ゆつくりと目を開くと、後ろ腰で指を組み合わせたまま下を向き、ギヨーム川の氾濫により運ばれたまま取り残されそこら中に散ばつている小石をつま先でもてあそんでいるユイリスの姿が網膜に飛び込んできた。

その姿はまつたく警戒感を感じさせず、それは彼女に對して垂れたいい加減な能書きに対しての彼女の姿勢を表していようつだつた。子供のように小石と戯れる様を黙つて見ていると、ユイリスはそのままの体勢で再び語り出す。

「思いはね、人それぞれ。きつかけもまた、人それぞれ。そこに序列なんてない。レイルの話してくれたことも一つの真理に違ひないわ」

少し強めに蹴られた小石は、転々と転がつていぐ。その行き先に視線を送りつつ、ユイリスは流れるように瞳をこちらに向けてきた。「だから、これから話すことはあくまで貴方よりも長く生きて、様々な体験をしてきた先人からの戒め……一つの指針よ。聞き流すか受け止めるかも貴方の自由。でも、耳に入れるだけは入れてね」

既に彼女を謀っている負い目があるため、彼女の言にレイルは素直に頷いた。

その反応に満足したのか、ユイリスはありがとう、と言つて微笑み、先に見上げた青い空を、思いを馳せるかのように目を細めて見

上げていた。

「私は何人もの騎士たちを見てきたわ。主君に忠実な騎士、武勇に優れた騎士、庶民に優しい騎士、私欲に目がくらんだ騎士、殺戮の狂気に染まつた騎士……。挙げればキリがないほどなのね。ただ、彼らに見え、彼らと触れ合い、私が体験してきた上で総じて言えることは、騎士は『業』深き存在だということ。善い業を修める機会ももちろんあるけれど、正反対の業を修めてしまつ機会の方がずっと多いの」

と、そこで言葉を止めるユイリス。彼女は再びレイルへと向き直り、その眼差しを向けていた。右手を伸ばし、彼の頬を柔らかい手のひらで包み込むようにしながら。

「騎士になつてみなければわからないことが多いすぎるから、そう言われてもにわかには理解できないかもしれないけれど……貴方が貴方の望む理想の騎士を目指すのなら、貴方へ伝えた言葉を、どうか忘れないで」

温かい手のひらは、彼女の優しさを体現しているようだった。決して上辺だけなどではない、心からの思いを投げかけてくれている様がよくわかる。

にもかかわらず、自分はどうか。慮つてくれる彼女の心を真つ直ぐ見つめ返すことができるのか。レイルは複雑な思いにかられながら、それでもなにも言えずに黙つて小さく頷き、後はユイリスの手のひらの温かさに甘えていたことしかできなかつた。

それを知つてか知らずか、ユイリスはあくまで自分の調子を崩さず、彼の頬から手を引いたかと思うと両手を腰に当て、あからさまにお姉さんぶつて嗜めるかのように言った。

「さて、そろそろ戻りましょうか。お父様に『ビニ』で油売つてたんだ』つて怒られてしまうわよ。貴方、まだお使いの途中だったでしょう?」

いつもの、子供っぽい無邪気なユイリスだ。彼女の明るい立ち居振る舞いは強張つた心の氷を溶かしてくれるようで、まさしく救わ

れる思いがした。だからこそ、レイルも「いけね、忘れてた」と調子を合わせる。

半分は本当に焦ったため、まずいという有り様を表情に出すと、ユイリスはそれがおかしかったのか小さく喉を鳴らして微笑んだ。やはり、彼女にはこういう笑顔でいつもいて欲しい。それは間違いのないことだと思った。

そんなことを思いながら、腰を屈めてトランクに手をかけ、取つ手をつかんで持ち上げる彼女の様子を見ていたレイルは、肝心なことを思い出して驚いた。

彼が持ち上げようとしてもびくともしなかったトランクを、片手でひょいと空の木桶を持ち上げるかのようにして手にぶら下げたのだ。

だいたいがこの細腕で常に持ち歩いていたところとすら驚異だ。このに、まさまさとその事実を目の前で見せつけられれば開いた口も塞がらなくなるというものだった。いつたい全体、どこにそのような力があるというのか。

ただ、助け出した彼女が目を醒ました時、錯乱している彼女を押しとどめようとしてえらい力で押し返されたことを思い返すと、あながち不可能ではない気がしてくる。

してくるものの、よくよく考えればトランクの重さは『持ち上げられるかられないか』という範疇を思い切り逸脱していた。にもかかわらず、現実に彼女は苦もなくあのトランクを持ち上げ、あまつさえ鼻歌を奏でながらサイレアへ向かつて軽やかに歩き出しているではないか。

いつたいどうなつてているのか。一律背反する命題にレイルは難しい顔をして悩み込んでしまつ。

「あら、どうしたの？」

首を捻つて立ち廻くしていると、ついてこないことに気づいたユリスは立ち止まって振り返り、訝しげな眼差しを向けてきた。ただ、トランクに注がれていたレイルの視線から、すぐにその眼差し

が意図するところに気づいたようで、彼女はなんとも言えない苦笑いを浮かべるのだった。

「ああ、これ？ 基本的に私しか持てないから。力のあるなしの問題じゃないの。なんならもう一度試してみる？」

胸のあたりまで軽々とトランクを持ち上げ、どこか誇らしげに見せつけていたユイリス。

いつたいどんな理由があつて力のあるなしの問題ではないのかさっぱりわからなかつたが、理屈抜きで樂にあのトランクを持ち上げている彼女の素振りを見ると、なんだかとても悔しくなり、レイルはふいと横を向いた。

「い、いいよ別に。どうせ俺には持ち上げられないんだから」

「それは残念。なら、早く行きましょ。ほら拗ねてないで」

ささやかな抵抗を試みていると、小馬鹿にしたしつペ返しが。このまま黙つていられるかとばかりに勇んで反論しようと彼女の方を向くが、当の本人は我関せずとばかりにすたすた歩いてしまった。

「ちょ、ちょっと待つてくれよ！」

慌てて彼女の背中を追いかける。ところが、彼女は背後を一顧だにせず、そのまま歩を進めていた。

よつやく追いつくと、彼女の肩が震えているのに気づいた。

「ユ、ユイリス？」

どこか具合でも悪いのか、それとも疲れがぶり返したのか、急に心配になり問い合わせる。すると彼女は足を止め、にわかに振り返つた。その顔には一面の笑顔。なんのことはない、彼女は笑いを堪えていたのだ。

「か、からかったな！」

「だつて、慌てる様が可愛かったんだもの」

レイルも立ち止まつて抗議の声を上げるが、まったく効果なし。悪びれもせずに小さく舌を出し、10代半ばの少女のように顔をほころばせている有り様を見せつけられると、毒氣を抜かれたように

憤りも静まつてしまつ。

一方でユイリスは、こちらが毒氣を抜かれているのを他所に踵を返すと、鼻歌混じりに再び歩き出していった。あくまで自分の調子を崩さない姿勢にある意味天晴れな思いが湧きあがるなか、それでもレイルは悪くない思いを抱きながら不思議な来訪者の背中を追いかけた。

どうして彼女は騎士について造詣が深いのか　湧き上がつた疑問を尋ねなくなつたものの、調子を取り戻したユイリスの笑顔を消さないためにも、今はそつと胸にしまいこんで。

辺り一面に霧が満ちていた。視界はまつたくといつていいほど利かない。

気がつくと、この霧の海のなかに立ち尽くしている自分がいた。いつ、どうやってこんなところにきたのだろうか。思い出そうとしても思い出せない。

「とにかく、霧が薄いところまで出て、状況を確認しなきや」

どこまで行つても霧が続くということはありえない。必ず切れ目、境目があるはずだ。それに少しでも風があれば霧は対流し、視界が開けることもある。その場所を目標してまずは移動することが先決だった。

ところが、足を踏み出したとたん、彼女の動きが止まる。2つの理由が彼女の身体を束縛した。

1つは金属と金属が擦れ合う音がしたため。

もう1つは、つま先になにか柔らかいものが触れたため。

彼女はゆっくりと、音がした胸元と、そして柔らかいものに触れたつま先を確認すべく視線を下げた。

刹那、空色の双眸の中心で彼女の瞳孔は閉じられてしまつかのとき勢いで小さく絞られた。

いつの間にか身につけられている白い鎧。胸に金十字の紋章が入った、愛着のある彼女専用の鎧だった。

ありえない。今は彼女の手元ではなく、遠い故郷の大地に抱かれているはずである。

にもかかわらず、くだんの鎧を身に着けていることも驚くべきことだが、彼女の瞳を驚愕で満たした最大の理由は、城郭を彩る白亜の大理石のような美しい鎧が見るも無残に赤い血で染め上げられていたことだ。

さらによく見れば、鮮血は装甲のある箇所だけでなく全身に飛び

散っている。決して自らが血を流したわけではなく、他人の血、すなわち返り血を浴びた結果に他ならなかつた。

いつたいなにがどうなつてゐるのか、まったくわからなかつた。積み重ねてきた記憶がないため、起こつてしまつた結果だけを見せられた形なのである。常人ならばこの時点で混迷の彼方へ自我を喪失してしまつて不思議はなかつた。

彼女だからこそ、まだ自分を失わずにいられたのだ。

が、もちろん完全に平静でいられれているわけではない。見開かれた目、凍りついた表情。彼女の胸中に果てることのないざざ波が巻き起こつてゐることを表していた。

ただ、これはまだ序章に過ぎなかつたのである。

小波を拡大させ飛沫を上げる大波の猛威を呼び起こす要因が、彼女の瞳へと映り込んだのだから。

つま先に当たつた柔らかいもの。それは、血にまみれ、切断面から臓物を撒き散らした人間の上半身だったのである。

息を呑んだ。見慣れた光景とはいえ、つい反射的に『左手』で口元を押さえてしまう。

駆け巡る疑念。

全身に浴びた返り血。足元に転がる惨殺体。それが意味するところを、考へないわけがない。

彼女はそこでふと、口元を押さえる手が左手だつたことに気づく。両腕利きではあるが、基本的には右手を利き腕として使つてゐる。ではなぜ、自分は右手で口元を押さえなかつたのか。

よもや、という思いが蠟燭の灯火のように胸中に灯り、それは瞬く間に燃え広がる。すでに血色を失つてしまつた唇を小さく震わせながら、彼女は怯えの色さえ浮かびつつある双眸をゆっくり右手へと下ろしていった。

恐る恐る見下ろしたその先には、金十字をかたどつてゐる鍔を持つ、長く苦しい彼女の戦いを支え通した剣。白銀色の刀身を赤く染め、切つ先から血の零を滴らせた、殺戮の嵐を巻き起こした痕跡

を残す長剣がしつかりと握られていた。

とたん、一陣の突風が吹き抜ける。それまでの濃密さが嘘のよう

に、立ち込めていた霧は散り散りになつて隠されていた辺り一帯が

鮮明になる。

地獄絵図、といつもの実在するならば、まさに今この時のこと

を言つのだろう。

一面に広がる赤い絨毯。否、それは血の海。

無造作に転がる肉塊の群れ。否、それはかつて生きた人間の一部。

いつたい何人の、何十人の、いや何百人の死体があるのかわから

ない。彼女の剣でしかできない切断面を見せる、バラバラになつた

五体がそこかしこに飛び散り、吹き出た血飛沫が大地を汚し尽くし

ていた。

私が、

長剣を取り落とし、頭を抱える。

私が、私が、

立つていられなくなり、震えながら膝を折つて尻餅をついた。

『私が殺した！？』

天を突く絶叫。それは、全て絶望に染まつた末の心の悲鳴だつた。

激しい動悸と止まらない身体の震えに、意識まで混沌の渦に飲み

込まれてしまいそうになつた時、彼女は瞳に映つた暗闇の向こうに

浮かび上がる無機質な石造りの天井に気づき、我に返つた。

静かな室内に彼女の荒い息遣いだけが響いている。肩で息をして

いたため、まず呼吸を落ち着かせる。最後に大きく息を吸い込んだ

後、深いため息を吐いた。

瞬きすると少し目が痛い。指先で目元を触ると、涙を流した跡が

あつた。もしかしたら目は充血しているかもしない。

氣だるさが全身を包み込むなか、ユイリスはベッドに横たわつて

いた己が身体をゆっくりと起こした。

トランクを回収した帰り、レイルのお使いにつきあつた後、あて

がわれている客間に戻つてからの記憶がない。体力がまだ完全に回

復していなかつたのか、どうやらそのままベッドに倒れ込んで寝てしまつてゐたようだ。

すつかり陽は落ち、光失くした室内は薄暗さに染まつてゐる。木戸が開け放たれた窓の向こうから差し込む月明かりだけが唯一の照明であり、窓下にある机の上に置かれたトランクケースを照らし出していた。

それにしても現実的な夢だつた。いや、むしろ現実として起つて起つていたことを詳細は別として思い出しだけと云つても過言はないのかも知れない。

重苦しい胸中を振り払いつつ脚をそろえて床に降り立つ。狭い室内のため、すぐ目の前には例の机がある。

机上のトランクのこげ茶色の表面をしばし見つめた後、開閉を封じてゐる止め具に手をかける。蝶番が軋んだ音を立てるとともに蓋が開き、月の光が中へと注がれた。

「あの子に『業』の話をしたから、思い出しちまつたのかもしないわね……」

彼女とともに幾多の艱難辛苦を乗り越えてきたものの、あれから使われることのなくなつた相棒たちを見つめる。

最も上に収納されていた枯れ草色の衣服に手を伸ばし、綺麗に折りたたまれた袖に触れた。一の腕に縫いつけられた特徴のある紋章がユイリスの瞳に映り込み、かつての記憶を呼び覚ます。

「私の、『業』……か」

蚊の鳴くよくなか細い声でつぶやき、彼女は小さくため息を吐いた。

後悔はしていながら、好きで飛び込んだ道でもない。沈鬱な影が表情に張りつくのは仕方のないことだった。

だからといって自分の殻の中に閉じこもつてしまふなどということは单なる逃げである。今を懸命に生きる それだけが彼女に与えられた唯一の道だから。

沈んだ心を振り払うかのように頭を振る。トランクを元通りに閉

じるど、コイリスは机に背を向けて扉へ足を向けた。

考えてみればこの時間帯、意識を取り戻してからはずつと客間で過ごしていた。食事もレイルが運んでくれたのを口にしていたので、階下に降りたことはない。

そう言えば夜は酒場として商いしているとロイドから聞いていたことを思い出す。扉を開けて真っ暗な廊下を進み階段へと差しかかると、彼の言葉を証明する賑やかな複数の声が階下からほのかな灯りとともに上ってきた。

これだけの喧騒を耳にするのは久しぶりのことだ。賑やかなのは嫌いではないが、最近はそういう場自体に近寄ることがなかつたので、なんだか新鮮な気分になる。

暗がりから明るく照らし出された1階へ降りたため、まぶしい。腕をかざして瞳に入る光量を調整しつつ、作り出された影から室内を見回した。

初めて見た時も思ったより広いと感じた店内は、満席とまではいかないものの酒盛りをする客らでじつた返しており、ともすれば息苦しさを感じさせるほどだ。

所狭しと並べられた円卓をそれぞれ囲み、赤ら顔の男たちが杯を豪快に傾けながら談笑している。ささやかな幸せを堪能し、皆一様に満足そうだ。

彼らの間をミランが忙しく給仕に駆けずり回り、壁際に設けられたカウンターの奥ではロイドがこちらも忙しく料理の仕込みをしていた。それなりに繁盛していると話には聞いていたが、これならば彼らの言も素直に頷ける。

十分すぎる繁盛ぶりに感心しつつ、コイリスは壁際を歩いてカウンターへ歩み寄った。

するとこの店の主人もこちらに気づき、少し驚いたような顔をして迎えてくれた。

「おお、大丈夫なのか？ さつきうちのが様子を見に行つたら寝ちまつてゐつて言つてたからよ、熱がぶり返したのかとも思つてその

まま寝かせてたんだが

「少し疲れていたみたいですね。でも、お昼寝したらすっかり元気になりましたからもう大丈夫です。色々と気を遣つて下さつて本当にありがとうございます」

礼を述べながら丁重に頭を下げる。すると、レイルをそのまま歳取らせたような、彼によく似た 正しくはレイルが父親によく似たと言つべきか 店主はよしてくれと手を振つた。

「気にするこたあねえよ。むしろ、大したことでもできねえで申し訳ねえぐらいだ」

「そんなこと。レイルを始め、ロイドさん、ミランさん方々がいらっしゃらなかつたら私はどうなつていたことか

「そう堅苦しく考えんなつて。困つた時はお互い様つてやつだ。そうだらう?..」

口元をニヤリと歪めて笑うロイド。レイル曰く、頑固でどうしようもないというが、決してそれだけではないといふことをその表情が雄弁に物語つている。コイリスは彼の配慮に最大限の御礼を込め、はい、と微笑みをもつて応えた。

「ところでレイルの姿が見えないようですが」

テルミト亭に戻り、客間に引っ込んだ時に別れて以来姿を見ていな。店内にも彼の姿を確認することができず、首を傾げた。

「そりなんだよ。もう一度使いに出したんだが、どうやらまた使い先で油売つてるみたいでよ、あの野郎まだ帰つてきやしねえ。このくそ忙しい時になに考えてやがるつてんだ。帰つてきたら半殺しだな、うむ」

額に青筋を浮かべて頭に血を上らせつゝ、自分で自分の発言に納得したように頷いているロイド。この父親なら本気で半殺しにしかねないかも、とコイリスは内心苦笑いしつつ、命の恩人の身の安全を考えてせめてもの手助けとばかりにとりあえず強制的に話題を変える。

「それにしても大盛況ですね。お昼も沢山のお客様がお見えになつ

てましたけど、夜分のテルミト亭を見るのは初めてなので、お昼以上のお客様の入りに驚きました

「ところがそうでもねえんだよな、これが。見ての通り、満席じゃんねえだろ？」「

舌打ちしながら、顎をしゃくつて店内の方を示す。階下に降りた時から感じていたことを店主から指摘され、改めて確認する。彼の言つ通り、若干ではあるが空席が見受けられた。

「最盛期は席が足りなくて、家んなから私用のを引っ張り出して来て使つてたぐらいだからな。ところが今じゃ満席になりやしねえ。それもこれも、南の馬鹿帝国の奴らのせいだ」

苦虫を噛み潰したかのような顔をして、舌打ちするロイド。彼の言つ帝国とは、ファルアリア王国の南東に国境を接している大国、正式名称・神聖ラミニコラン帝国のことだ。

「そう言えば旅の最中耳にしました。ラミニコラン帝国との国境付近で彼らに不穏な動きがあると」

「やうそそうそれだ。おかげで街道筋を旅する人間が減つちまって、このやまだ。周りに迷惑かけまくりやがつて、ふてえ野郎どもだ、まつたく」

吐き捨てるように怒りをあらわにするロイド。ただ、彼の主張は至極もつともなことだった。

神聖ラミニコラン帝国は領土的野心が非常に強く、5年をかけた大南征で3つの国を侵略し、一昨年にいすれも降伏させたことは記憶に新しい。

しかし、ジョラルシア大陸西方にて東西に広がるエウロニアと呼ばれる一帯には、ラミニコラン帝国の支配下にない国々がまだまだ数多く存在している。

コイリスの故国もそのうちの一国であり、ラミニコラン帝国に比するほどの国力を備えた国だった。

その故国も3年前に勃発した内戦により国体が改められ、現在は新政府が政を執り行つてゐる。

内戦により多大な代償を払うこととなつたが、不幸中の幸いだったのは、内戦時、緩衝地帯 ファルアリア王国のことであるを挟んで火花を散らすラミニコラン帝国が大南征を行つていたことだ。

征服されるエウロニア南部の国々にとつては非常に不謹慎なことに聞こえるだらうが、あの時もし彼の大南征がなければ、故国内の内戦を契機に神聖ラミニコラン帝国は大北伐の檄を飛ばし、ファルアリア王国を瞬く間に飲み込んだ余勢をかつて、大挙して来襲してきに違ひないのである。さしもの大帝国も大南征中に反対方向までは手がまわらず、結果として故国はエウロニア南部の国々の犠牲によつて生きながらえた、と結論づけても決して過言ではなかつた。しかし、予断は許されなくなつた。大南征の完結によつて、彼らが今度は北西を目指すであらうことは明白だつたからだ。

悪名高い前政権に比べ、故国の現政権は非常に庶民的であり、国民からも慕われていた。このように政情は大変安定しているのだが、後退した国力はまだ回復していなかつた。

エウロニア西方の雄国と目されていた故国が力を削がれた今、神聖ラミニコラン帝国が『北伐』という侵略の牙を剥き出しにする好機であることは、誰よりも彼らがよく認識しているだらう。これらを踏まえると、巷の噂を单なる流言として看過することはできない。国境に近づけば近づくほど真実味を帯び、国境から街道筋の町を2つ挟んで存在しているこのサイレアでラミニコラン帝国が不穏な空氣がもたらしている現状をまざまざと見せつけられたのだ。

各国の国情と時勢、そして眼前の事実を鑑みると、自分がこの地方へと足を踏み入れた『本当の目的』は達成されつつあつた。懸念が発端となり彼女を突き動かしたのだが、それは悪い方で的中しつつある。

「どうした、難しい顔をして」

つい自分の世界に入り込んで憂いてしまつた。ロイドから声をか

けられ、コイリスは我に返る。心中を表情には出さず、何事もなかつたかのように応対する。

「いえ、別に。なに」ともなれば、と祈っていたところです」

「だな。戦争やられて一番迷惑を被るのは俺たち庶民だ。えれえ奴らはそれがわかつてねえ。まったく困ったもんだ」

腕を組み、口を山なりに歪めて心情を表している頑固店主に、コイリスは苦笑いしつつ軽く頷いた。本当は同意の声を上げたいぐらいであつたが、あえて自重する。己の過去を顧みると、客観的に見ればロイドの言つ『えれえ奴ら』と立場は違えど同じ舞台に上がつていたわけであり、彼のように愚痴を言つことなど許されない。……いや、おそらく民衆は許してくれるだらう。だが、彼女自身が自らを許さなかつたのだから。

ともあれ、神聖ラミニコラン帝国の野望はどうやら限りなく実行へと近づいているようだつた。対応を迫られているのは間違いなく、その先に待ち受ける暗雲立ち込める未来にコイリスは胸を痛めた。

「よう大将！ 大将つてば！」

複雑な思いを胸中で渦巻かせながらロイドの調子に合わせていると、唐突に客席から声が投げかけられてきた。見ると、カウンター傍の円卓を囲んでいた、見るからにがたいのよい中年の男たちが上機嫌で顔をこちらへ向けていた。

「おう、なんだ。お前らか」

「なんだじやねえよ、まったく。せつせから呼んでんのに」

どうやらこの店の常連らしく、ロイドは腰に手を当ててむつりつと顔をしかめた。それに、男の1人は不満げに赤ら顔をしかめて抗議を示す。

が、不毛なやり取りなどやつてられるかとばかりに、別の男が円卓に杯を叩き置き、コイリスに向つて指差した。

「てか、そんなこたあどうでもいい！ そこのえらい別嬪なねえちやん！」

突然のことによりコイリスもつい自分で自分を指差し、『わ、私？』

と混乱してしまつ。これに、男は額きながら口角泡を飛ばす勢いでまくし立てた。

「そうだ、あんただ！ ルイーズの代わりに新しく雇われたねえちやんなんだろ、そりだろ！」

いきなり意味不明なことを言われ困惑するが、間違いないのは彼がなにかを勘違いしているということだ。

とはい、酔っ払い相手にどう回答すればいいといふのか。答えを考えあぐねていると、ロイドが助け舟を出してくれた。

「馬鹿野郎、この人ははつちのお客人よ。ちよつかい出そうもんなら、店から叩き出すぞ！」

助け舟を出してくれたはいいが、生半可な助け舟ではなかつた。およそ密に向かつて言つ台詞などではなく、暴漢相手にでも吐き捨てるような言葉に、逆に焦るコイリス。助け舟はありがたいが、なにもそこまで……と慌ててロイドを止めようとすると、暴言を叩きつけられた時の密たちは声を上げて笑い出したのである。

「なんだよ、そなうそなうと早く言えつてばさ。危うく大将に蹴飛ばされるところだつたぜ」

「てか、お前の場合ルイーズに手を出しかけて一度本当に叩き出されてたしな」

「あれには腹抱えて笑わせてもらつたぜ。でも、そのルイーズちゃんも今や人妻……寂しくなつたなあ」

異様に盛り上がつたと思えば、今度は急に肩を落として沈み込む一団。いくら酔いがまわつてゐるからとはい、あまりにも激しい感情の起伏に圧倒され、コイリスは呆気に取られた。

「すまねえな、コイリス。こいつらここんところいつもこうでな」さしものロイドも呆れた様子で、落ち込んでゐる男たちを傍観している。コイリスは、気にしてませんから、といふ意思表示を込めて軽く手を振つた。

「ありがとうよ。ルイーズがいてくれたらこいつらももうちょっと大人しいんだが。ああ、ルイーズつてのはつこないだまでうちで

働いていた、ちょうどあんたぐらいの若い娘でな。これがよく気がつく娘で、給仕を完璧にこなしてくれていた上にだ、特技で客どもを魅了してたんだよ

「特、技？」

「ああ。歌を歌うのが上手かつたんだ。しかもリコードを手前で弾きながら、ときたもんだから、いっぱいの歌姫のようだつたぜ。常連にはかなり人気で、夜、給仕がひと段落した頃によく歌ってくれてたもんだ。ところがあんまりにも人気を博したもので、話を聞きつけた旅の金持ちだかなんだかに見初められてそのまま一緒に旅立つちまた、つてわけだ。俺としても使いでのあるいい娘がいなくなつちまつて残念極まりねえがな」

ロイドの説明で合点がいった。よくよく考えてみれば、減つたとはいえこの客の量をミランだけではさばけているはずもない。ルイーズという女性がいたからこそ、店も回っていたのだろう。

そう考えると、フュンフル家に命を救われその後の世話も受けている自分として、彼らに恩返しできる最良の方策がなんなのか答えはすぐに導き出された。

「ロイドさん」

一見馬鹿にしながらも、しうがねえなあ、という風に彼らのことを心配している人情味厚いロイドに対し、コイリスは真剣な面持ちを向けた。急に顔色の変わった若い娘に、ロイドは訝しげな目を向けてくる。

「どれだけの期間お役に立てるかどうかわかりませんが、その、私にルイーズさんの代わりを務めさせていただけないでしょうか」導き出した結論を端的に伝える。突然の申し出に、ロイドは最初彼女の言葉を理解できなかつたようで首を傾げていた。が、すぐに言わんとしていることがどうこうことが気つき、口を大きく開けて驚いていた。

「命を助けていただいた上に、ただただお世話になつていいだけであまりにも申し訳なくて」

「い、いいんだよ、あんたは気にしなくて。あんたはうちのお客人なんだからよ」

一貫して気にするな、という立場を取り続けているロイドは、ここで悪い意味での頑固さを発揮。降つて湧いた話に一瞬とまどつていたものの、すぐに我に返つて頑なにユイリスの申し出を拒絶した。感謝の意を少しでも示したい、との思いから出した提案だったが、店主であるロイドに断られてはそれ以上どうすることもできない。下手に強く申し出れば、いたずらに彼に不快な思いを抱かせてしまい、恩を仇で返すことになつてしまつ。そうまでして申し出る」とではないし、他に幾らでも恩返しの方法はあるはずだ。

「Jリはひとまず諦めるのが得策。少し残念だったが、ユイリスはそれ以上の申し出を控えようとした。

その時だった。

「ちょっと待て大将！ 健気なねえちゃんの一途な思いを無駄にす
る氣が、二の唐突木！」

なんど、先ほどとは逆に、今度は酔っ払いの一団が逆に助け船を出してくれたのである。

「ひつ二かくそ親父!!!!」

先ほどやりこめられた反動もあるのだろう。——などばかりに言いたい放題まきちらす男たち。

「なんだとここの野郎！」

売り言葉に買い言葉。怒声を張り上げたロイドは、袖をまくり上げ彼らにつかみかからんとカウンターを乗り越えるべく脚をかけていた。

助け舟はありがたかつたが、なんだか事態が複雑な方向へ向つてしまつてゐる。正直、こうなるとこの場から逃げ出したくなつてくるが、当事者の1人としての責任も感じるため、ユイリスはため息を吐きながらも、ロイドを止めるべく声をかけようとした。

「お止め！」

ロイドや男たちだけでなく、店内にいる全ての客たちの声が失われた。あれほど喧騒にまみれていた店内が、たった一言で一切の音もなく静まり返る。

怒気を含んだ女性の一喝は、全員を金縛りにしてしまつほどどの威力があつたが、ユイリスが叫んだわけではない。

ミランの声だった。

「もう、いい大人がみつともないつたらありやしない！ 恥じを知りなさい、恥を！」

栗毛色の長い髪を首の後ろ辺りで束ねたエプロンドレス姿の中年女性 ミランが、店の中央で腰に両手をあてつつ肩を怒らせて立ち、鬼の形相でロイドをにらめつけていた。

客たちの視線を一身に浴びながらも微塵すら臆することなく、彼女は大股でユイリスたちのもとへと歩み寄ってきた。

蛇ににらまれたねずみ、といつのはこういつ状況を語りのだらう。我が道を行くロイドが脂汗を垂らしながら凍りついていた。この場合、どちらが蛇でどちらがねずみかは言わずもがなである。決して美人ではないが、歳をとつても愛くるしい面立ちのミラン。だが、怒るとかなり怖い有り様をこれ以上もなく見せつけながらユイリスのもとへやつってきた彼女は、最後にロイドを一瞥すると表情を一転柔軟に変え、ユイリスを見つめた。

「いいじやない、ユイリスが申し出でくれていいんだから。私も助かるわ。ねえ？」

悪戯っぽく片手をつむり、肩をポンと叩いてくれる。手まぐるしく変化する状況にわけがわからなくなりそうだったが、ミランの温かい配慮が気持ちを落ち着かせてくれた。

「は、はい！ 頑張ります！」

少しでも恩返しができるならこれ以上のことはない。ユイリスは素直に表情を輝かせ、思いの丈を言葉に乗せるのだった。

「それでよ、その騎士はこう言つたんだ。『我と我が剣を信じ、我に続け』つてな。ところがだ、そいつが突進するのを他所に、部下の兵士は回れ右して逃げちまつたんだと」

「そりやまた人望ないな。結局その後どうなつたんだ?」

「もちろん当の本人も尻尾巻いて逃げ出したとよ。情けねえ話だよなあ」

頭を振つて心情を表している男に対し、彼の話を聞いていた相棒もちげえねえちげえねえ、と頷いていた。

やれどこそこの騎士は腕つ節は強いが人望は皆無だの、なにがしの騎士団は衆道に走りすぎて自滅しただの、知つてゐる騎士の話について片つ端からやいのやいのと話題に上げて盛り上がつてゐる2人組の男たち。その背中越しに、カウンターに座つたレイルはミルクが入つた杯を片手に興味津々とばかりに聞き耳を立てていた。

街道筋の町サイレアはその立地から人の流量が多いため、町としての規模は比較的大きく、旅人のための施設も多い。当然、レイルの実家たるテルミト亭以外にも飲食を楽しめる店は多々存在し、このリュルゾ亭もその1つだつた。

ただ、リュルゾ亭は完璧な酒場で、テルミト亭と異なり昼間から酒類の供出も行つており、レイルの実家とは様相を異にしている。

そのリュルゾ亭になぜ彼がいるのかといえば、この店の店主フェンソ＝ルロムが父ロイドの旧友だつたからである。今でも親交厚い2人は度々お互いを助け合つており、ちょっとした不都合も支えあう間柄だつた。今日2度目の使いに出されたのも、仕込みに使う調味料をうつかり切らしたフェンソのために届けるよう命じられたからだ。

指示通りリュルゾ亭を訪れ、フェンソに言いつけのままに届け物を渡すと、幼い頃からレイルのことを可愛がつてくれてきた彼は、

お駄賃とばかりにミルクを『馳走してくれた。フェンソはロイドと正反対の性格をしており、非常に温厚でよく気遣つてくれる優しい人物だったのだ。

2人の性格を比較すると水と油と言つていいほど異なり、どうすれば長い間付き合い続けていられるのか甚だ疑問であったが、レイルの理解が及ばぬところでうまが合うのだろう。

よくわからない2人の縁といつものに首を傾げつつお駄賃のミルクをすすり、レイルはここぞとばかりに油を売つていた。酒場にもかかわらずリュルゾ亭は比較的静かな店で居心地がよく、レイルもこの店のカウンターの端で油を売るのが心地よいひと時になっていたのだ。

決して客が入つていなければなく、店内の雰囲気が落ちているためにお客もその雰囲気を受け入れ、騒ぐよりもゆっくりと酒を嗜むことに喜びを感じてるから、と以前フェンソが静かな理由を説明してくれたが、まさにその通りだと思う。子供の自分でさえ居心地がいいと思うのだから、大人にしてみればよほどいい店に違ひなかつた。

フェンソにはレイルと同い歳の娘ミスリイがあり、いわゆる『幼馴染』というやつで今も腐れ縁が続いており、いつもならリュルゾ亭に使いにくるとせつかくの落ち着いた店の雰囲気を台無しにするかのごとく勢いで話し相手の獲物にと絡んでくるのだった。

幸か不幸か、日中外出していた疲れで当の本人は早晚就寝してしまつたとのこと。決して悪い娘ではないのだが、たまに度が過ぎるお喋り娘の邪魔が入らないのは素直に気が安らぐことで、レイルはささやかな安息の時間を楽しんでいた。

リュルゾ亭の雰囲気のよさは折り紙つきだが、レイルがこの店を好きな理由がもう一つあった。店内が静かなために、耳を澄ませば客同士の話が聞こえてくることだ。

客層は当然ながら旅人が多いため、酒場での談話も当然サイレアの外のことがほとんどだ。珍しい話や驚くような話が次から次へと

聞こえてくるため、実に飽きない。さらには、彼が胸躍らせるような武勇伝も聞けるため、リュルゾ亭で聞き耳を立てるのは日課のようになっていた。

今日も旅人たちの話を聞いていたのだが、丁度真後ろの円卓を囲んでいる2人組の談話は大当たりで、各地の騎士や騎士団の話に花を咲かせていたのである。

これ以上もない話題に、レイルは時間が経つのも忘れて彼らの話に思いを馳せていた。

「しかしだ。最近はとんと勇猛果敢な騎士の話を聞かなかつたが、ラミニュランの神聖騎士団は精強だな」

「ああ、大南征なんて夢物語を完遂させちまうぐらいだからな。奴らにかなう騎士団なんぞ、この辺りにやもういねえんじゃねえか？」
「言えるかもしね。あとは、フレアミスで起きた内戦で活躍しあつていう奴らぐらいか？ 単に強さって面で言えば」

情けない騎士の話題を経て、再び名のある騎士団の話へと移ったようだ。ラミニュラン帝国の話は聞いたことがある。

ただ、その後に上げられた『奴ら』というのはいったい。膨らんだレイルの疑問をさらに増大させるかの」と、彼らはさらに話を続けた。

「聞いたことあるぜ。嘘か誠か、今の政府を勝たせた立役者だったとかよ」

「ああ。化け物みたいな強さだった、と伝え聞いてる」

「でもよ、そいつら、ハーなんとか隊つて言つたか？ とにかく面子のなかに女も何人かいたつて言つじやねえか。極めつけは主席があの『聖女』だろ？ 反政府軍の象徴だかなんだか知らねえが、およそどこぞの娘を祭り上げて、士気の高揚に使つたんじやねえか？」

「確かに。実際はどいつもお飾りだつたんだらつ。どこまで効果があつたか知らんが、現実に当時の反政府軍は戦力として政府軍に劣つていたものの、士気旺盛でそのまま時の政府を打ち倒し

てしまつたんだからな。結局のことひ、現政権の力が本物だつたつてだけさ」

「となると、やつぱりラミーユランの騎士が一番つてことになるな。ここからももつと骨のある奴に出てきてもらわねえと、ファルリアなんてあつという間に滅ぼされて、俺らもおちおち商売してらんねえつてもんだ」

「ああ、まつたくだ」

一通り話しきると、2人は声を上げて笑つていた。

一方、レイルの胸中は複雑な感情に見舞われていた。途中までは心躍らせて聞き入つっていたものの、終盤彼らが口に出したとある隊の話や、その主席と言われた『聖女』のくだりを彼ら自身が否定し、貶していたことに強い不快感が湧いたからだ。

貶されていた対象についてまつたく知識がないが、人が貶されているのを喜ぶような性根を彼は持つていなかつたのである。戦時を駆け抜けた人間を誹謗することは例え真実がどこにあるうとも、平穩な酒場などで安易に口にしていいものだと思わない。

それまで心地よかつたのが一転して嫌な気分になる。その時だつた。彼の心情を代弁するかのように、彼と2人の男が形成していた空間に1人の人物が押し入つてきたのは。

「今、聖女の話をしていたな」

若い男の声だった。だが、決して青臭くなく確たる『意思の力』が込められた声であつた。

気になつたレイルは、そつと頭を傾け、横目で後背を窺つた。

黒いマントの男が立つていた。歳の頃は20代半ばぐらいだろうか。マントと対照的な栗色の髪を短く刈り込んだ長身のその男は、精悍な面立ちに絶妙に配置された灰色の双眸をもつて、例の2人を射るように見下ろしていた。

「は？ なんだてめえ」

突き刺さるような視線に腰が引けつゝも、男は大して価値のない矜持を守るためかあえて強気な言葉を吐いていた。だが、黒いマン

トの男はそれをまったく歯牙にもかけなかつたのである。

「加えて、彼女とハーキュリー隊の連中を侮辱した。そうだな」
口にする言葉に抑揚はない。ただ、落ち着きはらつた声には、子供のレイルにもわかるほどの確たる怒りが滲み出でている。それより至近で聞かされている2人の男にわからないうはずがなかつた。

「だ、だからなんだつてんだ」

案の定、男の口調が瞬く間に怪しくなる。ほんのつい先ほどまでの威勢はどこへやら、だ。

「彼女らを侮辱する奴は俺が許さん」

マントの合わせ目が若干揺れ、隠された彼の身体が少しだけあらわになる。黒いマントの向こうには、板金鎧を改造した軽装甲を身にまとい腰に長剣を下る武装された身体があつた。彼が長剣の柄に手をかけたためにマントの合わせ目が揺れたのである。

「な、なんなんだよいったい！ 頭おかしいんじゃねえかー…？」

「おい行こう。こんなやばい奴相手にしてられん」

完全に呑まれきつた2人はそれぞれに捨て台詞を残すと、尻尾を丸めて逃げる犬のようにそそくさと席を立ち、店の外へと消えて行つた。

あつという間のできごとだつた。暴言の2人が出て行つたのを契機に張り詰めた空氣が緩み、面倒ごとにには関わりたくないと思を飲んでいた周りの客も再び各自の世界を楽しむべく会話を再会させている。

ただ、レイルはまだ黒いマントへとの視線を釘付けにさせられていた。

2人が出て行くのを確認した男は、長剣の柄から手を離しマントの合わせ目を直すと、冷たく凍るような視線をこちらへ向けてきたのだ。驚き、慌ててカウンターへと顔を戻す。杯を両手で持ち、顔を伏せる。中に入ったミルクを見つめ、視線を上げない。

すると、石造りの床を踏み歩く長靴の音が一步、また一步とこちらへと近づいてくるではないか。にわかに心臓の拍動が早まり、背

筋が凍る。

自分はなにも言つていないのでかかわらず、あの冷たい視線で見据えられ、レイルの意識は完全に呑まれていた。

足音はすぐ傍まで近づき、拍動も最高潮に達した時、隣の座席に誰かが座る物音が。

強張った身体に抗い、反射的に隣を見る。すると、あの男がそこに腰かけていた。そして、彼は灰色の眼差しをこちらへ向けていたのである。

「子供がなぜこんなところにいる」

生まれて初めて体験する、静かなる威圧感。怒鳴られているわけでもないのに身が竦んだ。答えようにも声が出てこない。

「ああ剣士さん、すいません」

男の視線に射竦められ微動だにできないでると、慌てつつも丁寧さのこもった声が2人の間に割つて入った。

「その子はあたしの友人の息子でして。使いに来てくれたのを労つていたところなのです」

助け舟となつた声のおかげで、金縛りにあつたかのように動かなかつた身体に自由が戻ってきた。既に男の視線は外れ、カウンターの向こうを見ている。助け舟の主がいる方であり、レイルもそちらを見やつた。

フーンソだつた。寂しくなつてきた金色の頭髪に、見るから人の良さそうなふつくらとした面立ち。なにかと気にかけてくれるこの店の主人が、懇懃な態度でレイルを庇つてくれていたのである。年齢に見合つた場数を踏んできているからか、丁寧な物腰は崩さないものの彼はまったく臆した様子を見せず、一步も引かない姿勢を見せていた。

「そうか。仕事を果たした対価を得ていたんだな。勘ぐつてすまなかつた」

フーンソの言を聞き納得したのか、黒いマントの男は頷き、意外にも素直に謝罪してきたのだ。それまでの強硬的な言動から最もか

け離れているであろう行為を見せつけられ戸惑つたものの、逆にそんな彼に丁重な対応を取られてしまえば、とまどいながらも反射的に恐縮してしまう。

「い、いいんです。気にしてないですから」

「そうか、ならばいい」

短いやりとりだった。感情が欠落しているような素っ気ない態度はおそらく生来のものなのだろう。自分の非を素直に認めてしまうような潔い人柄から決して悪気がないことはわかるのだが、こうもあっさりしていると拍子抜けしてしまう。

鋭い眼光、存在から滲み出る威圧感、そして腰の長剣を見せつけながらも抜かずしてその場を制した男の迫力に圧倒されはしたが、実は彼に対する好奇心の方が恐れを上回っていた。騎士への思い……いや、レイルの心の奥底にしまってある思いがそうさせていたのである。

ところが、当の本人は実に我が道を歩んでおり取りつく島もない。とはいっても話しかけられるような相手ではない。ここまでだつた。

「俺はまだなにも頼んでいないが」

訝しげな男の声が。横目で見ると、カウンターに両肘をついている彼の前にビールが並々と注がれた杯が置かれていた。

「こいつは、あたしのおごりです」

フェンソだつた。温厚な表情にこやかな笑みを乗せて男を見ていた。

「彼らは常連なのですが、あまり品がよろしくなくてね。とはいっても客であることには変わりませんで、どうにもできずに少々困つていただこうだつたんです。おかげで助かりました。これで、彼らも少しは懲りたでしょ？」

肩を竦め、おどけたようにしている店主。これを一瞥した男は、表情を変えず黙したまま杯に手を伸ばしていた。フェンソのせせやかな好意を快く受け入れる思いを表すかのように。

「剣士さん、フレアミスからお越しになつたんですか?」

ビールを嚥下する男を横目で見ていると、ただでさえ近寄りがた

い外見の彼にも臆することなく、相変わらずの調子で談話を続けるフェンソ。思えばまったく性格は違えど、ロイドもどんなお客様にも分け隔てなく接していた。長年商いをしてこられたことは、ううことなのかと妙な感心を覚える。

だが、レイルの心をより動かしたのは、例の男が「ああ」と答えたことだ。無愛想なその面持ちから絶対に談話など続けることはないと思っていたため、意外なことに驚いた。

いと憤りでいたため、意外なことに驚いた。

好奇心をかきたててくれる男が口を開いてくれるのならばこれにこしたことはない。なおも話を続ける2人を、レイルはこれ幸いと見守った。

よくわかつたな

先の一軒で、聖女』でおこしやこてましたでしょ。」

今はフレアミス連合評議国でしたな。そのフレアミス連合評議国建国の功労者で、多くの民を救つたとされている『フレアミスの聖女』様ぐらいですからね。もつとも、あたしのこの話も旅のお客さんから受け売りで、委細については詳しく知りませんが……まあ、そういうことです

「 そうか。酒場の店主でもその程度の知識なら、二下風情が馬鹿なことを口にするのも無理はない」とか……」

な響きが込められていた。

「フレアミスの皆さんに、好かれてらっしゃるんですね。聖女様は、男を慮つたのか、フェンソによる話題の『聖女』について肯定的な感想が。これに男は、さにもあらんといった様子で頷いていた。「『』く自然なことだ。彼女、それに彼女を支えたハーキュリー隊がないなければあの国はいづれ滅んでいたろうよ、内憂外患でな。だが、彼女たちがあの国の體を全て出し切つてくれた。だから今があるし、

皆が彼女たちを忘れない」

「それだけの働きをなされたといつことは、さぞ剣の腕前も相当なものだつたんでしょう」

「相当、などといつものではない。彼女はエウローニア一帯で認められる称号を受け継いだ現『剣聖』だ。店主も剣聖号については知っているだらう」

「存じ上げております。剣の道を究極まで極めた者が代々受け継いでいく、剣士最高の称号ですな。ですが、剣聖号の世代交代があつたとは今まで知り及びませんでした」

「そうかもしけん。正式に式典等が行われて委譲されたわけではないからな。当のフレアミスでさえ、聖女としての彼女を知つていても剣聖としての彼女を知らん輩は少なくない。国外ならなおのこと窺い知らぬ者も多いことだらう」

男はそこで息継ぎをするかのように杯をあおり喉を潤すと、ほんのわずかではあるが過去を懐かしむかのように初めて表情を和ませ、続けた。

「彼女は本当に強かつたよ。俺も腕に覚えがあつたが、彼女は別格だつた」

「剣士さん、立ち合つたことがあるので?」

「ああ、初めて見えた時はお互い敵同士だつたからな。何度か立ち合ひ、持てる力を振り絞つて剣を繰り出したが、全て彼女の聖剣に阻まれた。それどころか、その聖剣の餌食になるところだつた。斬られなかつただけ幸いといつところだらうな」

どこか自嘲気味に語る男ではあるが、その表情に悔しさや憎悪は皆無だ。命をかけて戦つた相手なのだろうが、彼の口調には相手に対する敬意と賛辞が窺い知れた。それはすなわち、心から相手

『フレアミスの聖女』を認めている証だらう。

強者のみが知りえるであろう『敵を称える』といつ感覺にどこか羨ましさを感じつつ、レイルはこの青年剣士がもしかすると相当名のある人物なのではないか、と思い始めていた。

フーンソらの話で『フレアミスの聖女』が比類なき功績とともに恐るべき剣術の達人ということはよくわかつた。

では、その彼女と渡り合つたということの男は、

立ち合つたことを騙るなら、わざわざ自らの力が劣つていたようには口にしないだろう。斬られなかつただけ幸い、などと。だいたい、男の言動を見聞きしているととてもなにかを騙るような人物には見えない。

興味を通り越し、レイルの思いは憧憬へと変わろうとしていた。

「……酒が入つたからか珍しく舌が滑らかになつてしまつたな。雑談は終わりだ。店主、実は聞きたいことがある」

盛り上がつてきたと思った矢先、男は省みたのか不意に昔話を止めてしまつ。代わりに口にしたのは、彼がここに来た本当の目的であらう内容だつた。それは、胸ときめかせる物語の終焉に落胆したレイルの目を大きく見開かせる。

「人を探している。亜麻色の髪の女性だ。年の頃は20歳ぐらいになると思う」

嚥下したミルクを吐き出しそうになつた。男がフーンソに尋ねた人探しの対象。それは至極見知つた人間の特徴に合致していたからである。

ただ、男の質問を受け、首を傾げながらも答えるフーンソが戸惑つたレイルの心中を落ち着かせてくれる。

「20歳ぐらいで亜麻色の髪の女性、ですか。この町にも若い娘は多いですし、なにせ街道筋ですからねえ。亜麻色の髪の娘もよく往来しているます。もう少しなにか特徴がありませんかね」

まさしくその通りで、亜麻色の髪の若い女性など別段珍しくもない。そもそもあの彼女といきなり重ねてしまつ方がおかしいと、レイルは勝手に納得し、自らを落ち着かせるためにも再びミルクを口に含んだ。

「『コイリス』レンフィア』、と名乗つてゐるはずだ」

さすがに今回は堪えることができなかつた。レイルは白い液体を

思う存分カウンターに吐き出した。

「おいおい、大丈夫かい？ 变なところに飲み込んでしまったのかい？」

突然ミルクを噴出したレイルを心配し、怒るビビචが優しく声をかけてくれるフェンソ。

「『』ごめんなさい。ちょっとむせちゃって。あ、お、俺戻らないと。油売ってるって父さんに怒られる」

「おやそうかい。ああ、いいよいよ、あたしが片付けるから」作り笑顔を無理やり浮かべて自らを取り繕いつつ、席から立つ。汚してしまったカウンターをどうにか綺麗にしようとするが、店主はやんわり気にするなと気遣ってくれた。

「本当、ごめんなさい。おじさん、ご馳走様。またね！」

フェンソの言葉に甘えると、レイルは例の男を視界に入れないと踵を返してリュルゾ亭を後にした。

急ぎ戻らないといけないことを思い出したことは本当であり、現に足早にテルミト亭へと向かっているが、きっかけとなつたのはもちろん男の言葉だった。

あの男はユイリスを捜している。亞麻色の髪の若い娘という特徴だけならまだしも、なんと姓名並べて名指ししたのだ。勘違いの類であるはずがなかつた。

立ち居振る舞いはぞんざいだが決して悪い人間には見えない。ただ、過酷な戦場を渡り歩いてきたあの男のような人物と、殺伐とした空気がまったく似合わない明るいユイリスに接点を見出すことができず、困惑する。友人知人がユイリスを探している、という形にはどうしても見えないのだ。

もしかすると昔の恋人かなにかかも 不意に浮かんだ思いに、
レイルは胸がちくりと小さく痛むのを感じた。

これまでにない感覚に戸惑うが、すぐに軽くかぶりを振つて無理やり打ち消す。

そんなことよりも、彼のことをユイリスに伝えるべきかどうか。

いざれが適切なのかをテルミト亭に着くまでに考えねばならない。
降つて湧いた話に頭を痛めつつ、足取りが重くなりそうになりながらも歩を進めるのだった。

違和感を覚えたのは、聞き覚えがある音色が鼓膜を打つためだ。テルミト亭へと小走りに向かっている最中、あともう一息というところまでの路地へさしかかっている時に当の自宅方面から聞こえてきた音色。それはリュートが奏でる旋律だった。

リュートとは、共鳴口、卵を半分に割ったようなマホガニー製の胴体、その胴体から伸びる短い棹と、途中から後方に折れ曲がった棹の先端から支点を経由して胴体に張られている羊の腸でできた複数の弦が特徴的な楽器である。しかも、弦を指で弾く、というより撫でつけるようにして音楽を奏でるという特性を持つていた。

今はもう辞めてしまつたが、ついこの間までテルミト亭には母以外にもルイーズという若い女給があり、給仕がひと段落した頃に彼女が客の要望に応えて披露していたのがそのリュートによる弾き語りだった。

どこで覚えたのか、その演奏と歌声は旅人たちの乾いた心を潤し、大層人気だったことは記憶に新しい。度々レイルも心を和ませてもらつたものである。

が、当の演奏者はもうこの町にはいない。また、この辺りでリュートを所有している店や人家は他になく、やや甲高い独特の物悲しい旋律をつま弾き出しているのはルイーズが残していくた我が家のリュート以外には考えられなかつた。

とはいへ、両親がリュートを弾けるはずもなく、結局誰にも触られることなくほこりをかぶつていたのだ。それが今、美しい音色を奏でている。

いつたい誰が弾いているのだろうか。

不可思議なできごとに粛然としない思いにかられながらも、レイルはたどり着いた我が家、いや、我が店の扉を開けた。

リュートの音色は確かにテルミト亭のなかから奏でられているも

のだった。9割方埋まった店内はむさ苦しい男どもで一杯だったが、やかましいのが身上の彼らにもかかわらず静かに耳を傾けている。

基本的に音楽とは無縁な彼らが神妙な面持ちでいるのはいつ見てもどこか滑稽であり、なんとも言えない苦笑いが込み上げてきそうになるのを堪え、レイルはリュートを弾く奏者の姿を探す。

瞳に飛び込んできたのは意外な人物。

店の奥の壁際に置かれた椅子に足を組んで腰かけ、膝上に乗せたリュートの弦を軽やかにつま弾いていたのは、なんとユイリスだったのだ。

演奏に集中するためか、はたまた自らが奏でる旋律に聞き入っているのか、彼女は瞳を閉じたまま軽やかに指を動かしている。

数多くの弦を有し、ただ演奏するだけでも至難なリュートから美しい音色を導き出しているその姿は、昨日今日リュートを弾き始めたのではなく、それなりに経験を積んできたということを雄弁に物語っていた。

美しい音色に聞き惚れ心ここにあらず、という状態になりつつあつたレイルだが、むつりと顔をしかめた父親がカウンターから手招きしている姿を視界の端に捉えてしまい、一気に現実へと引き戻させられた。

回れ右して逃げ出したい衝動にかられるが、実行に移せばどんな酷い目に合わせられるか知れたものではない。被害を最小限に押さえるためにも、ここは堪えるしかなかつた。

「どこほつつき歩いてたんだ、この馬鹿息子が」

カウンターへ歩み寄ると、早速辛辣な言葉が向けられてきた。ただ、ユイリスの演奏に配慮してか怒鳴られることはなかつた。

「フェンソおじさんのどこでお駄賃もらつて話し聞いてた」

「また油売つてやがったな。つたくしょうがねえ野郎だ、猫の手も借りてえ時に」

肩を竦めながらも正直に話すと、ロイドは眉間に皺を寄せて目を吊り上げた。が、すぐに鬼の形相を緩める。

「まあいい。ユイリスが給仕を手伝ってくれたからよ、どうにかこうにか方がついた。今日ばかりはユイリスに免じて許してやる。後で礼言つとけよ」

意外にも強く叱責されることなく、あっさり赦免されてしまった。いつもなら拳骨の1発や2発、当たり前のようになに飛んでくるというのに。

虚を突かれて目を瞬かせたが、父親の態度がなぜいつもと異なり軟化しているか、そのからくりに気づく。

確かにユイリスの演奏に気遣つてゐるもあるのだろうが、この短気な父親が怒鳴り散らさずにいられるのは彼の言う通り店の仕事をユイリスが手伝つたからだらう。カウンター近くでゆつたりと壁に身を預けてユイリスの演奏に聞き惚れている母親の姿を見れば、ユイリスがどれほど貢献したか己ずと知れてくる。でなければ、母親はいまだに店内を右往左往していたに違いないのだから。

綺麗な人は気難しいという偏見だけでなく、家事も満足にできないし、だいたいがそのようなことは一切しないという偏見を持つていたレイルは、またしても自分の偏狭さに恥じ入る思いを重ねていた。

とはいゝ、給仕はともかくリコートの演奏までしているのはどういう経緯なのか。父にその旨を問い合わせると、明快な答えが返ってきた。

「ルイーズのことを話したから給仕を手伝つてくれたんだが、弾き語りの件も話していたらなんとそれもできるつて言つじゃねえか。なんでも歌とリコートが得意で、路銀が寂しくなつてると町々の酒場で弾き語りをして小銭を稼いで旅を続けきたんだよ」

「それでリコートを」

「ああ。少しでも店の役に立ちたいって言うからよ、とりあえずやつてみなつて言つたらこれだ。俺は音楽のことはよくわからんが、ルイーズに勝るとも劣らない腕持つてるのは直感的にわかつたぜ。なによりもこいつらが聞き入つてるのがいい証拠だな」

顎をしゃくつて店内を示すロイド。その先にはコイリスの奏でる音色に耳を澄ましているむくつけき男どもがいる。

「音楽なんぞくその欠片もわからん奴らを黙らせて聞き惚れさせるんだからよ、それだけでも大したもんだ」

そう言つ彼もまんざらでもない様子でコイリスを見ている。この父親をも籠絡してしまう彼女のリコートに脱帽しつつ、レイルはふと気になつたことを尋ねた。

「父さん、コイリスは歌とリコートが得意つて言つたんだよね。今はリコートを弾いているだけだけど、もう歌つたりもしたの？」

「いいや。とりあえず何曲か歌なしで弾いから弾き語つてみるつてたぜ。最近リコート触つてなかつたから、最初は練習代わりなんだ」とさ

なるほど、と頷く。とすれば、彼女の歌声はこれから耳にすることができるわけだ。

凛とした張りと可愛らしさを併せ持つた彼女の声で歌えば、きつと素晴らしい歌を披露してくれるに違いない。いやがおうにも期待が膨らむ。

彼らの思いを受けてか、弾いていた曲が丁度よく終わる。男たちの無骨な拍手と歓声が店中に響き渡り、静から動へと切り替わった感情の盛り上がりが彼らを支配していた。

堂に入ったもので、熱烈な拍手を受けても動じることなく軽く会釈して応えるコイリス。音楽で路銀を稼ぐという常人にはできないことをしてきた実績が彼女をそうさせているのだろう。

レイルも心からの拍手を送つていると、それに彼女が気づいた。どこか嬉しそうに頬を緩め、こちらへ向かつて軽く手を振つてくれる。

その愛らしい様に呑まれ、ぎこちない笑みを浮かべて反射的に手を振り返す。すると、そのやりとりを見ていたお客の何人かが思い切り嫉妬を込めてこちらを睨みつけてきた。こうなると浮かんだ笑みも苦笑いに変わらざるを得ない。

男たちの痛い視線を気にしないよう努めながらコイリスへ手を振つていると、彼女は小さく頷いて店内を見回し、言った。

「皆さんありがとうございます。それでは、リュートに合わせて『生命の祈り』といつ歌を歌います。ご清聴いただければ幸いです」とたん、汀につけ寄せた波が一斉に引いていくように、静まり返る。

静寂を見届けたコイリスは再び口を開じ、ゆっくりと弦をつま弾き始めた。

前奏だろうか、リュートの音色をあらためて音に堪能させた後、彼女はゆっくりと唇を開いた。

蒼くまばゆい空
希望を映し出して
白く優しい雲
恵みを与えて

はるか緑の野は
癒しを導く
紅く燃ゆる日輪
豊饒の約束

悠久の時が
静かに満ちる
木漏れ日のゆうぎ
葉揺らすそよ風

この大地に生きる
全ての息吹に
傳くも一握りの

幸よあまねく

「Jの大地に生きる
全ての息吹に
永久に安らかなる
光よあまねく

歌い終え、リュートの調べも静かに幕を下ろす。

静まり返る店内。身動きすらしない男たちに戸惑つたのか、ヨイリスは怪訝な表情を浮かべたまま再度会釈をする。

だが、まだ男たちに反応はない。さすがに心配になつたのか、探るよう皆を見回すヨイリス。

「あの、お気に召さなかつた……のかしい」

その一言が契機となつた。

とたん、割れんばかりの拍手と店の外まで余裕で聞こえてしまうであろうほどの歓声が一斉に沸き起つた。

ヨイリスの歌声が気に入らなかつたから皆黙していたのではない。あまりの素晴らしさに圧倒され、言葉を発すことすらできなかつたのだ。

「すげえ、すげえよねえちゃん！」

「俺あ感動して泣きそくなつちまつたよ！」

感極まつた彼らの歓声を聞けば、皆がいかにヨイリスの歌に心を揺り動かされているかがよくわかる。店にいた男たち全員が立ち上がり、思い思いに熱のこもつた言葉を投げかけ、惜しみない拍手を送つていた。

レイルも音楽について詳しいわけではない。それでも、リュートの腕はともかく、彼女の美声は彼のルイーズを遥かに超越していた上、聴く者をその世界に引き込み魅了してしまつ奥深さに溢れた歌声だと感じたのは、理屈などでは推し量れない領域で心を揺さぶら

れだからに違いない。いつの間にか、自身も手のひらが痛くなるほど拍手をしていったことが、なによりも彼女の歌声に心から惹かれた証である。

それにもまさかこんな特技がユイリスにあつたとは。なるほど、これならば路銀が乏しくなった時に美声を披露すれば懐を温めることはできるだろう。彼女が女1人で旅を続けてこられた真相に、妙に納得するレイルだつた。

『生命の祈り』によつて一発で『テルミニト亭の歌姫』と密らに認められ、我先にと群がつてきた彼らに声をかけられているユイリスの、少々困った表情を浮かべながらも笑顔で応対している姿を何気なく見やりながら、ふと彼らとは反対側に目をやる。

皆がユイリスのもとへと馳せ参じて行つてしまつたために、打ち寄せた波が引いた後のようにその一帯は空席だらけになつてゐる。だからこそだつた。1人残つてゐる若い男の姿にすぐに気づいたのは。

痩せ型で頬もこけ気味の男は、年の頃はまだ20歳前後ほどであり、短く刈り込んだ銀髪と蜥蜴を思わせるような細く鋭い目元が特徴できだつた。

レイルの体が強張つた。

まるで彼の態度に呼応するかのように当の男もレイルを見やつたからである。

男は、口元を醜く歪めた。獲物を見つけて歓喜した様を見せつけるかのように。

おもむろに立ち上がると、彼はユイリスと彼女のことでの盛り上がり、つてゐる他の客のことなど見向きもせず、悠然とした足取りでこちらへ向かってきた。

これに、レイルは身動き一つできずに立ち尽くしている。眼差しは男から外すことができない。握り締めた拳は小刻みに震えるえりだけで、振り上げられることはなかつた。

自身より頭1つ分大きい男は、レイルのもとまでやつてくると視

線も口調も見下ろす形で言った。

「久しぶりだな。元気そうでなによりだ」

本来であれば、再会を喜びつつ相手の息災を喜ぶ挨拶の言葉。それも、彼が口にするとまったく優しさも労わりも欠片もない。上つ面だけの单なる言葉並べにしか過ぎないというのはいつもながら感情を逆なでしてくれる。レイルは強張つて動かない体に歯噛みしながらも、せめてもの抵抗の意を込めて男をにらめつけた。

「そんなに怖い目をするなよ。お前に逢えて俺は嬉しいんだぜ？ こここのところ仕事が忙しくて、腕がなまつて仕方ないと思つていたところだつたからな」

男は薄気味悪い笑みを顔面に貼りつけたまま親指を立て、その指先を屋外へと向けた。

「い、今からなのか？」

「今夜は月が明るい。夜の闇は障害にはならないぜ」

降つて湧いた話にまともに言葉が出てこない。見透かしたように鼻で笑い、男は続けた。

「わかつてゐるよな、自分の立場。ただでさえあの娘の件で譲歩してやつてるんだぜ？ ま、俺はかまわないけどな、この店には新しい女給が入つたようでもあるし」

男の視線がにわかに動く。眼差しの先には、客たちに囲まれた美声の歌姫が一人。男の意図がなにを指し示しているかはすぐに理解できた。

「わかつた、わかつたよ。だから、彼女にも、ユイリスにも手は出さないつて約束しろ」

ユイリスまでこの男の脅威にさらさせるわけにはいかない。レイルに選択権は一切存在していなかつた。

「ほう、ユイリスって言うのか、あの女」

レイルの憤りなどまるで眼中にないかの「」とく、男の視線はユイリスに向けられたままだ。

怒りが男に対する苦手意識を上回つた。固まつたままだつた腕が

自然と降り上がりかかる。

「おいおい、こんなところでやるのか？ 彼女に迷惑かけちまうぜ」
男は困ったように 実際には微塵も困つてなどいないに違いない
いのだが 肩を竦めると、顎をしゃくってコイリスの方を指し示す。

彼女を巻き込まないと決めた以上は、今ここで揉め事を起こすのは得策ではない。なにより両親にまで知られてしまう。頭に血が昇つていたためにカウンターにいる父親のことを失念していたことに気づき、恐る恐る横目で見やる。

レイルの決意に対しても天が味方してくれたのか、はたまた邪な存在の気まぐれか、父はこちらのやりとりに気づいた様子なく、ユイリスと彼女を囮んで騒いでいる客たちの様子を面白そうに眺めていた。

安心すると幾分冷静さが戻ってきた。レイルは振り上げかけた腕を下ろした。

とはいえる、安息の時が戻ったわけではない。彼に選択肢など「えられていなかつたのだから。

「とにかく、今夜は付き合つてもらうぜ」

冷たい現実をそのまま表しているかのような物言いだった。踵を返してテルミト亭から出て行く男の背中は、有無を言わさぬ壁となつて存在していた。

力を込めた拳を握り直すと、皆に気取られぬよう注意を払い、レイルは男 ゲイン=ガルドの後に無言で続いた。

満天の星空の真ん中に、真円を描いた満月が」とさら存在感を誇るようにして浮かんでいる。夜空の王のような風格に溢れた丸い天体の美しい姿をそのまま見とれていたい気持ちにかられるが、体中の傷に冷たい夜風が撫でつけたことで走った鋭い痛みによつて、幻想的な星空とは真逆の現実へと引き戻される。

両手両足を投げ出すようにして、ギョーム河の河原に仰向けになつて倒れていたレイルは、木剣で打ちつけられた全身の打ちみの痛みを堪えながら、ゆっくりと上体を起こした。

「どうした、もう終わりなのか？ 早く立てよ」

体を起こすと正面にはグエインがいた。瞳に嗜虐的な光を灯した彼は、己がレイルのことを痛めつけたにもかかわらず、まるで他人事のよう立上がることを強制していた。

「……おとら体がなまつて仕方ないと言つたろ？ はいここまでつてのはいささか早すぎることもんだ。もう少し楽しませてくれよ」

余裕に溢れる様を体現するように、一切構えず手にした木剣を肩に担ぐよにして、グエインの言葉には、皮肉という香辛料がたっぷりとまぶされていた。

その程度ならば散々聞かされてきたためにいまさらどうということはなかつたのだが、彼が立て続けに発した台詞は看過できるものではなかつた。

「約束だろ？」『果し合い』に負けたくせに、ずうずうしくも寝言を漏らす誰かの顔を立ててやつてるんだ。それとも、もう誰彼はばかりずにおまえの可愛いミスリイをいただいてもいいつてことなんだな？」

「誰ももう終わりって言つてないだろ！」

はらわたの煮えくり返る思いが体中の痛みを上回り、傍に転がつていた自身の木剣を引っつかむとレイルは跳ね起きるよつたにして立

ち上がった。

木剣の切つ先と憎悪に満ちた眼差しをグエインに叩きつける。

「おお怖いねえ。でもよ、そうこなくっちゃな」

まったく恐怖心など感じていらないだろつこ、肩を竦めて見せるグエイン。その目は歓喜に満ちていた。

許せない。

レイルの体は不敵な男に向かつて飛び出した。

渾身の力を込めて右上段から木剣を繰り出す。

男は唇の端を歪めて待ち受けていた。

木剣が空を切る。

叩きつけられるべき相手を失つた切つ先が大地をえぐり、攻撃が失敗したと悟つた時はもう遅かった。

嗜虐的な笑みを満面に浮かべた男の顔が視界一杯に広がったかと思つと、次の瞬間肩口から凄まじい衝撃が全身を貫いた。

あまりの痛みに膝が折れ、踏ん張ろうとする意思が湧き起こる間もなくレイルは前のめりに倒れ伏した。

「残念だつたなあ。えれえ気迫だつたが、そんなもんだけじゃ相手は倒せないぜ」

上方から嘲笑が響いてくる。すぐにも立ち上がり、再度木剣を叩きつけたかった。

それは虚しい願望だつた。彼の肉体は今の一撃を受けたことにより限界を越えてしまつたのだから。もはや、体の自由は効かなかつた。

せめてグエインをひと睨みしてやらねば收まりなどつかない。このまま大地を舐めるだけというのはあまりにも惨めだ。

首をほんの少し傾けて見上げる動作にもかかわらず、体の自由が利かなくなると驚くほどの労力を要した。

それでも懸命に首を傾けようと、そのことに集中していたからだろうか。

グエインの嘲笑がいつの間にか止んでいたことに気づいたのは、

それまでの余裕などどこかへ捨ててしまったかのように驚愕に表情を凍りつかせ、木剣を振りかざしたまま全身を強張らせてた彼の姿が瞳に映りこんでからのことだった。

答えはすぐに判明した。

なぜならグエインの喉元には、細いながらも木剣ほどある長さの木の枝が微塵も揺らぐことなく突きつけられていたからである。

ただでさえ驚くべき光景ではあつたが、耳をついた言葉はレイルをさらに驚かせた。

「そこまで。もう彼はなにもできない」

女の声。それも、聞きなれた女性の声だった。

視線をグエインの喉元から細枝を伝わせていくと、聞こえた声に違わぬ人物が月明かりに照らし出されていた。

いつも柔軟な微笑みをたたえていたユイリスの横顔は、それまで積み重ねてきた彼女の印象を全て打ち砕いてしまうほどに冷徹なもの一色で染められていた。一切の妥協や反論を許さない、毅然とした意思の力が彼女の全身から放たれることは、疲弊した意識のなかでも感じ取ることができた。

今の自分でもわかるのである。であれば、氷の意思を直接ぶつけられているグエインはどうか。油汗をたらし、小刻みに震えていることから答えは明らかだつた。

にもかかわらず、彼の体が弾け飛ぶようにしてあとずさつたのはほとんど反射的なことに違ひなかつたが、その行動は徒労と終わる。瞬きするほどのほんの少し前と同じ光景が繰り返されていたからだ。細枝の先から逃れようとしたものの、グエインの喉元にはユイリスの氷の意思が突きつけられたままだつた。彼の逃げ足など足元にも及ばない驚くべきほどの反応を見せ、ユイリスは先ほどと変わらぬ光景を再現したのである。

いや、完全な再現ではなく若干の変更があつた。

先ほど、触れるか触れないかの距離でグエインに突きつけられた細枝の先は、わずかではあるが今は彼の喉元にめりこんでいたのだ

から。

「これ、ただの細い枝だけど、私ならこれでも貴方の喉笛をたやすく貫くことができるの。嘘か誠か、試してみる？」

とんでもないことを事も無げに言つてのけるユイリス。こちらに背中を向ける形でグエインを追い詰めていつたために彼女の表情は窺い知れないが、あの冷然とした表情のまま彼に言い放つたであることは容易に想像できた。

なぜなら、あれだけ高慢な態度を続けていたグエインが、なにも言い返すことができずにとうとう腰を抜かしてその場に尻餅をついてしまったのだから。

いや、彼女にあの動きで細枝を突きつけられれば、大抵の人間はなにもできずに圧倒されるに違いない。無茶なことに聞こえる彼女の言も、本当に為しえてしまうのではないかと思わされるほどに。

いつたい、ユイリスは何者なのか。

剣術を修める段階になど到底及ばぬ今のレイルでも、ユイリスの体捌きが尋常ではないこと、あのような動きはなにも知らない市井の女性になど逆立ちしても真似できないことは理解できる。

グエインに袋叩きにされた傷の痛みも忘れ、微塵も臆する様子のない彼女の背中を、レイルは惹きつけられるように見入つていた。

すると、グエインが戦意を喪失したことを見て取つたからか、こちらを振り返つた彼女と目と目が合つ。

あの冷徹な眼差しを向けられるのかと一瞬竦んだものの、それが杞憂であることはすぐにわかつた。それまでの、感情の欠片も感じさせない表情などあたかも幻だったかのように、彼女は至極心配気な面持ちを向けてきたのだから。

「レイル、しつかり」

細枝を放り捨てて小走りで駆け寄つてきた彼女は、膝を折つて座りこみ、ゆっくりと上体を抱き起こしてくれる。そのまま自分の膝上に優しく載せてくれた彼女は、次に体のあちこちを確認するかのようにそつと触り出した。

どのみち体の自由が効かないのと為すがままにさせていると、ヨイリスは肩を撫で下ろしてつぶやいた。

「よかつた。やっぱり折れてなかつたわ、貴方のここ^ノの骨」

安心したもののそれまでの心配がたたつたようで、安堵のため息を漏らしたヨイリスはレイルの鎖骨を指さした。そこは最後にグエインから強烈な一撃を受けた肩口からそう遠くなかった。

「他の傷も数が多いけど、打ち身で済んでる。折れたりはしていいから。大丈夫、きっとすぐによくなるわ」

彼女の指摘には迷いがなく、的確のように思える。確かにありえない方向に腕や足は曲がつていなし、骨を折ったことはないために折れた痛みというのはわからないがそこまで酷い激痛というのも感じなかつた。

色々と彼女に尋ねたいことがあつたもののそれらは頭のなかで錯綜し、ようやく口にすることができたのは至極単純な問いかけだった。

「どうして、ヨイリスがここ^ノ？」

「お店での貴方と彼、尋常じやない雰囲気だつたから。心配だつたから、貴方たちが外に出ていつた後どうにか私もお店を抜け出して探しのよ。でも、すぐに追いかけられなかつたからなかなか貴方たちを見つけられなくて。けど、間に合つてよかつた」

言つて、彼女はようやく強張つた表情を緩め、困惑と安堵が入り混じつたような微笑みを浮かべた。

ヨイリスの様子から、彼女が心から気にかけてくれているということがわかる。素直に嬉しく思え、傷の痛みも引いていくような気がしたが、それも束の間のこと。次に彼女の唇が紡ぎ出した言葉は、湧き上がつたしばしの安寧を根こそぎ吹き飛ばす十分な威力を持つていた。

「それで、なぜこんなことに？」

「当然の問いかけではあつた。

逆の立場であつたら自分も同じ台詞を吐くだらう。

ただ、それは今最も耳にしたくない台詞でもあった。コイリスの唇からこぼれた問いかけは、まさに忌避したい台詞そのものだったのである。

できるのであればこのまま黙つていたかった。

だが、彼女はそうすることを許してはくれなかつた。口調こそ優しかつたが、こちらを見下ろしているコイリスの瞳には一切の嘘やごまかしを許さない光が灯つていたのだから。

もはや言い逃れることは叶わない。レイルは観念し、これまでの全てを打ち明け始めた。

ことの発端は半年ほど前、当のグエインとリュルゾ亭の当主であるフェンソの娘ミスリイの間で起こつたいざこざだった。

もちろん2人に面識などはなかつたのだが、サイレアを跨ぐ街道を利用している隊商の1人としてこの町に立ち寄つたグエインが、たまたま町外れで出会つたミスリイに目をつけてちょっかいを出したのがきつかけとなつた。レイルはその場に偶然出くわしたのである。

当然のことながらミスリイは彼を拒絶していたのだが、それでも執拗に迫るグエインの姿を見、レイルは座視して看過することなく2人の間に割つて入つた。

もつとも、ミスリイをその場から逃がすことには成功したが、その道の手練でもないのに歳も体格も上の大人の男相手に立ち向かつて無事に済むはずもなかつた。レイルはグエインに叩きのめされてしまつた。

この時は素手で立ち向かつたのだが、善戦空しく先ほど同様に大体に大の字になつて天を仰ぐこととなつたのである。

それでも彼は諦めず、ミスリイに手を出すなど息巻くと、思いもかけない提案がグエインから持ちかけられたのだ。

すなわち、ミスリイに対して余計な手出しをしない代わりに、グ

エインが属している隊商がサイレアに立ち寄る度に剣術の相手になれ、という条件だった。

グエイン曰く、最近剣術に入れ込んでおり仕事の傍ら木剣を振るつて修練しているとのこと。

ただ、より実戦を意識した修練をするには相手がいた方がいいに違いないのだが、隊商にはその相手がないという。そこで、修練の相手としてレイルを求めてきたのだった。

力ではグエインに敵わない。彼の提案を足蹴にしてもミスリイを守ることはできない。

彼の修練の相手になる　　レイルはその選択肢を受け入れたのである。

大人の助けを求めることが考えなかつたわけではない。

しかし、レイルは男としての矜持が、座して負けたままでいることを許さなかつたのである。彼はまだ大人ではなかつたが、もうただの子供でもなかつた。

こうして、グエインとの間に結ばれた取り決めに従い、彼がサイレアに立ち寄る度にレイルは剣術の相手を務め続けてきたのである。「そう、そんなことがあつたの……」

レイルの上体を抱き起こし膝上で支えた状態のまま黙つて彼の話を聞いていたユイリスは、表情を曇らせながらそうつぶやいた。と、彼女はなにか続けようとしたものの躊躇する素振りを見せた。

それでも意を決したように唇を開いた彼女からの問いかけは、今回的一件が暴露した時点でいざれ明らかになることであり、もはやレイルにとつて動搖することではなかつた。

「ねえ、レイル。貴方が日々鍛錬を積んでいた目的っていうのは」

「その通りさ、あいつに勝つためだよ。取り決めたあの日　　半年前のある日から欠かさずに」

自分で決めたからには、誰の手も借りずにこの問題を解決したい

それが彼の信念となり、以来、彼は彼なりにグエインをねじ伏せて全てを取り消せるための努力を続けてきたのである。残念な

がら今のところはその努力も実を結ばずにいたが。

「それじゃ、貴方から騎士になりたいと半年前ぐらいに打ち明けられた、どご両親から聞いていたけど、騎士のお話は鍛錬のことがあれ2人に万が一知られた時のさながら逃げ道？」

真剣な眼差しを向けて来るコイリスの鋭い指摘に、レイルは素直に頷いた。

親に今回的一件を知られたくない以上は、もし鍛錬していることが明らかになつてもその理由づけを事前に匂わせておけば色々詮索されることはないだろうと考えたためだつた。

グエインとのことがなくとも、元々レイルには心躍らせる武勇伝や強い剣士への純粋な憧憬が多少なりともあり、その様子を両親は見てきている。突然騎士への道を切望したとしても、驚きこそすれ意外には思われないという布石もあつた。

「この一件、ミスリイさんには？」

「親にだつて言つてないんだ。ミスリイにだつて言つもんか。これは俺自身が選んだ道だから。誰にも頼らないで片付けるつて始めたことなんだ。だけど、コイリスに助けられちゃつたもんな……情けないよな、俺」

絶対にどうにかしてやると始めたことだつたが、結局なにも進展しないまま今日まできてしまつた拳句のこの結果であるのは動かし難い事実だ。

悔しかつた。自然と手に力が込められ、拳を握り締めた。唇をかみ締め、伏目がちになる。

不意に覚えのある柔らかい温もりが頬を包み込んだ。

目を見開くと、全てを受け入れてくれるよつな優しい微笑みを浮かべたコイリスがこちらを見下ろしている。頬を包み込んだのは、温かい彼女の手のひらだつた。

「そんなことないわ。貴方は情けなくなんてない。だつて、まだ終わつたわけじゃないでしょ？」

そう言って彼女は急に茶目っ氣を出したかのように片目をつむつ

て見せていた。

「いつたいどいうことなのか目を瞬かせていると、彼女は『まあまかせなさい』という風に頷いた後、グエインへと視線を移したのである。

「話は聞かせてもらつたわ。レイルと貴方の間で結ばれた取り決め、ことの経緯はどうあれレイルが同意している以上は『有効』と私も認めます。でも、こんなことはいつまでも続けてはいられないと思う。そこで相談なのだけれど、一つ取引といいかしら？」

なにを思ったか、いきなりグエインに取引という提案を投げかけるユイリス。予想しなかつた彼女の言動に、レイルは口を大きく開けたままにも言つことができなかつた。

「日をあらためて貴方とレイル、2人の手合いの機会を設けること。そして、そこでもしレイルが貴方を圧倒して事実上の勝ちを収めたら、ミスリイ嬢はもちろんのこと、彼にも今後一切の手出しをしないということ。どうかしら、受けてくださる？」

なにを頼んだわけでもないのに彼女は独断で次から次へと取り決め事項を並べていく。

事実として、それらはこちらにとつてのみこれ以上のないうまみのある提案だつた。ただそれは、相手が受け入れてくれた場合に有効なのであつて普通に考えて受けいられるわけがなかつた。

ユイリスに圧倒されてから腰を抜かして呆然とし、これまでの過程を彼女に伝える間も魂を抜かれたようにしていたグエインだつたが、彼女の提案には我を取り戻し、さすがに目を剥いていた。

「そ、それじゃ俺が勝つたらどうするんだ。あんたの話だと一方的な取引じゃねえか」

もつともな反応だつた。ユイリスの提案した取り決めは、そのままであればグエインにとつてなんら得はないからである。彼が勝つた場合について言及されていながらだ。

グエインの指摘は的を得てはいるが、言うがままに彼が勝つた場合の話しまで進んでいくのであればもう後戻りできなくなつてしま

う。

「コイリスが止めなければレイルはグエインにそのまま弄られていたのであり、すなわち2人の現在の力関係を如実に表している。このことを考えれば、日をあらためたとしてもレイルがグエインに勝つなどという楽観的なことを誰が思いつくというのがだろうか。

これ以上話が進むことを止めなければならない。慌てて声を上げようとした彼を遮り、コイリスはとんでもないことを口にしたのである。

「貴方が勝つたら そうね、貴方の好きなようにしていいわ」

「ユイリス！？」

レイルは声を裏返して彼女の名前を叫んだ。当たり前である。コイリスは涼しい顔をして、とんでもないことを表明したのだから。自分が立ち入る機会をつかみ切れない間に事態はとんでもない方向へと進もうとしている。立て続けの驚くべき事態に目を白黒させていると、すっかり余裕を取り戻したグエインも彼女の提案を受け即座に切り替えしてきた。コイリスに負けず劣らない要求を突きつけてきたのである。

「じゃあ、あんたには俺のものになつてもうづぜ」

無茶苦茶な要求にも驚いたものの、それ以上に意外だったのは当のコイリスがさらに涼しい顔 それこそ親しい友人からのたわいのない頼まれごとを2つ返事で受けるかのような顔で、

「ええ、かまわないわ」

などと答えたのである。これにはたまらず声を張り上げた。

「ちょ、ユ、ユイリス！ 待ってくれよ！」

止めようとするが、彼女はこちらを一瞥して『大丈夫よ』と小さい声で制すると、再びグエインへと視線を戻した。

「俺は明日ここを経つが、一週間後また仕事で立ち寄る。立ち会いの日はそれでいいか？」

一方のグエインは既に立ち上がり、何事もなかつたかのように服についた埃を払いながら先ほどの無様な姿などまるで嘘のような口

ぶり。そんな彼に対し、ユイリスも何事もなかつたかの「」とく至極平然と頷いている。

2人の間であつていう間に話が進んでまとまつてしまつたことに異を唱えようと身を乗り出すと、目敏いグエインに咎められた。

「見苦しいぜ、レイル君よ。女に守つてもらつておいて」「た」「たぬかすな。ま、短い時間でせいぜい腕磨いておくんだな」

見下した笑みを浮かべながら吐き捨てたグエインは、最後にユイリスへと『待つてろよ、俺のユイリス』などという氣色の悪い捨て台詞を残して踵を返した。

去つていく仇敵の背中を苦々しく見つめていたが、すぐに我に返り、全身の打ち身の痛みなどおかまいなしで体を起こしてユイリスから離れたレイルは、彼女と真正面から向き合つた。

「どうしてだよユイリス。どうしてあんな取り決め交わしちやつたんだよ。見てただろ？ 俺はあいつに叩きのめされてたんだよ！？」

これまでだつてそうさ。それなのに、勝てるわけないだろ！？」

最初は冷静でいよつと思つたものの、言葉を連ねていろはうちに段々と熱を帯びてしまつ。

先ほどグエインに叩きのめされたこと、これまでもそつだつたことを顧みると虫唾が走つたが、どんなに悔しくても目を背けても事実は事実。現時点でレイルがグエインに勝てる要素などはなにもない。

にもかかわらず、ユイリスは勝手にグエインととんでもない取り決めを交わしてしまつた。あまりにも無謀すぎる取り決めであり、もしレイルが負ければ彼女はグエインの手中に落ちてしまうのである。ただレイルが負けるだけでは済まされないので、自然と声を荒げてしまうのも無理のことだつた。

ところが、当のユイリスは先ほどからずっと涼しい面持ちで、自分がなにを取り交わしたかも自身の今置かれている状況がいつたいどれほど危機的であるかもまったく意に介していないようだつた。

「ユイリス！ どうしてそんな落ち着いていられるんだよ！？」

「それはそうよ、レイルが勝つんだから。レイルにもミスリイさんにも、そして私にも、彼は指一本触れることはできないわ」

「どうしてそんな、そんなことが言えるのさー?」

「彼女がなおも落ち着き払つてるので、レイルはさりげに強く迫つた。

返つてきたのは、射抜くように真つ直ぐと向けられた双眸と、意外な言葉だった。

「言えるわ。だって、貴方は本当に強いから」

まつたくもつて予想もしていなかつたことを言われ、今日何度目かの絶句を味合わされるレイル。そんな彼をよそに、ユイリスは少しも搖るぎのない口調で、

「私にはわかるの。貴方が持つている『力』のことを」と言い切つた。

どうしてそこまで言い切れるのかその根拠がまつたくわからず、レイルが言葉を失つたままでいる。ユイリスはまぶたを伏せ、おもむろに立ち上がつた。

「確かに、今までは彼には勝てないでしょうね。でも、貴方が本来持つていてる力は彼を凌駕しているわ。これまで勝てなかつたのは、その力を有効に引き出せていなかつたから」

再びまぶたを開き、天上の月を見上げながらにかを確かめるかのようにゆつくり、静かに語る。満月と美しいユイリスの姿が重なり、ついレイルはその光景に見入つてしまつが、彼女の言葉から彼女が先ほどなにを為しえたかを思い出す。

「ユ、ユイリス、いつたい君は……。そ、そうだ、グエインへのあんな細い枝での突きだつて、普通の女人にはできないよな……」

勝つことなどできずとも、何度も対決したことでグエインの力量はよくわかつてゐる。一流の剣士などには及ぶべくもないだろうが、町の不良者などよりはよほど優れた剣を使う。剣術に傾倒していると吹いているだけでなく、実際修練を重ねてゐる結果に違ひない。

考えるまでもなく、ただの市井の女がビリーハークができる相手ではなかつた。

にもかかわらず、ユイリスはグエインを遙かに圧倒し、つけ入る隙をまったく与えなかつた。あのグエインが腰を抜かしていたのである。その光景は今思い返すと實に胸のすくものではあるが、それとユイリスの一件はまったく別のことだ。

そもそも、彼女はあくまで旅の人であり彼女の経歴は謎に閉ざされている。

先日、例のトランクをギヨーム河の川縁に取りに行つた時、彼女の過去を聞ける機会があつたが、あえて聞かなかつた。人それぞれ、聞かれたくないことがあるという父親の教えに共感していたのだから。

今は状況が違う。どうして彼女がそこまで自分のことを押すのか、その根拠はいつたいどこからきているのか、そしてそこまで押せる彼女とは何者なのかを確かめねば前へ進むことはできない。

彼女からの答えを求め、レイルは河原に座り込んだままユイリスを見上げた。

月を見つめていた彼女もこちらの視線に気づき、空色の瞳を真っ直ぐに向けてくる。そこに、一切の搖らぎはなく、問いかけているこちらがまるで詰問されているかのよつた気になつてくる。

固唾を飲んで反応を窺つていると、彼女は形のよい唇を開き、少しもよどむことなく語り始めた。

「私はただの旅の女よ。でも、女の一人旅は危険が大きいわ。あれば、自然と自分で自分の身を守る術を修める努力をするのが最低限の身だしなみというもの……わかるでしょ？」

確かに彼女の言う通りである。一人で諸国を回る旅の女性が、まったく自身を守る術もないという方がおかしい。

「その点、私は貴方よりも多くの経験を積んできているし、実戦も経験しているわ。だからこそ、貴方が持つ力もわかるのよ」

繰り返し重ねられる言葉。ユイリスはレイルに対しきりに『

力』があるという。しかもそれはグエインを凌駕してしまつほどである。

ユイリスには戦う力が確かにあるのだろうし、それはグエインに對して証明してみせた。その彼女であれば、他人の力を見抜くこともできるのかもしね。だが

「でも、俺にはそんな力……わからないよ」

それがレイルの正直な氣持だった。

いくら言葉で言われても、實際問題当の本人には実感のつかめない話に他ならない。なにより、いくら努力してもことじとくグエインに返り討ちにされている現実を見ればユイリスがどんなに持ち上げてくれてもそれを安易に信じることなどできるわけがない。

伏し目がちになり、肩を落としてうつむく。

と、月明かりを遮るように田の前に人影が立ちはだかった。

「彼と戦うことを選んだのは他でもない、貴方でしょう？　そのために酷い目にあっても、これまで頑張つてこれたんでしょう？」正論が胸を突いた。今回、いつになく徹底して叩きのめされたために意氣も消沈していただけになおのこと胸に迫る言葉だった。だからこそ、自分を客観的に省みることができた。確かに今日は酷くやられたが、だからといってこれまでの努力を自分自身で否定することなど馬鹿げている。

なにより、彼女の言う通りグエインと戦う道を選んだのは他ならぬ自分なのだ。であるのなら、その道を追求するのが筋というものではないか。それこそ、あらゆる手を尽くして。唇をかみ締め、レイルは顔を上げた。

腰をかがめ、両手を両膝に当ててこちらを覗き込んでいるユイリスは、先の厳しい物言いが嘘のような優しい微笑みを浮かべて、

「だから、ね？」

と一言。

そこまで言われて奮い立たないほど、レイルは腰抜けではない。弱気になつていた自分の心と決別するかのように表情を引き締め、

彼は亞麻色の髪の麗人を見つめ返しながら頷いた。

「その意気。貴方の勇気、最後まで諦めないと心、どうか忘れないで。大丈夫、私がついているから」

輝く太陽のように明るい笑みを一杯に浮かべたユイリスは、威勢のいいことを言いながら身を起こしていた。少し前まで悲壮感に埋もれていたレイルだが、現金なことに彼女のその笑顔に魅了されて見とれてしまう。もつとも、次に彼女が放つた一言によつてあつさり我に返らざるをえなかつたが。

「私にまかせて。今度はレイルが彼を引きずり倒して叩きのめせるようにしてあげるから」

白い歯を見せて茶目っ気たっぷりに大言を吐いて笑うユイリスに対し、レイルは信じられないものを見たかのように目と口を大きく開いて言葉を失うほかなかつた。

私にまかせて 誰であろう、ユイリス＝レンフィアが口にした言葉である。

次から次へと大言を吐いたのは伊達ではなく、グエイン＝ガルドとの一件から一夜明けた早朝から彼女の指導は開始された。

朝靄がまだそこらに立ちこめる、まだ人々が寝静まっている時刻。レイルとユイリスはギヨーム河岸へと赴いていた。

元々この時間、レイルは半年前から散歩と称して毎朝ギヨーム河岸へ出向いては秘密の修練を積んできていたのだ。そこにユイリスが帯同するといつても散歩の道連れということで両親への言い訳はついた。

加えて漁もして店の食材を手にいれるという理由をでっち上げ、さらに数時間稼ぐことに成功。反面、量の多寡はあれど実際に獲物を持ち帰らなければならないという負債を背負うことになってしまったが、それは心配ないとユイリス。

実際に修練するのはレイルだから、私が釣りしてればいいでしょう？ と至極簡単に言つてくれる。

そんな簡単に釣れるもんか、と釣りを愛好する身ならではの文句が口を突いて出そうになつたが、戯言はすぐに喉元まで出なくなつた。

ユイリスが指導する修練が始まつたからだ。

「剣の構えはなかなかのものね」

「武勇伝を聞かせてくれた元騎士のおっさんから基礎のさわりを教えてもらつたからさ」

言われるがままに携行した木剣を構えると、ユイリスはあたかも感心したかの？とく笑顔を見せた。

しかし、それは悪戯な魔女の笑顔だったことにすぐに気がつくこととなる。

「それじゃ、ちょっと打ち込んでみるわね」「えっ？ と彼女がなにを言つてているのか理解できずに目を丸くするレイル。

言葉の意味を理解する間もなく、木剣は乾いた音とともに彼の手から大空高く舞い上がつていた。

手が恐ろしく痺れている。当然だ。握りしめていた木剣をユイリスが同じく手にした木剣で思い切りなぎ払い、弾き飛ばしたからである。

なんの予告もなしに行われた上、あまりの手の痺れに呆然としてしまつたが、弾き飛ばされた木剣が河原に落下した音が契機となつて我を取り戻す。

「い、いきなりなにすんだよ！？」

「あら、いくら手合いだからって真剣勝負には違いないわ。取り決めがあつても油断した方が負けるのは自明の理よ。修練はもう始まつていいんだから、常に意識を張りつめておかなければいけないわ」「そ、それにしてもいくらなん」

レイルは最後まで抗うことができなかつた。

先ほどまでの笑顔がまるで嘘のように凍りつくような冷めた瞳がこちらを見据えていたのだから。

「レイル、私が貴方は一週間で彼に勝てると言つたのはね、馴れ合いを一切なくしてそれこそ死ぬ氣で修練するという前提を踏まえて言つたのよ。どんな理不尽なことでも乗り越えて心と体を虐め抜いてこそ、貴方の持つ潜在能力は初めて花開くわ。私の言つていること、間違つてる？」

言い返せない。多少強引とはいえ、彼女の言動は目指すべき方向を違えていなかつたのだから。

だが、彼女が次に放つた言葉には即反応する。そうでなければ、自分はここに立つてゐる意味などないのだから。

「彼に勝ちたくないの？」

「勝ちたいさ！」

試すような眼差しを向けてくるユイリスに対し、拳を握りしめ、視線を逸らすことなく見返した。すると、こちらの意志を推し量るかのように黙つていた彼女だが、不意に相好を崩した。

「結構、男の子はそうでなきや。それに、レイルに頑張つてもらわないと、私、あの彼の慰み物になっちゃうわよ」

満足したように澄まし顔で頷いているユイリス。

さすがに呆れて、それは自分が言い出したことだろ、という文句が喉まで出かかつたが、堪えて何も返さない。彼女の助け舟がなければ負け続けの泥沼から抜け出すきつかけさえつかむことができなかつたのだから。

それに、ここで文句や愚痴をたれることは今直面している問題からただ逃げることにしかならない。今はユイリスを信じ、彼女についていくしかないのだ。

弾き飛ばされた木剣を黙つて取りに行き、再びユイリスに向かって構えを取る。

これに、少し驚いたような表情を見せた彼女だが、それはすぐに微笑みに変わつていた。

見当違ひなのかもしれないが、彼女の微笑みはどこか自身の頼もしさを感じてくれたような色を湛えていた。

ユイリスの修練は初日から過酷を極めた。

まず、木剣の素振り千本。回数も尋常ではなかつたものの、それ以上に一振り一振りについての正確さを徹底することについて特に厳しく指導された。

脇を締め、振り上げた木剣を最短距離で鋭く振り抜く 簡単なようで毎回正しい形を維持するのは至極難しい。少しでも形が崩れたり剣筋が揺らいだりすると、すかさず注意を受けた。

それでもどうにか終えた後に待つていたのは、地獄の体捌き修練だつた。

まずは下半身の動きが大事と、決められた順番での足捌きをとにかく何回も繰り返させられた。同じ動作の反復も苦痛だったが、それを重ねる体力の問題もあった。

不幸中の幸いは、元々恵まれた体力を持つていた上にこの半年の独自修練が生きていた点である。走り込みによつて下半身の地力がしつかりついていたために、どうにか彼女の指導にも耐えることができたのだ。並の少年ならばとうに根を上げていたに違ひなかつた。足捌きの次は上半身も使つた全身での体捌き。

小枝を結んだロープを巨木の枝からおおよそ上体の高さにくるよういくつもぶら下げ、その下に立つ。そしてユイリスが長い棹で次々と小枝を叩いていくのだ。

当然ながら小枝は不規則に揺れまわり、一群の真下に立つているのだから当然それらがぶつかつてくることもある。これを教え込まれた体捌きの基本姿勢を保つたまま全てかわすという、過酷を極める修練だった。

ぶらさがつている小枝も全てが同じ高さにあるわけではない。例え目線の高さの小枝をかわしてもそこだけに気を配つていると、次に腰辺りへ小枝が迫つてくるともうかわせない。

小枝だけに当たつてもほとんど痛くはないが、修練の意義をまつとうするために消耗する体力は尋常ではなかつた。結局ほとんどかわせないままユイリスから休憩の指示が出た時には、既に足腰が立たなくなつていた。

ところが、ユイリスの指示はあくまで休憩であり、決して修練の終了とは言わなかつたのである。

そう、この後に恐怖の実戦修練が待つていたのだ。

実戦修練に際して、ユイリスから出された課題はただ1つ。

素振りと体捌きで学んだことをとにかく忠実に守つて打ち込んできなさい　　彼女はそれだけを口にすると、至極自然体で木剣を構えた。

その美貌を除けば、どこにでもいる「く普通の市井の女性にしか

見えない彼女が手馴れたように木剣を構えている姿は、何も知らなければ誰もが激しく違和感を抱くだろう。

一方、レイルは彼女がごく普通の女性などという概念をもはや捨てていた。

グエインと対峙し彼を圧倒したユイリス、素人には及びもつかない過酷な修練を次々与えてくるユイリス、そして一見自然体に見えてどこからどう打ち込んでいいかわからないほど隙のない眼前のユイリス。

彼女がただ者ではないと証明する最後の仕上げは、この実戦修練だった。

隙はなくとも打ち込まねば修練にもなにもならない。逆立ちしても彼女にかなわないのは百も承知で、与えられた彼女の言葉を意識しながらもレイルはユイリスへと立ち向かった。

教えられたばかりのこと 剣の扱い方を忠実に再現し、力一杯打ち込む。

両腕に強烈な衝撃が走り、危うく木剣を弾き飛ばされそうになつた。力を込めてどうにか情けない事態は回避したが、打ち込んだはずの木剣は明後日の方を向いていた。

ユイリスが己の木剣でこちらの目一杯の打ち込みを振り払つたのだ、それも片腕で。

呆気に取られそうになるも、そんな暇はなかつた。

木剣を振り払つた後の彼女の腕は、緩い橢円を描いて戻つてくるなどというなまやさしい軌道を描かず、鋭角に切り替えして再び迫つてきたのだから。

慌てて避けようとするが、気がついた時には左太ももに彼女の木剣がめり込んでいた。

激しい痛みが体の芯を貫き、意図せず片膝をついてしまう。それでも、決して痛いと叫んだり、弱音を吐いたりはしない。

「レイル、体捌きは？ 今のは左足を引いてかわすか、手首を捻つて木剣で受けたかしなければいけないわ。真剣なら今の一撃で貴方

の足、斬り落とされていたわよ」

木剣を支えにしてどうにか立ち上がると、待っていたのは情け容赦のない指摘だった。いつものユイリスの面影など一切なく、いたわりの言葉も一言すらない。

だが、それも全て自分のことを考えてくれているからこそなのだ。手厳しい指導にすぐに根を上げ、不満をぶちまけるような腐った性格を持つていいないレイルは、彼女の思いを無駄にしないためにも痛みを堪えて立ち上がった。

なにくそ、と己を励まし、今度は力加減を調整して彼女の対応に反応できるよう再び打ち込んでいく。

ユイリスが手加減をして受け手を務めているのはレイルの目にも明らかだった。しかも彼女は動きやすいズボンなどではなく、いつものスカート姿。それでも、彼の木剣は彼女の体をかすりすらしなかつた。

もつとも、彼女に対してもに打ち込んで行けたのは、最初の一撃の他には2、3度ほどしかない。

実際はほとんど守勢に回るしか打つ手はなく、ユイリスの木剣はこれでもかというほどレイルへと襲いかかってきたのである。

ユイリスの剣は疾風のごとき。彼女の剣を基準とするならば、もはやグエインの剣術などどんなに間口を広げても比較の対象にすらならない。

彼女の剣速は常軌を逸していた。どうにか切つ先を視界に入れ、反応し、回避しようとするが、彼女の剣からは絶対に逃れられなかつた。

さらに、軽快さが女性の剣という印象があつたものの、彼女の剣はさらに恐るべき破壊力までも伴っていた。あのほつそりとした体のいつたいどこから屈強の男顔負けの凄まじい力が出るのだろうか。最初に受けた太ももへの一撃といい、直撃すると体の芯まで響いた。何度も息をつまらせるほどの苦痛が伴つた。

それでも、ユイリスは修練を止めなかつた。

もちろんレイルも止めはしなかつた。逃げ出したい思いは皆無だつたかと問われれば、答えは否だ。

だが、彼の意地が、矜持が、それを許さなかつたのである。ミスリイのため、ユイリスのため、なにより自分のためにも。

とはいへ。夢中でユイリスに立ち向かつたが、いつの間にか先日グエインにやられた時同様、河原に大の字になつてへばつていた。気ばかり急いても、慣れていない体が先に限界を迎えるのは自明の理だつた。

「お疲れ様。今回はここまで」

なんとかして立ち上がろうとしていたところに天より降つてきた救いの声。

先ほどまでの一切の妥協を許さない冷徹なユイリスではなく、いつもの優しいユイリスだつた。既に天に昇つた朝日の輝きに負けない、柔和な笑顔を浮かべつつ手を差し伸べてくる。素直にその手をつかむと、軽々と引き起こされた。

「よく頑張つたわね。貴方ぐらいの年頃の、いわゆる普通の男の子だったら、最初の千本すら全うすることもできずに音を上げているわ。私の修練を一通りやり通すことができたのは、貴方がこれまで独自に修練を重ねてきた成果よ」

厳しさに満ち溢れた剣とはうつて変わって、穏やかな声でこの半年の成果を褒めてくれるユイリス。空色の瞳は優しい光をたたえていた。

褒められてへそを曲げるような偏屈ではなく、まだ大人社会の汚さに影響されていない素直な心のままのレイルにとつて、彼女の言葉は激しい修練で疲弊した心身を少なからず癒してくれた。

とはいへ、妙齢の美しい女性から褒められるなどということに慣れていない彼は、恥ずかしさに空色の瞳からつい視線を外してしまつ。それを知つてか知らずか彼女は、「大丈夫?」と労つてくれた。空色の瞳から逃れたのは疲れたからではないのですぐに否定するが、彼女は満足そうに頷いていた。

「でもね、肝心なのはこれから。なんと言つても今日を入れて彼との手合いまで実質6日しかないもの。まとまった時間は朝しか取れないけど、少しでも時間を見つけて、できることをしていきましょうね」

輝くような笑顔もつかの間、それまでの笑顔から一転して表情を引き締めた彼女の意図は、締めるところは締める、というところにあるのだろう。

それこそ望むところである。この半年味わってきた屈辱を思えば、肉体的な厳しさが勝るユイリスの修練の方がはるかに耐えられる。もう鬱屈した日々には戻りたくないし、糺余曲折あつたとはいぐウェインに勝つて全てを清算できるかもしれない機会を得た今こそ全力を尽くす時だった。

レイルも表情を引き締め、真剣なまなざしを彼女に向けながら頷いた。

気概を込めた姿勢にユイリスも納得してくれたのか、再び相好を崩してくれている。今はそれだけで十分だった。

修練を終えたレイルとユイリスは、休む間もなく慌てて川釣りをすることとなつた。

朝の散歩だけでは説明のつかない時間を外出で費やしたが、こうなることは事前にわかつていたため、これを偽装する目的で『店用の食材を確保する漁をするのだ』と無理矢理両親を納得させて出て来たからである。

当初はレイルが修練している間に手すきのユイリスが獲物を釣り上げる、という目論見だったのだが、見通しが甘かつた。

なかなかどうして、世の中の均衡は保たれているものである。天は二物も三物もユイリスに与えていたが、こと釣りの技術に関してはその限りではなかつた。

レイルが必死になつて木剣を素振りしている横で彼を指導しつつ

釣り糸を垂れていたユイリスだが、引きが来るどころか彼女の釣り竿は微塵も動かなかつたのである。

長い旅の最中、幾度も魚を釣り上げたことがあると彼女は言つていたが、話を聞くとどうも削つて槍状にした木の枝を駆使し、小さな渓流の浅瀬で直接小魚を獲つていたことを指しているようだつた。あれほどの剣術を見せつけるユイリスのことだ。その方法で魚を獲ることぐらいぞうさもないことだらう。

しかし、まかり間違つてもそれは『釣り』と呼べるものではなく、今回一匹たりとも釣り上げることができなかつたのは至極当然の結果だつた。

ユイリスの技術的問題はとりあえずさておき、これから回を重ねて行けばもちろん不漁に終わる時もあるだらうが、初日からいきなり手ぶらで帰るというのもいまひとつ説得力に欠ける。

結局、修練が終わつた後に2人で必死になつて釣りをする羽目になつたのだ。

さすがに釣りを趣味としているレイルだけあって、ユイリスとは違ひ目に見えた結果を出した。

時間が限られていてるのでさすがに次々と、とまではいかなかつたが、携行した籠の底が見えなくなる位には釣り上げることができた。これならば両親から疑惑の目で見られることはないだらう。

一方ユイリスの戦果は、小指ほどの大きさの小魚一匹。剣術等々でレイルがユイリスに勝るものはなかつたが、こと釣りに関してはユイリスの完敗だつた。

「もつと簡単にいくと思つていたのに。なんだか自信無くしちゃうわ」

サイレアへと戻る途上、小さな林に切り開かれた林道を並んで歩いていくと、気持ち肩を落としたユイリスが力無くぼやいた。

ということは「あれ」で自信があつたのかと。さすがにどう応えていいかわからず、レイルは引きつった笑みを浮かべるだけだつた。とはいへ、なにをやらせても完璧、ないし完璧に近い結果を見せ

てきたユイリスにも苦手なものがあつたと判り、これまで以上に親しみを覚える。考えるまでもなく全てが完璧な人間など存在するわけもないのだが、これまでのところ目立つた隙をほとんど見せなかつたユイリスだけに、今回の一件は彼女との距離を一層縮めてくれたような気がしていた。

いまだにあの結果が気に入らないのかぶつぶつと愚痴を垂れ流し続けている姿に対し、胸中で苦笑することは禁じ得なかつたが。

剣術や剣術に対する心構えは彼女から教えを請うてはいるが、お礼に釣りの仕方を教えるというのも、もしかしたら少しでも借りを返せるのかも知れないなあ、などとたわいもないことを考えていると、不意にユイリスの足が止まつた。

突然歩みを止め、いつたいどうしたのだろう? と隣の彼女の顔を見上げようとした時。

「頭下げ!」

鋭い叫び声。同時に、いきなり頭を押され、視界の中で空が回つた。

次の瞬間、目の前にあつたのは雑草がちらほら生えた茶色い大地。レイルはすぐに自分が地面に押し倒されたことに気づいた。

押し倒した張本人はもちろんユイリス。彼女も大地に伏せ、油断なく周囲を見回していた。

「ユ、ユイリス? いつたいどうしたんだよ」

当然の質問である。説明抜きで地面に押し倒されたのだ。心の準備もなにもなかつたので、倒された時に体をかばつて地面に着いた手も痛い。いささか憮然とした表情をして抗議の姿勢を見せるのも当たり前のことだった。

が、レイルは一の句がつけなかつた。ユイリスはグエインに対して見せた、あの恐ろしいほどの氷の表情をしていたのだから。

もちろんそれはレイルに対してではなかつたが、他者に決して反論を許さない圧倒的な威圧感の前に言葉を失わざるを得なかつた。「ごめんなさい、レイル。でも仕方なかつたの。その幹、見て」

何が起こつたかさっぱりわからず、挙げ句にユイリスの厳しい表情を見せられ呆然としていたからだろう。さすがに周囲を警戒する姿勢は解かなかつたものの、こちらに配慮してくれたのか顎をしゃくるようにして頭上を指し示していた。

言われるがままに見ると、林道脇に立つ木の幹に数本の鋭い金属が突き立つていた。それは紛れもなく短剣であり、丁度人の頭当たりの高さに突き立つてゐる。もしユイリスが押し倒してくれなければ、命中していたのは自身の頭かもしかつた。

さすがに恐ろしくなつて生睡を飲み込む。そうしてゐる間にも、ユイリスは意識を張り詰めさせ、いつでも不測の事態に対処できるよういつの間にか木剣を握り締めていた。

「いるわ。でも1人？」

彼女の言葉に恐る恐るレイルも周囲を見回すが、人の姿など視界に入つてこない。

「気配に悪意は感じない。いつたいなにが狙いなのかしら」なるほど、ユイリスは相手の気配を感じ取つてゐたのだ。とすると、相手が短剣を投げたのを直接見たわけではなく、投げる気配を感じ取つて身を伏せたということになる。

そこでふと思つ。

昨日から少しづつ蓄積されていた疑問だ。

彼女は自身が身につけた戦う技術は、旅の最中に襲い来る脅威から自分の身を守るためだと言つた。

その主張は至極真つ当だ。しかし、女性の身であればおのずと限界があるだろう。幼い頃から剣士や騎士を目指して修練した上での戦う技術と、旅路の中で身を守るために後々覚えた戦う技術には必ず差が出てくるはずだ。なぜなら後者はあくまで自衛を目的としており、最低限の戦う力さえあれば事足りるのである。

だが、先ほど見せた彼女の反応といい、視界にない相手を気配で感じ取る能力、なにより昨日の対グエインから今朝の修練まで存分に見せつけられた筆舌し難い強さを考えると、どう覇廻目に見ても

自衛の為の力を遙かに超越しているとしか思えなかつた。

彼女にどんな過去があつたのかはわからないし、そのことを彼女が隠している以上知る術はない。

だが、彼女に問うことはできない。これまでにもやんわりと拒絶されているし、なにより父親譲りの『人それぞれ、聞かれたくないこともある』という考えがレイルには浸透していたからだつた。コイリスに謎は多かつたが、決して信義にもとるような人物ではない。今は彼女を信じてついていけばいい。

そう考へると、こんな時は彼女の強さがとても頼もしかつた。もつとも、比較するのも愚かしいが、彼女に比してなにもできない自分の力のなさに幾ばくか気落ちさせられもしたが。

「どうしたこと？ 無警戒で近づいてくる」

色々と思ひを巡らせているレイルとは違ひ、片時も気を抜いていなかつたコイリスはやにわに立ち上がつた。

レイルも彼女に倣い、慌てて立ち上がる。続けて表情を崩さないまま彼女が見据えている方向を彼も見、息をのんだ。木立の間を抜け、人影がこちらへと向かつていた。

見覚えのある人物だつた。

忘れるはずがない。昨日リュルゾ亭で対面した、コイリスを探していたあの黒いマントの男だつたのだから。

「き、気をつけてコイリス。あいつ、昨日の夕方、リュルゾ亭でユイリスのことをフェンソおじさんに色々聞いていたんだ」

あの青年の言動からは悪意を感じはしなかつたが、なにせ身なりが身なりである。加えて、彼の言を信じるのであれば隣国フレアミスからはるばるコイリスを探しに来ているというではないか。よほどのことがなければそこまでできないし、あの男のいでたちからはどうしてもいい方向に考えることができなかつた。

どうにか絞り出した声でコイリスへ注意を呼びかけたのはそのためだつたが、レイルの危惧は途中で霧散させられることとなる。

黒マントの男を見据えたまま微動だにしない彼女の異変に気づき、

不審に思つたレイルはそつと首を巡らせ、覗き込むよつとしてユイリスの顔を見上げた。

すると彼女は、「大丈夫」と一言。

いつたい全体なにが大丈夫なのか見当もつかない。そういうしている間にも男は着実にこちらへ近づいてくる。男は短剣を放つてきただが、武器はそれだけではないはずだ。彼が腰に長剣を下げていたのを、昨日その目に焼き付けていたのだから。

ユイリスは確かに強かつたが、彼女が今手にしているのはただの木剣である。真剣相手には分が悪すぎる。

にもかかわらず、彼女は逃走を促す素振りを見せるどころかまったく臆した様子を見せていなかつた。

が、すぐにその疑問は解決することになる。

「心配いらないわ。知り合いだから」

感情の抑揚なくつぶやいた彼女の言葉にさらに驚いた。ついにすぐ目の前までやってきた男と知己なのだとこのだから。

「3年ぶりの再会にしてはあまりにも随分なご挨拶ね」

久方ぶりの再会だと自身で言いながらも、決して再会の喜びなどに表情を緩めていないユイリス。諸手を上げて歓迎していな様子がありありと伝わってくる。もつとも、いきなり短剣を投げつけられて笑顔で迎えることができる方がおかしいというものだが。

一方、男の方も表情に変化はまるでなく、感情を表に一切出していなかつた。

本当に2人は知り合いなのだろうか？　という疑問が脳裏を過ぎるもの、内容はどうあれ、知り合いでなければできない言葉の応酬をすぐに見せつけられることがなつた。

「貴様の腕が落ちてないか確認しただけだ」

「その割には射角に遊びがあつたようね。直撃射線からはわずかに外れていたようだけど」

「一応貴様が腑抜けていた場合のことを考えた。腑抜け相手にもし当ててしまつたら寝覚めが悪いからな」

まつたくもつて旧知でなければ不可能な掛け合いである。きつい物言いを互いに投げ掛けているが、2人が知り合いなのは違いないのだろう。

しかし、それにしてもどうしてこの男はユイリスに対して突っ掛かるような言い方をするのだろうか。元々仲が悪いのであれば、国を跨いでまでわざわざユイリスを探すことなどしないだろう。いつたいどうこう類の知り合いなのかレイルには見当もつかなかつた。

ただ、男の次の一言とそれに併せた行動が場の空氣を一転させたのは間違ひなかつた。

「もつとも、本当に腑抜けていたらいつそ直撃をせてしまつてもよかつたのかもしれん。この宝環の持ち主ならば、避けることができて当然のことだから」

言つて、彼は腰に下げた小さな袋から大事そつにこれまた小さな木箱を取り出した。手のひらに載せたそれを開け、中で折り畳まれた厚手の布包みを丁寧に開いていく。

厳重に保護された布の中央には、小指の先ほどの円形物が収められていた。銀色の指輪だった。

とたん、ユイリスの表情が驚きの色へと変化する。どんなことにも泰然とした様子でいた彼女が初めて見せた表情だった。

「どうしてそれを貴方が」

「戦師が俺に託された。貴様のもとへと届けるよう。俺がわざわざフレアミスから出向いたのはそのためだ」

男の言葉を受けて明らかに狼狽しているユイリスだったが、努めて冷静でいようとしているのが拳を握り締めている様子からもありありとわかる。

「いつたいなにがあつたの？」

彼女は押し殺した声で、男の真意をただそつとしていた。男は容赦なく言い放つた。

「戦師イスカムは亡くなつた。貴様の行く末を案じながら」

よほど男の言葉が胸を抉つたのだろう。ユイリスは目を見開いて

言葉を失っていた。見る間にうちに顔色は青ざめ、先ほどまでの氷の表情が嘘のように消えている。あまりに衝撃的だったのか、よろめいて倒れそうになるのを必死に踏ん張つて耐えていた。

「嘘、嘘よね、ウル」

「俺が『調和の宝環』を持つてここにいることがなによりの証拠だ」
彼の言葉、『調和の宝環』という言葉には決定的な意味合いが込められているのだろう。

「そんな、先生が亡くなるなんて、そんな……」

これまで出したこともないか細い声を漏らしたユイリスの反応が、ウルと呼ばれた男の言葉が全て事実を述べていてことを証明していた。

情勢はもはや決していた。

が、男はなおも彼女への追及の手を緩めない。

「戦師の御身が病に冒されていたのは貴様も知っていたはずだ」

「でも、先生は微塵もそんなご様子を見せなかつたわ」

「そういう方だといふことも貴様はよく知っていたはずだ。にもかかわらず、貴様は己の責務を放棄して逃避した。違うか」

「違う、私は逃げてない。私は、自分を見つめ直したかつただけ。自分の進むべき道がわからなくなつたから、だから」

それ以上、彼女は言葉を紡ぎ出さなかつた。否、出せなかつたに違ひなかつた。

俯き、歯を食いしばり、拳を握り締めた彼女の肩は震えていた。まじりからは透き通つた零が2つ3つ頬を伝つてこぼれ、大地に弾けた。ユイリスが初めて見せた、『弱さ』だつた。

彼女を放つてはおけないとは思つたものの、息を呑んで2人のやりとりを見つめていたレイルの体は緊迫した場の雰囲気に身が竦んだのかいつの間にか強張り、見えないなにかで拘束されているかのように自由が効かなくなつっていた。

呪縛が解けたのは、踵を返して半身になつた当事者の1人が去り際に言葉を投げかけてきたからだ。

「少年。レイル、と言つたな。頼んだぞ、彼女を。また出直す」
旧友に厳しい言葉を投げかけ、あまつさえその友人を追い詰めて
もまったく悪びれることなく言い放つた男は、そのまま立ち去つて
いった。声をかけて制止する間もなく。

残されたのはただただ呆然としている自分と、肩を落としてうつ
むいているユイリス、そして再び静まりかえった小さな林。
先刻までは想像もしなかつた重苦しい空気が、辺りを支配してい
た。

幾つもの果て無き道程みちのりを越え
 来るは遠き見果てぬ大地
 久しく見えぬ郷里の夜空を偲び
 思つは強くも優しき母の腕かいな

戻れぬ昨日に落涙尽きぬ
 辛苦の明日に悲嘆の吐息

深く静かに想いを強め
 折れてはならぬ己おのが心
 信置く標を胸に抱き
 曲げてはならぬ己おのが道

地と水と蒼天と
 我はいつも共にある
 父と母と温もりと
 我はいつも共にある

いつも通り彼女の歌が終わりを告げ、リュートの響きが鳴り止む
 と、しばらく誰も言葉を発しない。黙つてその余韻に浸るだけ。
 自身の歌声を確かめるかのように目を閉じて弦を爪弾いていた彼女が、しばしの後にゆっくりと双眸を開いた時、誰ともなく歓声を上げるのだ。彼女の歌声に喝采を贈るために。

異様なほどの熱気にはまられ、奏者兼歌姫を称え賛辞を呈する声がそれほど広くはないテルミト亭・食堂のそこかしこから上がる。熱狂的な彼らの声に、彼女も椅子から立ち上がり深く頭を下げる。

それでもあくまでいつもの彼女だ。周りに流されず、興奮した観客にも泰然とした様子で応えている。

すっかりお馴染みとなつたテルミト亭の歌姫と観客たちの姿を、レイルは食堂の片隅から不思議なものを見るような目をして眺めていた。

彼女　コイリス＝レンフィアがウルと呼んだあの男との一件から1日が過ぎた日の晩。

コイリスは以前と変わらぬコイリスでいた。

ウルに誘られ、懸命に反論するも結局言葉を失い、歯を食いしばつて黙つて涙するしかなかつたコイリス。

あの後、彼女は心配したレイルの問いかけに「大丈夫」と答えた。涙を振り払つたものの、さすがに堪えたのかしばらく1人にして欲しい旨を告げてくると、彼女は1人テルミト亭へと帰つて行つた。それまでの彼女とはまったく異なつた一面を見せたあの一件は、レイルにとつて衝撃的だった。

だからこそ心配でならなかつた。あれほどの落差を見せつけられてしまつては。

やはり放つておくことができず、間を置いて自身も帰宅した後、彼女の部屋へと向かおうとした。

が、そう物事上手くいくはずもなく。

一緒に出かけたはずの2人が別々に帰宅してきたことについて、両親からしつこく理由を問い合わせられた。どうもコイリスは帰つてきた時も沈鬱な表情をしていたようで、それを心配したからこそ反応だつた。

ロイドなどは、お前がろくでもないことをして怒らせたんじゃねえだらうな、とまったくもつて失敬極まる言葉を投げかけてきたが、まともに反論しても無駄な労力を消費するだけなので、どうにか適当にやり過ごしてコイリスの部屋の前までたどり着いた。

とはいえ、いざ彼女を目の前にした際、いったいどのよつた言葉をかけねばいいのか。

扉を叩くために持ち上げた拳のやり場に困つてゐると、突然扉が開かれた。

「あらレイル。なにをしてゐるの？ 拳を振り上げたりして、なにがあつたの？」

現れたのは当のコイリス。不思議そうに小首を傾げつつも、微笑みを湛えている。

悲しみ、憤り、口惜しさ、それらが全て入り混じったかのような涙を先ほど流していたのがまるで嘘のようような笑顔だつた。

あまりにも劇的すぎるコイリスの変わり身に、レイルはただ呆気に取られるしかなく、鼻歌交じりに食堂へと歩いていった彼女の背中を黙つて見送るしかなかつた。

それからの彼女は、ウルとの一件などまるでなかつたかのようになつも通り明るく振舞つていたのである。

しかもそれは無理して演じてゐるのではなく、本当になにもなかつたかのよう自然な振る舞いだつた。

明けた翌日の修練の厳しさも変わらず的確な指導であつたし、給仕も精力的にこなしていた。歌姫としての役割も先ほどの歌唱を見ればいかにいつも通りだつたか窺い知れるといつものだ。

あそこまで普段通りの有様を見せつけられると、あの一件は夢か幻かと思つてしまつても無理もないほどで、実際レイルは段々自身の記憶に自信を失くしかけたぐらいである。

だが、知己から謗られたコイリスが初めて感情を爆発させたあの事件は紛れもなく起きた事実である。

どれほどの度合いかはわからない。

ただ、彼女はやはりいつもの自身を演じていたのだから。

一度衆目から注目が外れた時、ほんのわずかの間だけだが彼女がもの思いにふける姿をレイルは目にしていた。以前には見受けられなかつたその姿こそ、コイリスが自身の心の揺らぎを隠せない証であつた。

彼女の心をそこまで動かした、ウルの一連の言葉。なによりウル

という男や、彼女の先生というイスカムという人物との関係。つまるところ、やはり彼女の隠された過去にこそ全ての要素が集中している。

人知れず悩む彼女の力になるためには、彼女という人物をより深く知らねばなにも始まらない。

だが、ユイリスがたどつてきた道についてはこれまで一貫して壊れ物を扱うかのように触れてこなかつた。また、その姿勢は彼女にもよく伝わつてゐる。

今になつて、彼女に問つことが果たしてできるだろうか。客に誘われたのだろう。いつの間にか客たちの間に入り、苦笑いしながらも酒を勧められるのを受け入れてゐる『作られた笑顔』のユイリスの姿を遠目に、レイルは表情を曇らせるのだった。

使いに行くのは頻繁ではないが、大抵が夕方から宵の口にかけて行くことが多かつた。特段の理由があるわけではなく単なる偶然なのだが、だからこそ日中に行く機会も当然あつた。

以前であれば今ほど氣にするほどはないのだが、しばらくはできれば日中に行くことは避けたかつた。

とはいゝ、あの父親に指示されて拒絶できるわけもなく、レイルはしぶしぶ重い足取りを使いの先 リュルゾ亭へと向けていた。修練を開始して3日目。それは同時に、ユイリスが初めて見えざる心を晒した日から3日経過したことを意味する。

だが、日数の経過はユイリスにさらなる変化を何ももたらさず、相変わらずの明るさと、修練の時の厳しさを保つてゐた。そして、時折ほんの一瞬見せる思いふける様子も。

グエインとのことに加え、ユイリスのことも気にかけざるを得ない毎日。もう十分手一杯で、この上面倒ことを背負い込むのは誰であつても避けたいのが然るべきというものだ。

ところが、その面倒ごとを背負い込む可能性がリュルゾ亭には存

在しており、しかも日中こそ最も危険なのだ。

が、訪れることから逃れる術はなく、後はもう、『面倒』ことが留守でいることを願うばかりだつた。

街道筋の町として賑わうサイレアの街中とは対照的に、まったくもつて浮かない表情をしたレイルは、とうとうだりつけたくはなかつたリュルゾ亭へと到着してしまつ。

テルミト亭よりも町の中心にあり、加えて日中から酒類を供出していることから客入りもよいリュルゾ亭。店の入り口横に張り付きそつと店内を覗き込んで見ると、相変わらずの盛況ぶりで食事や酒を酌み交わしている客たちの談笑が押し寄せるかのじとく聞こえてくる。

賑わつてゐる店内を見回しつつ、レイルは始めになさねばならぬこと『面倒』との在、不在の確認を最優先で行つた。

しらみつぶしに見回したところ、『面倒』ことを目にすることはないつた。どうやら奥に引っ込んでいるか、外出しているようだ。であれば、使いの用件を手短に済ませて一刻も早くこの場を立ち去ることが最善の道。

安心したレイルは、いざ店内へと足を踏み入れようとした。

「なんでそんなこつそりへろうとするの？ 家に」

聞き覚えの非常にある声だった。加えて、今最も聞きたくない声でもあつた。

声のした背後を恐る恐る振り返ると、『面倒』と『面倒』が不思議そうな表情をしてこちらを見つめていた。

「ねえねえ、どうしてなかなか中に入ろうとしなかつたの？ 会いたくない人でもいるの？」

矢継ぎばやに問いかけてくる『面倒』と『面倒』だが、レイルがリュルゾ亭になかなか入らなかつた理由を言い当て、さらにその答えが当の本人であることなどまったく気づく様子もない。

「べ、別になんでもないよ、ミスリイ」

当然のことながら訳を言えるはずもなく、動搖しながらもレイル

は面倒」と ミスリイ＝ルロムへ愛想笑いを浮かべた。

癖のある栗毛を背中に流し、決して美人ではないが鼻周りにソバカスを散りばめた愛くるしい面立ちが特徴であるエプロンドレス姿の少女は、レイルの挙動不審な態度を特段気にするでもなく、ふん、と頷いていた。

顔を合わせまい、と十分気をつけてきた努力を一瞬で崩壊させたことなど露も知らないであるつミスリイに、レイルは胸の中で深いため息をついて肩を落とした。

レイルにとって、ミスリイは幼馴染といつていい間柄の少女である。2人の父親に親交があつたことが出会いのきっかけとなり、互いに明るく人見知りしない性格もあつてすぐに打ち解けた。

成長した今は各々家業の手伝いがあるため、さすがに昔ほど毎日顔を会わせて遊んだりはしていないが、ほどよく仲の良い間柄を保つていた。

とはいって、ミスリイの度が過ぎた明るさ、あまり物事とを深く考えない性格にレイルが振り回されることも多かつた。

他でもない、今現在レイルにとっての最大の面倒ごと ユイリスをも巻き込んだグエインとの一件の発端は、彼女とグエインのいざこざにあつたのだから。

ミスリイにしつこくつきましたグエインに非があるのは当たり前だが、彼をそうさせた要因の一つに、ミスリイの発言が絡んでいることも否めない。

あつけらかんとしたあの性格である。当初軽く絡んでいたグエインの心を逆なでする発言 「気持ち悪いのよ、このでくの棒」などと言い放っていた を考えなしにしてしまったのも別段不思議ではなかつたが、事実としてグエインのつきまといが深刻になつたのはそれからのことだった。

それでも大して気にしていなかつたミスリイの樂天さとは裏腹に、幼馴染の一大事に体を張つて立ちはだかつたレイルだが、結果はこれまでの通りである。

とりあえずグエインのさらなる暴走を押さえ込むことには成功した。事実として、グエインはミスリイの前には顔を出さなくなつた。だが、毎度グエインに叩きのめされた拳句、ユイリスを巡つて決闘じみた手合いをする羽目になり、さらにそのために厳しい修練を積まされることにもなつた。

実はこれら一連のことをミスリイはなにも知らない。彼女が知っているのは「ごく初期段階、ミスリイへのこれ以上のつきまといを諫めるためにレイルがグエインに啖呵を切つた時ぐらいまでである。もちろんそれは、彼女にいらぬ心配や負担をかけたくないなかつたというレイルの思いやりがあつたからこそだが、さすがにまったくなにも知らずにのん気な様子でいるのを見せられると複雑な心境になつてしまつのもいた仕方ないというものだ。

このよつな苦心をさせられることまで元から承知の上などあるはずもなかつたが、それでもミスリイには黙り通すと決めたからにはもはやその道を突き進むしかない。

「今日は何のご用？　あ、わかつた。またさぼりに来たんでしょう。おじさん」怒られちゃうよ

そう言つて無邪気に笑うミスリイを見ていると、やはり彼女には何も言わずにいて正解だったとつくづく思う。彼女のような人間が不安や悲しみに沈んでいる姿など、決して見たくはないのだから。「ねえねえ、どうして黙つてるの？　そう言えばレイルの家に凄く綺麗な人が逗留してるのよね？　もしかして、その人に体よくあしらわれてたりして。だからなんだか疲れてる

ように見えるのかしら」

何も言わずにいたのをいいことに、ミスリイは好きなことを言いたい放題。

いつたい誰のおかげで苦労させられていると思つてはいるんだが、と喉まで出かかるのをどうにか堪える。多少は辛酸を舐めた方が実は彼女のためなのでは？　などと、なにかが脳裏を過ぎり、レイルはやり場のないやるせなさにため息をついた。

その反応にミスリイはさらに勝手に盛り上がりっていたが、ふとした瞬間から彼女の声など耳から入らなくなる。

ミスリイの言葉が静止したのではない。レイルの意識がある一点に注がれたため、彼女の声など気にならなくなつたのだ。

レイルが聞いていようがいまいが構いなしに我が道を行くミスリイの肩の向こう、人通りを隔てたリュルゾ亭のはす向かいの店から出てきた人影。

「あつ！ ちょっと、レイル！」

背中に追いすがるミスリイの声を振り払い、駆け出したレイルが求めるのはただ一つ。

人ごみの中に去り行く、黒いマントの男の背中だった。

リュルゾ亭のはす向かいにある店から出てきたのは、ユイリスを完膚なきまでに言い負かした男、ウルだつた。容姿はもちろんのこと、特徴のあり過ぎるあの黒いマントを見間違えるわけがない。行き交う人々の合間をぬつて、ひたすらウルの背中を追う。

なぜなら、レイルの身の回りで当人以外にユイリスの過去を知る唯一の人物こそウルなのだから。本人に直接話を聞けないのであれば、事情をよく知る彼に聞くほか手立てではない。

人の過去、とりわけこれまで壊れ物のように触れずにきたユイリスの過去を、ここにきて知りうとする行為に躊躇いがないわけではない。

ただ、これまで彼女のことを色々と案じてきたにもかかわらず、実は何一つ本当の彼女のことを知らない自分が歯がゆく、その思いは少しづつでも蓄積されていた。

普段冷静なユイリスをあれほど取り乱せる、彼女の過去。ユイ

リスのことを慮るからこそ、いつたい彼女に何があったのか それが知りたかつたし、その思いがレイルの背中を押したのだった。 黒いマントを何度も視界から失いかけつつもどうにか追跡し、幾つもの路地を抜けていく。街路の人々が障害となつて満足に走つていくことができないなか、それでもレイルは懸命にウルを追いかけた。

にもかかわらず、彼との距離は微々たるものしか縮まらない。

ウルは大人であるがゆえに歩いているとはいえ歩幅がレイルとは違う。それ以上に、急流の最中にある岩場の間を流れるようにはいく木の葉のごとく、人ごみを人ごみと思わせないほどの身のこなしで先へ先へと歩を進めていくウル。

その時は突然やつてきた。

レイルの頑張りが天に認められたのか、ほんのひと時、自分とウルとを結ぶ直線上を遮る者がいなくなつたのだ。

好機だつた。ユイリスを知る男に、レイルはあと一歩と迫つた。手を伸ばし、声をかけようとした。

横から現れる大きな影。

反射的に歩を止めるレイル。

彼の行く手を遮つたのは、横道から突如飛び出してきた大男だつた。驚いているレイルを尻目に、彼はレイルの行く手を横切つてそ知らぬ顔で通り過ぎていつた。

時間にして、わずかな間。

だがそれは致命的な間でもつた。

つい先ほどまで視界に捉え、手が届きそうだつた黒いマントの男の姿は、レイルの眼前から忽然と消え去つていたのだから。我が目を疑い、慌てて周囲も見回して見るが、いない。

予期せぬ邪魔のせいでウルを完全に見失つてしまつた。せっかくの好機をみすみす見逃してしまつたことに愕然とし、レイルはその場に棒立ちになる。

「なんだよ、あと少しだつたのに」

口惜しさが言葉となつてこぼれた。

やるせなさに肩を落とし、しばし俯いていたレイルだが、彼の眼は急に見開かれた。

ほんのわずか、ではあつたが不意に背後から異質な気配を感じたからだ。

通行人などのものではない。レイルは咄嗟に振り返った。

「ほう」「

何かに妙に感心しているような声が振り向いた彼を迎えた。短く刈り込んだ栗色の髪の青年は、黒いマントをたなびかせながら灰色の瞳をまっすぐこちらに向けていた。

追いかけて追いかけて、どうにか間近に迫つたものの見失つて、諦めざるを得ない状況に陥つたにもかかわらず、追いかけてきた相手が今、目の前にいる。

思つてもみなかつたことに、レイルはなにを言つていいかわからず視線を泳がせた。

「使いをさぼつた上に、彼女を放つぽりだして鬼ごっこをしていていいのか？」少年

先に口を開いたのはウルだつた。

彼は先日のリュルゾ亭での一件を覚えていた。なにより、先ほど自分がリュルゾ亭を訪れ、間口でミスリイと話していたことに加え、彼をつけていたことに気がついていた。わざわざ背後から近づいてきたことも、彼がはるか前からこぢらの動向を見知つていたことを証明していた。

恐るべきウルの鋭さに息を呑むが、レイルはどうとか踏みとどまつた。

「しょ、少年なんて名前じやない。俺の名前はレイルだ」

それは明らかな強がりで、あまり意図せず言葉が先に出たような状況ではあつたが、こうなればやぶれかぶれである。すると

「そいつは悪かつたな。レイル、か。良い名だ。俺はウル、ウルゼックだ」

意外にも彼は素直に謝罪し、自ら通称ではない正式な名前を口にした。それも、これまであまり表情を見せたことがなかつたにもかかわらず、わずかとはいえ口元に笑みを浮かべて。

思つてもみなかつた反応に目を丸くしていると、ウルゼックは踵を返して歩いて行つてしまつ。

次から次へと予想外の事柄が起きているので、どう対処していいかわからなくなり立ち尽くしていると、

「どうした、俺に用があるのだろう？」ついてこい

先を行くウルゼックは立ち止まり、半身だけ振り返つて言つた。またもや意外な彼の心配りではあつたが、おかげでレイルの戸惑いは晴れた。慌てて彼の背中を追いかけた。

レイルはウルゼックに付き従つた。

しばらくは無言で歩を進める2人。

「ユイリスから相当な訓練を受けているようだな」

歩きながら、唐突に話しかけてくるウルゼック。もちろん振り向いたりせず、顔は前を向いたまゝ。

黒いマントの男は行動がいつも唐突だつたが、さすがにここまで立て続けに起きると少しずつではあるが耐性がついてくる。彼が修練のことを知つているとしてもそれほど驚くことなく受け入れられた。

「さつきのことだ。徹底していわけではないが、俺は気配を殺していた。まさか気づいて振り向かれるとは思つていなかつたからな。少々驚いた」

驚いたと言つてゐるが、彼の喋り方には抑揚が乏しいためあまり驚いているように聞こえないところが彼らしい。

表情も伺い知れないだけに真偽は定かでなかつたが、ウルゼックの話は続いたため、レイルは黙つて耳を傾け続けた。

「初めて出会つたあの酒場の時からわずか数日しか経つていないにもかかわらず、だ。目覚しい進歩だな。あの時は氣づかれる兆候など一切なかつたのだから」

そこまで聞いてふと疑念が湧く。

唐突なウルゼックのことである。ユイリスから修練を受けていることを見知っていたとしてもありえない話ではない。閉鎖された室内で修練をしているわけではなく、ギヨーム河の川べり近くで行っているのだ。なるべく人目につかない場所を選んではいるが、誰にも見られない隔絶した場所というわけではない。

偶然通りかかったウルゼックに修練を見られる可能性も無きにしも非ず。

だが、一連の言動を顧みるとどうも腑に落ちない。特に、先の「あの時は気づかれる兆候など一切なかつた」という一言が引っかかる。

レイルは、ウルゼックという人物のことを洗いざらい思い出し、鍵となる事柄を脳裏で検証した。いや、検証するまでもなかつた。簡単なことだ。

ウルゼックはなんのためにサイレアに来たのか。そう、ユイリスを探していたのだ。初めて出会つたリュルゾ亭でも彼はユイリスの所在を尋ねていた。

その彼に、あの場面で自分はどういう反応を示したか。ユイリスという単語が出ただけで慌てふためき、あまつさえそのまま脱兎のごとく走り去つたのである。

よほどおめでたい人間でもない限り、ユイリスのことを知つていいからこそ動搖して逃げ去つたと考えて然るべき。

そう、あの後レイルはテルミト亭までウルゼックに尾行され、ユイリスの所在、ユイリスとの関係を既に把握させていたのである。一昨日、修練の帰りに見えたのも決して偶然などではなかつたのだ。人を探しているのだからそこまで行つたとしてもまったく不思議ではないのだが、ウルゼックという男のやることは徹底しており、自分とはあまりにも違う格に素で感嘆を覚えた。

もつとも、口から出たのは、自分がまったくの道化で彼に全てを見透かされていた氣恥ずかしさを隠す言葉だったが。

「なんだよ、全部知つてたのかよ。意地悪いよな」

「ほう、頭の回転もいいようだな。ユイリスが目をかけているのもわかるというものだ」

どうやら本当に褒めてくれているようなのだが、例によつてウルゼックの声で言われてもあまり褒め言葉に聞こえない上、一連のできごとからすると逆に皮肉を言われているような自虐的な気持ちに陥つてしまつ。

今、これ以上言葉を交わす気力を失い、レイルは以降黙つてウルゼックの後をついていくのだった。

ウルに連れられた先は、町はずれの小高い丘の上。立ち木が一本生えており、根元付近に野喰の跡があつた。立ち木の根元上辺りには大きな洞があり、そつと覗き込むとそこには麻布に包まれた荷物や巨大なトランクケースが隠されていた。

「ここで寝泊りしているのか」

「旅の暮らしが長くてな。宿よりも野喰の方が気楽でいい」言つて、ウルゼックはその場に座りこんだ。レイルも彼に倣つて、彼の眼前に腰を下ろす。

「その様子だと彼女からなにも聞かされていないな」

頷き、レイルはユイリスと出会つてから今までの一連の出来事をかい摘んで話した。

ギヨーム大河の河岸で行き倒れていたユイリスを助けたこと。以来、彼女は療養のためにテルミト亭に逗留していること。自分の揉め事に助け入つてくれた上に、問題を解決するための手を打つてくれたこと。

そして、解決するための手として自分を鍛えてくれていること、を。

ウルゼックは黙つて聞いていたが、やがて口元を歪めて小さく苦笑した。

「俺、なにかおかしいことでも言つた?」

「いいや。昔とまったく変わらん行状に、彼女は彼女のままだと安

心したところだ。むしろ、あまりに変わつとらんことに少々呆れた
ぐらいでな」

言葉とは裏腹に、ひとしきり微苦笑した後の彼の表情はとても穏やかだった。呆れよりも安心している思いの方が強いことを如実に表しているに他ならない。

感情を面に出さないウルゼックがわずかでも変化を見せていることから、それだけコイリスを案じる思いと彼女との深い結びつきを彼から感じる。

自分にはそこまでの繋がりなどない。レイルは羨ましいと思つ気持ちとともに、どこかやるせない思いも湧き上がるのを感じ、戸惑いを覚えた。

心の動揺を読み解かれまいと、レイルは戸惑いを払拭するかのごとく口を開こうとした時、ウルゼックの鋭い声が彼を制した。

「それで、どうしてレイルはコイリスに何も尋ねない」

いきなり最も痛いところ近くへと迫る言葉。レイルは顔を強張らせた。

「彼女に何も聞けず、それでも彼女のことが知りたいから俺のところへきたのだろう？ だが、なぜ彼女に話を聞けない？ 直接本人から聞いた方が早いだろう」

追い討ちをかけるかのように、矢継ぎばやに問いかけてくるウルゼック。

彼の言い分は正しい。

しかし、彼の言う通りにはできなかつた。なぜなら

「ユ、ユイリスは自分の昔の話をしたがらないんだ。それに、父さんに『人それぞれ聞かれたくないこともある』って言われてきたし、俺もそう思うから。聞けなかつたんだ、なにも」

そう、だからここに来た。ウルゼックに尋ねるために。

だが、それは同時に核心を突かれる危険も孕んでいた。なにより、今まさにウルゼックによつて核心　自身の行動に『つじつまが合つてないこと』　を追及されようとしていたのだから。

そして、自ら墓穴を掘つてしまつたこともすぐに気がついた。話の流れで自らつじつまの合わない行動をしていることを証明しまつたのだから。

話術や駆け引きには確かに長けてはいないが、自分で自分の首を絞めたことぐらいはわかる。レイルの自己判断は間違いではなかつた。

「なるほど、いい心がけだな。だが、彼女のことを俺から聞きだしてしまつたら結局同じことなのではないか？」

凍るような冷たい視線をこちらに向けながら、ウルゼックはレイルが危惧した通りの正論を投げかけてきた。

ユイリスを追い込むほどの男である。こんな基本的なことに気がつかないわけがなかつた。

ウルゼックが対話の機先を制した時点で、こつなることは既に決まつていたのである。

過去を知られたくないといつユイリスの姿勢を尊重しながらも、その裏で彼女の過去を探るといつつじつまが合わない事実。非難されても文句は言えなかつた。

もはやウルゼックにユイリスのことをまともに尋ねることなどできるはずなく、レイル自身も黙しているしかない そう思つていた。

「それでも

溢れ出す言葉。握り締めた拳に力が入る。頭の中が真っ白になり、押し留めることはできなかつた。

「それでもユイリスのことが心配だつたんだ！」

叫んだ。そして、我に返つて自らがなした行為に驚いた。

叫ぶつもりなど毛頭なく、それどころか放つた言葉の内容自体、考えてもいなかつた。ほとんど無意識的に、感情の赴くまま出てしまつた言葉だつた。

「お、俺、いつたい、なにを」

興奮も一瞬で醒め、我を取り戻したレイルは、自身の行為に動搖

し、視線を泳がせる。

彼が灰色の双眸を落ち着かせたのは、ウルゼックが彼の名前を呼んだ時だった。

ウルゼックを見やると、彼の眼光から冷たさは失われていた。ユリスの今を知つて安堵した時の穏やかなものに戻つていたのである。

「案じているのだな、彼のこと？」

彼の瞳には、レイルを非難する色などなく、ユリスに対する思いを吐き出したことをむしろ喜ぶような優しい光が湛えられていた。本心から心配しているからこそ出た叫びであつたが、筋から言えば無茶苦茶なもので、てつきり批判されると思つただけにレイルは怪訝な表情を浮かべるしかない。

予期せぬ反応を見せたウルゼックだが、彼はさらにまったく予想外の言葉を投げかけてきた。

「もしや貴様、彼女に惚れたか？」

まったく考えていなかつた問いかけだつただけに、一瞬彼が何を言つているのかわからなかつた。脳裏で反芻してみて言葉の意味を理解してからようやく、だがあつと言つ間に赤面する。

「そ、そんなんじやない！　き、綺麗な人だと思つてはいるけれど」興奮したり冷静になつたり、そしてまた興奮したりと、もはや自分でも何を言つてはいるかわからなくなつてしまつてきているため、言わなくともいいことを口走つてしまつ。羞恥に顔を真つ赤にしたまま慌てて口をつぐむが後の祭り。

しつかりとその耳に届いた証として、ウルゼックは声を上げて笑い出した。それは、表情をほとんど変えない彼が初めて見せた満面の笑みだつた。

微苦笑したり穏やかな表情を見せたりと、ほんのわずかな変化はこれまであつたが、彼がここまで感情を露にすることなどなかつた。なによりその外見からは想像もできなかつただけに、恥ずかしさも忘れてレイルは目を丸くした。

「正直な奴だな、レイルは。気に入つた。貴様のような人間は好感が持てるぞ」

ひとしきり笑つた後、彼は一言謝つてからそう言つた。どうやらまたしても褒められているようなのだが、あれだけ笑われてから言われても素直に喜んでいいのかわからず、レイルは今日何度もかの複雑な表情を浮かべるしかなかつた。

「まあそう腐るな。俺はお前を買つていいんだぞ。素直に喜べばいい。それに、彼女のことも案ずることはない。彼女はとても芯の強い女性だ。必ず自らけじめをつける。そういう人間だ」

自分のことはともかく、あれほど責めたユイリスのことも称えるウルゼック。ユイリスに冷たく当たつていたのがまるで嘘のようだつた。

「ウルはユイリスのことが嫌いなんぢやないのか？ こないだんなに責めていたのに。それが今日は、なんだか褒めてるみたいだ」

訝しげに問うと、ウルは再び破顔した。

「俺は彼女のことを嫌つてなどいないぞ。むしろ敬意を払つている。だからこそ、だ。ま、貴様も大人になればわかる」

だからこそだと言わても、言つていることやつていることが食い違つていてるようしか思えず、レイルはどこか釈然としなかつたが、ユイリスがとても芯の強い女性であるという言には諸手を上げて賛成だ。

今まで見せたことのない一面を突然見せられたためにユイリスのことが心配でならなくなつっていたのだが、ウルゼックから諭されたことでユイリスという人物がどんな人間であるか、思い出させられた。

今は彼女を信じて待つことこそ、ユイリスを慮ることになるのだ。

「時が来れば彼女の方から胸の内を明かしてくれるだらう。それまでは彼女を信じ、見守つてやつてくれ」

異論は一切ない。レイルは深く頷いた。

会談の席は終わりを迎えた。どちらからともなく、2人は立ち上

がる。

別れ際、ウルゼックは言った。

「彼女に伝えてくれ。俺はしばらくここに逗留している。気持ちこ

整理がついたら、会いにこい」と

修練を始めてから早くも5日目。

コイリスは相変わらず何事もなかつたように振舞つていて。手厳しい指導にもより一層拍車がかかるぐらいに。

あまりに普通でいる彼女の姿に、ウルゼックとのやりとりを忘れてしまつたのではないかとも思はされる。

だがそうではない。いまだに時折、ふと物思いにふける瞬間は現出している。彼女は決して忘れてはなかつた。

すっかり通い慣れた修練場からの帰り道を5日目の修練を終えコイリスと並んで歩くレイルは、彼女のことを案じながら、一方でウルゼックとの一件、彼からの伝言を言いそびれていることを気にしていた。

時機を逸するとはまさにこういうことかと、もどかしい思いが山積していくことに気が重くなつていいく。ただでさえ色々な問題ことが次から次へと生まれていて最近の状況である。やるせない鬱積した感情は蓄積される一方で、自然と小さなため息を漏らした。

今この瞬間にでも伝えてしまえば何も問題はないのだが、意図して次から次へと思つたことを口から放り出せる性格ならば、そもそも端から面倒ごとを背負い込むこともなく、苦労はしていない。

さらに言えば、この帰り道で彼女は物思いにふけることが多かつた。

案の定、この日も物思いにふけつてしまつたようで、それが証拠に隣を歩いていたはずのコイリスの姿がいつの間にか、ない。

横を見て、後ろを見る。すると、かなり離れた後方を、彼女は空虚な視線を漂わせたままとぼとぼと歩いていた。そもそもこんな状態の彼女に伝言しても、果たしてちゃんと聞いてもらえるのか怪しいところである。

レイルは再び

今度は多少大き目のため息をつくも放つて

おくこともできないので、コイリスの注意を喚起するために呼びかけようとした。

その時だった。聞きなれない音が急激に近づいてきたのは。

とつさに反応、腰を屈めて身を縮こませる。

同時に、視界の端に黒い小さな塊が映り込んだ。

それが何かを認識しようとするよりも早く、音は聞こえた時とは逆に今度は急激に小さくなつて消えてゆく。

だが、レイルは黒い塊の正体を音が消えゆく間際に見極めていた。親指大ほどの大きさの黒熊蜂だった。蜂の一種である黒熊蜂は、丁度この辺りのような林 修練からの帰り途上にある、コイリスとウルゼックが一戦交えた林道に差し掛かっていた に生息し、攻撃的な性質を持つ上に、生死にかかる猛毒の毒針を有しているとても危険な蜂だった。

一旦は飛び去ったと思われた黒熊蜂だったが、再び羽音が強くなつてくる。

いすこからかと慌てて首を巡らし、迫る脅威を求めた。

その姿を再び視界に捉えた時には、丁度まっすぐこひらに向かつてくるところだった。

身を翻しどうにかかわすことに成功するも、飛び退つた黒熊蜂の次なる行き先に居るのは、なんとコイリス。さらに当のコイリスはまったく気づいていない様子で、無防備だった。そう、悪いことに『物思いにふける瞬間』どころか、『物思いし続け』、自分の世界へと入り込んでいた、彼女は。

いつものコイリスならこの危機にも問題なく対応するのだろうが、今の有様では言わずもがなである。

「コイリス、危ない！」

駆け寄る余裕はない。レイルはあらん限りの声を振り絞つて叫んだ。

これで彼女も危険を感じて避けてくれる と思いまや、なんとコイリスはまったく反応せず、相変わらず自分の世界の真つ只中。

一方、彼女の事情なぞ勘案してくれるはずもなく黒熊蜂は一直線にユイリスへと向かっている。

もはや間に合はず、彼女はその毒針の餌食になってしまったかと思われた。

ところが、思いも寄らぬできごとが起きたのである。

なぜか黒熊蜂は、ユイリスの直前で、まるで彼女を避けるかのように突如として向きを変えて飛び去ったのだから。

いつたい何がそうさせたのか、はたまた黒熊蜂の気まぐれか、それはわからない。

わかっているのは、黒熊蜂はこちらへの襲撃をまだ取りやめたわけではないということだ。

彼の小さな襲撃者は三度方向転換し、今度はユイリスの背後から彼女へと襲いかかろうとしていたのだから。

もはやユイリスに危機からの回避を任せていられなかつた。

レイルは持てる力を振り絞つて疾走した、ユイリスへと。

同時に、腰に結び透けていた木剣へと手をかける。

必死で駆けるレイル。

だが、心の中は不思議と冷静だつた。

高速で迫る黒熊蜂の姿も正確に視界に捉えていた。

迷うこととはなかつた。

今だ！！

胸中で叫びながら、ついにレイルはこん身の力を込めて木剣を抜き放つた。

紙を握りつぶしたような音がし、羽音は消え、辺りに静寂が再び訪れる。

鋭い軌道を描いて振り抜かれたレイルの木剣は、違うことなく黒熊蜂を木の刃に捉え、撃破。粉々に砕け散つた黒熊蜂の遺骸は木々の幹にべつとりと張り付いていた。

「や、やつたのか……？ お、俺」

ユイリスを助けなくては、その思いだけで木剣を振るつたレイ

ルである。もちろん黒熊蜂を粉碎できる自信も目算もあるはずなどなく、だからこそあの小さくとも獰猛な昆虫を倒せたことがにわかに信じられない。

しかも、剣を振るつた時の冷静さや、なにより鋭い剣さばきはとても自らなし得たことは思えなかつた。自分でも思うのである、まるで別人になつたようだつた、と。

自分自身が行い、さらに功を奏したことなのではあるが、レイルは戸惑うばかりだつた。

「助けてくれたのね、レイル」

我に返つたのは、聞きなれた美しい声が耳に届いた時だ。見ると、周囲とレイルの有様から状況を判断したのか、何があつたかを理解した表情でユイリスがこちらを見つめていた。

怪我をすることもなく無事な彼女の姿を見て安堵するも、同時に沸々と怒りが湧いてきた。それが言葉となつて彼女へと向けられる。「も、物思いにふけるのもいいけど、大概にしないといふらユイリスでも怪我をするよ！ そんなのユイリスだつてわかつてゐだろ！ ? しつかりしなよ！」

感情の赴くまま、想いのたけをありのままにぶつける。彼女が心配だからこそ、だ。

対し、ユイリスは心底申し訳なさそうな表情をし、「『めんなさい』と素直に詫びの言葉を口にしていた。

「貴方に命を救つてもらつたのはこれで2度目ね。ありがとう、助けてくれて」

「べ、別に。当たり前のことをしてただけだよ」

神妙な顔をして礼を言つユイリスにレイルは照れを隠せず視線を外したが、すぐに真顔で彼女のことを見あらためることとなる。

「貴方に話さなければならないわね、こないだのこと。2度も助けてもらつたのに、これ以上黙り続けてはいられないもの」

彼女は覚悟を語つていた。

ならば、当然こちらも覚悟を示さねばならない。それが彼女に報

いることとなるのだから。

「俺も、ユイリスに伝えなきゃいけないことがあるんだ」

黒いマントの男からの言葉を伝える意思を固めたレイル姿が、亞麻色の髪を持つた麗人の瞳に映りこんでいた。

着実に空へと昇る日差しに、大河ギヨームの水面はそこかしごで輝きを放っていた。

照り返す光は河の流れに合わせて多彩に変化を見せ、実に美しい。心を洗い流してくれるような光景を、レイルはユイリスと河べりに並んで腰かけ、眺めていた。

ウルゼックの時といい、今回の黒熊蜂の時といい、すっかりいわくつきの場所となってしまったあの小さな林から修練場であるギヨーム河・河岸へと引き返した2人は、しばらく雄大な景色を黙つて見つめていた。

「ねえレイル。貴方とこうして2人だけで静かにお話しする機会つて、そう言えばこの近くに私のトランクケースを取りに来て以来ね」静寂の時を止めおもむろに唇を開いたのはユイリスだつた。

「あれからまだそんなに経つていないのに、なんだかもう何年もサイレアにいるような気分になっていたわ。だからかしらね、気持ちが緩んでいたのかもしないのは」

隣に座るユイリスを見やると、穏やかな語り口調とは裏腹に硬い表情の彼女は、伏目がちに大河へと視線を向けたまま肩を落ち込ませていた。いかに彼女が『平静』という偽りの衣装で着飾つていたかがよくわかる。

彼女に、その意氣を落ち込ませるきっかけを生んだ人物の話をするのは少々怖かつたが、彼とのことは話さねばならないことだつた。

「俺、おとといウルに会つたよ」

意を決し言葉を紡ぎだすと、伏目がちだつたユイリスの双眸は大きく見開かれ、やがて彼女はその空色の眼差しをこちらへと向けて

きた。さしもの彼女も驚きを隠せないよう、透き通るような蒼さを持つ瞳は『なぜ』の思いに揺れていた。

「た、正しく言ひと、街中でウルを見かけたから後をつけたんだ。もつとも、あつさり氣づかれちゃつたけどね」

真つ直ぐな、それもこの美しい瞳で眼差しを向けられると、何度も経験しても動搖してしまう。つい、どこか軽口を叩くように喋ってしまうが、それでも空色の双眸は視線を外すことはなく黙つてこちらを見据えていた。

真摯な姿勢には真摯な姿勢で応えねばならない。気持ちを浮つかせ、それにいつまでも甘えているわけにはいかなかつた。

レイルは気持ちをあらため、表情を引き締めた。

「ユイリスのことをもつとよく知りたかったんだ。でも、ユイリスには聞けなかつた。だから、ウルから話を聞こうと思つて彼を追いかけたんだ」

なぜ彼女のことを見たかったのか。

もちろん彼女のが心配だったからだが、父親からの受け売り言葉を基に『過去の詮索はしない』旨を以前この河原で彼女に面と向かつて言つたのである。一度口にした以上、たとえ彼女の身を案じたからという理由であつても、その過去を知ろうとする行為は約束を違えることになつてしまつ。

ましてや既にウルゼックにも指摘された点であるし、なにより誰よりも自分がよく分かつてゐる。

だからレイルは、ウルゼックの後をつけこと、ユイリスの過去を知りたかったこと、その事実しか口にしなかつた。

ウルゼックとやりとりした際には氣色ばんてしまつたが、今は違う。当のユイリスを目の前にしているのだ。自分の思い、言い分はあれど、レイルはそれを胸の奥にしまつた。是か非かを決めるのは他でもない、ユイリスなのだから。

黙したまま彼女の眼差しをしつかりと受け止める。

すると、彼女はそれまで硬かつた表情を和らげた。

「ありがとう、レイル。私のことを心配してくれたから、ですものね」

ユイリスはレイルを責めたりしなかった。レイルの思いは彼女へと通じていたのである。

彼女が罵詈雑言を吐くような人物ではないことはよくわかつていたが、それでもどんな言葉が返ってくるかわかるはずもない。何を言わても仕方ないという覚悟を決めていたものの、緊張せずにいられたかというと答えは否だ。レイルは、彼女の言葉を聞いて内心胸を撫で下ろしていた。

「でもウルは何も話さなかつたんだ。ユイリス自身でけじめをつけるだろうから、彼女を信じてやれ、つて言つて」

「そういうところも相変わらずね、彼……。私に伝えなければいけないことって、もしかしてウルからの?」

彼女の問いにレイルは頷いた。

「『俺はしばらくここに逗留している。気持ちに整理がついたら、会いにこい』って言つてたよ」

ウルゼックからの言伝て　　それは、2人がやり合つたあの林での一件で心を乱したユイリスではあるが、彼女が再びウルゼックの前に立てるよう必ず自身の心と向き合つことを信じる思いを内包したものだつた。

裏返せば、ユイリスの気持ちに整理がつくまで待つ、という意味が隠されていることからもウルゼックの彼女を慮る気持ちがよくわかる。聰明なユイリスが彼の思いに気づかないわけがなかつた。

ユイリスは思いを確かめるように目蓋を伏せ、一言、静かに『ありがとう』とつぶやいた。それはもちろんレイルにも向けられた言葉ではあつたが、彼にだけではないことはレイルもわかつた。

再びユイリスが目蓋を開いた時、彼女の双眸にほんの少し力強さが宿つたように見えた。

彼女の中で何かが変わったのか……それはわからなかつたが、少なくともユイリスが良い方向に気持ちを傾けたことは間違いなさそ

うだつた。

「私の番ね、今度は」

強張つていた表情を解し微笑みまで浮かべたユイリスは、再びギヨーム大河へと視線を移し、ゆっくりと語り始めた。

「ウル……ウルゼック＝ラインローグ。そう、彼は私にとつて言つなれば『兄弟子』にあたる人なの。時機はまったく違うけど、同じ先生に師事を仰いだことがあるから」

「そういえば、ウルは『戦師』、つて言つてたよね」

「ええ、イスカム＝スカラ－戦師。私たちの先生。先生は偉大で高名な剣士だつたから。私は剣術の教えを受けたことはほとんどないけれど、もつと大切なことを教えていただいたわ。だから先生とお呼びしているの。師事を受けたのはとてもとても短い間だつたけれども、迷いに苛まれていた私を先生は導いてくださつた」

陽光に彩られた河面を眺つつ、ユイリスは過去を懐かしむように一言一言を噛み締めながら言葉を紡ぎ出していた。

「先生のお体が病に冒されていたことはもちろん知つていたわ。でも、まさか命の灯火を消してしまつほどの病だつたなんて、思つてもみなかつた。辛そうな素振り、一度もお見せにならなかつたから……。でも、ウルが言つていた通り、先生は私たちに心配をかけまいとしていたんでしょうね。そういうお人だつたから……」

せつかく戻りかけたユイリスの穏やかな表情がやや曇る。彼女にとつて大切な人物であり、しかも亡くなつていることがわかつた人物の話をしているのだ。無理からぬことだつた。

「優しい先生だつたんだね。俺も会つてみたかつたな」

彼女を励ます意味も込めて、彼女の先生のことを称える。もちろん決してうわべだけのものではない。ユイリスほどの人物が敬愛しているのだから、相当な偉人だつたのだろう。純粹な思いから出た言葉だつた。

その思いを感じ取つてくれたのか、ユイリスは口元をほころばせた。表情を曇らせた硬さは少し残つていたが、嬉しさがそれを上回

つていいのだわつ。満足そうな様子が彼女の心情を物語つていた。

「そう言えば」

たどつていった記憶の糸の先に忘れていたことを見つけたのか、唐突に目を大きく見開いたユイリスは河面からこぢらへと向き直つた。「先生はことあるじとに私のことを『最後の弟子』とおつしゃつていたわ。私はてつたり、今後は自らの人生を中心におかれるからだとばかり……。他ならないじに自身のお体のこと。今思えば先生はご自身の命が長くないことをご存知だつたんだわ」

いまさらではあるが、彼女の先生たるスカラーワン師が己の寿命がそう長くないことをわきまえていたことを証明するできじとに気づいたユイリスは、再び肩を落としてしまう。

気を取り直したり落ち込んだりと忙しい彼女だが、それだけ彼女にとつて恩多き人であつたといふことがあらためてよくわかる。こんなにも田まぐるしく感情を変化させた彼女を見たのは初めてであり、スカラーワン師がいかにユイリスの心の支えだつたのかを表していた。

しかし、ユイリスの恩師はもうこの世にはいない。

その事実が、とうとう彼女に本心を語らせることになつたに違ひなかつた。

「貴方に色々と偉そうなことを言つてきたけど、私、ウルの言う通り自らの責務を棚に上げて旅に出てしまつたの。 いいえ、逃げ出したのも当然ね……。どこへ歩んで行けばいいのか、わからなくなつてしまつたから」

ユイリスが語るのを黙つて聞いていると、彼女は途中から逃れるよつに視線を外した。

「最後に先生にお会いしたのは、もう3年ほど前になるかしら。故国を後に旅立つ決意をし、先生から託されていた『調和の法環』をお返しするため。『調和の法環』を持つ者にはとても重い責務が科されているの。だから、自らの進むべき道もわからなくなつている輩が持つているわけにはいかなかつたわ」

自らの行いを否定するかのように、もしくは非難するかのように、言いながら彼女は小さく頭を振った。小さくため息をつき、伏し目がちになる。唇を噛み締め、彼女はそのまま瞳を閉じた。

しばしの静寂。

コイリスの独白を黙つて聞いていたレイルは、もはや彼女の思つよにさせてやううとただひたすら彼女の動向を見守つた。

「でも」

言つて、ゆつくりと田蓋を開く。蒼く澄み渡つた空を、同じ色の瞳で見上げながら言葉を重ねる。

「でも、先生はおっしゃつた。『あくまで預かるだけですよ』と」その彼女の台詞で全てが繋がつた。過日、ウルゼックが持つて来ていた『調和の宝環』は、スカラーリ戦師が亡くなつた証であると同時に、彼の戦師が己の死を境に再びコイリスへと託すためにウルゼックに持たせたものだつたのである。

コイリスは自らが『調和の宝環』を持つに足る人物ではないと考えていたのだろうが、彼女の先生は最期まで彼女こそが所有者たる資格の持ち主であるという思いを貫いたのだ。

彼女がそれほど敬愛する人物の思いなのであれば、受け入れるのがそれこそ師への恩返しになるのではないか。

これまでコイリスのたどつてきた道はきっと複雑で、ひと括りに語るものではないだろう。それでも、スカラーリ戦師の思い、彼女を信じ見守つてきた思いは彼女のためになることはあつても、彼女を間違つた道へと誘うはずがない。

「あれから3年。もう、3年経つてしまつた。なのに、私はまだ迷い、煩つている」

苦悩するコイリス。

それでも、彼女は賢明な女性だ。はつきりとはわからなくとも、己が目指さねばならない道は薄々気づいているはずだ。言葉通り、迷つているだけに違ひない。

それがなんとももどかしい。そのもどかしさが己の心を突き動か

したのか、レイルは自分でも不思議に思ひへりに滑らかに語り出した。

「ユ、ユイリスってさ、多分すごく難しく考えすぎなんだよ。ユイリスが生きてきた世界は俺なんかには到底理解できない世界なんだろうけど、でも、ユイリスならもつと肩の力を抜いて、一番いい道を歩んでいいかと思うんだ」

「レイル……」

雄弁に語る様に驚いたのか、ユイリスは眼を大きく見開いていた。「ユイリスの先生だつて、きっとそういうべきだつて思つてるに違いないよ。ユイリスのことを信じているから、その、すごく大切な『調和の法環』だつて預かつているだけつて言つたんだと思う。ユイリスに渡すために、ウルに託したんだと思う。どんなに迷つても、大切なものを持つ資格はユイリスにこそあるつて思つていたから、だから預かるだけつて言つたんじやないのかな」

話を黙つて聞いてくれているユイリスに対し、レイルは熱っぽく続けた。

「他の誰でもない、ユイリスの先生なんだよね。だつたら、先生を信じてあげなきや。先生の遺志に応えるためにも、生徒はやらなくちゃならないことなんだと俺は思つ」

ウルゼックから言われた、ユイリスを信じること そのことに重ねながら、レイルは頭の中に浮かんだ思いの丈を全て紡ぎ出した。言つてしまつてからさすがに我ながら偉そうなことを語りすぎたかと思い返すが、ユイリスには機嫌を損ねたり不快に感じたりしている様子などなく、むしろなにかまぶしいものを見たかのように目を細めて微笑んでいた。

「な、なに？ どうかした？」

自分が自分でないぐらい語り倒した後だからこそ、ユイリスの態度にはかえつて不安を呼び起させられる。

やはりなにか余計なことを言つてしまつたのでは、と戸惑つていると亞麻色の髪の麗人は、温かみのある優しい笑みを浮かべながら

頭を振った。

「なんでもないわ。ただ、なんだか凄くレイルが大人びて見えたから」

大人びて？ レイルは目を丸くした。的を外したことは言つたつもりはなかつたものの、思ったままを喋つただけなの不評を買ひこすれ、まさか褒められるとは思つてもみなかつたのだから。そんなに大人っぽいことを言つただろうか、と妙に気になつて1人考え込んでいると

「貴方はいつも真つ直ぐね。貴方には大切なことをいつも気づかされる。そう、本当はね、私……」

笑みは浮かべているが、ユイリスの面持ちはどこか悲しそうだった。

言いかけて口ごもつた彼女の言葉が気になつたものの、その先を尋ねられるわけもなく。しばしの沈黙が2人の間を支配した。先ほど同様、凍りついた時を解したのは、ユイリスだった。やにわに立ち上がると、彼女は両手で己の両の頬を軽く張つた。乾いた音とともに、小さく「よし」とつぶやく声が聞こえた。

突然のできごとにその動向を見守つていると、彼女はこちらを見下ろし、言った。

「心配してくれて本当にありがとう。まだ、迷いは吹つ切れてないけれど、レイルのおかげで凄く元気が出てきたわ。私は大丈夫。貴方の言う通り、先生のご遺志ですものね。必ず、答えは出すから」ユイリスの言葉に嘘はなかつた。彼女の表情からは何かに引っかかつたようなものは消え失せ、晴れ晴れとしたものへと移り変わつていたのだから。

ようやく本当に戻つてきた、いつものユイリスだった。

これまで色々なことがあつたが、重ねてきた苦労や思い煩つてきなことも報われた気がする。レイルはようやく心から安堵したのだった。

ただ、1つ忘れていたことがある。

「コイリスという人物が本来の自身を取り戻したらどうなるか、と
いうことを。

「レイルが頑張っているんだから、私も頑張らなきゃ。手合いの日
はいよいよ明後日。今はもう、グエインにいかにして勝つかしか考
えないわ。だからレイルも、最後の力を振り絞ってね」

満面の笑みを湛え、奮起を促してくるコイリス。ただでさえ厳し
い指導が続いているといつのに、さらに熱を入れる意気込みも見せ
ていた。

元気になつてくれたのはまつたくもつて嬉しいことなのだが、元
気になり過ぎてしまつのはいかがなものかと、レイルは真剣に悩み
始めてしまう。

「あら、どうしてそんなに難しい顔をしているの？ それより丁度
いいわ。せつからく河原に戻つて来たんだから、もう少しここで修練
していきましょう。貴方に教えておかなければならぬことを思い
出したから」

まさかそうくるとは思つてもみなかつたので呆然とするレイル。
一方、コイリスは彼の様子などおかまいなしのようになれる氣に満
ち溢れている。

「グエインにあつて貴方にはないもの。その差を埋めるための『とつ
ておき』だから。しつかり体で覚えてね」

つい先ほどまでこの場所で修練していたといつのに、また地獄を
見なければならぬとは。

もちろん自分のためにやつてくれているのだとはわかっているし、
ありがたいことだとも思つてているものの、頭よりも体が悲鳴を上げ
そうだ。

それにしても自分とグエインの差とは？ その差を埋めるための

『とつておき』とは？

それらを知るためにも、今少しコイリスに付き合つほかはなさそ
うだつた。

あの時に比べ月は真円から欠け始めていたが、その存在感は微塵も揺らがず夜空に輝いていた。

ギヨーム河岸に打ち倒され、強制的に月夜を見せつけられることになったあの日から早いもので一週間。レイルの姿は再び、同じ場所にあった。

彼の視線の先には、見慣れた男の姿。

グエイン。彼は約束違わず、きつちり／＼目に現れた。日中は一切姿を現さず、日が落ち、月光が支配する夜の世界が訪れてからテルミト亭にやってきたのである。

為すべきことはお互いわかつていて、2人は無言でテルミト亭を後にし、このギヨーム河岸へとやってきたのだった。

夜空の月が欠けただけで、場所も時間も前回とほぼ同じ。だが、以前と異なりこの場にいるのは2人だけではない。レイルには心強い味方、ユイリスがいる。彼女は少し離れた場所からこちらの背中を黙つて見守つてくれている。

一方、グエインにも連れ合いの男がいた。細身のグエインとは違ひ、その男は鋼のような筋肉に身を包んだ屈強な輩だった。

レイルがユイリスを伴つたように、グエインも見届け人として知己のその男を連れてきたのだという。ユイリスが同席している以上、もちろん異を唱えることはできないしそもそも唱えるつもりもない。グエインに誰が同席しようと関係ない。倒すべき相手はただ1人なのだから。

雄大なギヨーム大河から河岸に打ち寄せる穏やかな波の音がしつかり聞こえるほど静まり返つたその場に、どこか喜色を含んだ男の声が響く。

「この一週間でどれだけ力をつけたか知つたこっちゃないが、ま、覚悟はいいな？」

不敵な笑みに口元を歪めたグエインだった。

相変わらずの不遜な態度で、完全に彼はレイルを見下している。

だが、不思議と頭にこない。

やるべきことは全てやつた充足感 それが気持ちを落ち着かせ、冷静さを維持させているのかもしれなかつた。レイルは無言で頷いた。

「大言吐いたユイリスちゃんよ。約束、忘れてねえよな」

薄ら笑いを浮かべ、レイルの睨みつけるような視線を受け流して、いたグエインは、ユイリスの方を見やつて言った。

約束 すなわち、レイルが彼に敗れるとユイリスが彼の物になつてしまつということ。

穏やかだったレイルの心の水面に、さすがに小波が起きる。

一方、当のユイリスは彼の心中とは裏腹にいたつて平静だ。

「ええ、もちろんよ。レイルが負けたら、貴方のお好きなように」

一切の動搖もなく、平然と言つてのける様は懷疑を通り越して感嘆すら覚える。

だが、彼女がそこまで自信を持つているのは、自分を信じてくれているからだ。彼女のその思いに応えねばならない。彼女のためにも、そして自分のためにも。

ユイリスからの返答を得て、ことさら嬉しそうに口元をいやらしく歪めたグエイン。余裕に満ちた彼の鼻つ柱をなんとしてもへし折らねばならない。絶対に負けるわけにはいかなかつた。

「レイル」

胸中で気持ちを高めていると、後ろから呼びかけてくる声が。

半身だけ振り返ると、ユイリスが真剣な眼差しを投げかけてきていた。

「私が教えたことを全て忠実にこなせば、絶対に負けない。必ず貴方は勝てる。だから、常に冷静に、心を平静に」

いつでも自分を支えてくれたユイリス。親身になつて自分を鍛えてくれたユイリス。最後まで助言をしてくれた彼女を、グエインな

どに決して渡してはならない。必ず勝つ　　その思いを込めてレイルは頷き応えた。

「その意気。後悔のないよう、思いきりやってきなさい」

温かいコイリスに送り出され、レイルは一段と気持ちを引き締める。

グエインに向き直ると、彼は侮蔑の表情を浮かべていた。

「最後まで女に助けられていい身分だねえ、レイル君。お別れ会はもう十分かい」

コイリスとのやりとりを見、嘲笑し、皮肉をぶつけてくる。

明らかに挑発ではあるが、これまでであればやはり簡単に頭に血を上らせていたことだろう。

だが、今は違う。自然と受け流せる。

レイルが反応を示さないことに肩透かしを食らったようで、グエインは舌打ちすると

腰に下げた木剣を抜いた。レイルも手に提げていた木剣を構える。辛く苦しい修練の集大成。

いよいよ真価が問われる時が来たのだ。

手合いが始まった。

ついにこの時がやつてきた。コイリスは握り締めた拳の中が汗で湿っていることに気づき、微苦笑した。

自分が戦うわけでもないのに、なにを氣負っているのだろうか。今教えられること、彼の力を伸ばせることは全てやり通した。後はもう、レイルを信じて託すしかない。

そもそも、そんなに氣負つてしまふぐらいならこんな回りくどいことをせずとも一週間前あの時、グエインを完膚なきまでに己が叩きのめしてしまえばよかつたことである。

それをしなかつたのは、あくまでレイル自身の手で解決させてけじめをつけさせ、さらには彼の成長を願つたからだ。

だとすれば、黙つてなりゆきを見守るのも『』の責務である。

歯痒い思いを内包しつつも、コイリスはレイルとグエインの戦いをその目に焼きつけようと手合いに集中した。

互いに睨み合い、動かないレイルとグエイン。

だが、2人の距離は打ち合ひにはまだ遠すぎる。

どちらが先に仕掛けるか。その命題はすぐに解が導き出された。初めに動いたのはグエインだった。

突如として突進した彼は、レイルに迫り頭上に掲げた木剣を鋭く打ち下ろす。

色々と偉そうなことを口にするだけのことはあり、彼の剣撃は素人の域を出ている。未経験の人間であれば、あの剣撃をまともに受けてしまつことだろう。

その斬撃を、レイルはかわした。かすりもせずに、体捌きを駆使し半身になつてグエインの剣撃を鮮やかにかわしたのである。

一週間前までのレイルであれば、多少は打ち所をずらすことはできても避けることは難しかつたに違いない。

しかし、今の彼はいとも簡単にやつてのけた。もちろん偶然ではない。この一週間、何度も繰り返し繰り返し体に覚えこませた体捌きの修練の成果が花開いたのである。

自信をもつて放つたのだろう。あつさりと自身の斬撃をかわされ、グエインは明らかに狼狽していた。

一瞬でも焦りを浮かべた表情を隠すかのように、グエインは続けて横なぎに木剣を振るつた。

対するレイルは、素早く片足を引いて体を後退させると、またもやグエインの木剣をかわしたのである。

一度ならず二度までも。それは決して偶然ではないことを示していた。

一方で、かわしたレイルもグエイン以上に驚きの表情を浮かべているのが垣間見えた。

彼自身も信じられないのだろう。今まで痛い目に合わされてきた

グエインの木剣を回避できたのだから。

もつともなことだが、これは当然のことなのだ。それだけの地力を彼は持っていたし、その力を有効に發揮できるようにするための修練をこれでもかというほど施してきたのだから。

綿密にグエインの剣撃を読んで次にこう動いてこうかわす、といった頭で考えて回避したことではなく、体が先に動いてかわせたことについてもレイルは驚いているに違いない。それこそがまさに「体で覚えた」ということで、より高度な実戦になればなるほど必要不可欠のことだった。

頭で考えてから行動に移していっては、命が幾つあっても足りないのが実際の戦いというものである。反射的に体が動き、相手の攻撃に対処し、防御あるいは攻撃に転ずるという、流れるように戦闘を組み立てていくことが理想だ。

完璧にこなせる領域までレイルが到達しているかと言えば、もちろんまだほど遠い状態ではある。

ただ、確実に一步は踏み出している。

焦ったグエインが置み掛けるようにして始めた連撃にも、レイルは的確に対処して回避し続けていることがその証だった。

これまでならば確実に直撃していた剣撃を一度もかわされて心の均衡に微妙にずれが生じ、それが影響しているのだろう。グエインの剣撃は、剣を繰り出す度に微妙に鈍くなっているのが窺えた。

また、レイルに対する見通しの甘さがグエインの冷静さを簡単に欠かせた要因にも違いない。おそらく一週間やそこらで何が出来るかと高を括っていたのだろう。その油断が仇となつた。

ただでさえレイルの回避能力が向上しているのである。あの剣撃ではレイルに傷一つつけることはできないだろう。

そして、レイルもいつまでもかわしているだけで終わるはずがない。

彼に教えたのは相手の攻撃をかわす術だけでなく、相手を攻撃する術も含まれているのだから。

何度も目かの斬撃をかわした後、レイルの腕が翻った。

木剣でグエインの剣撃を弾き返し、流れるように攻撃へと転じたレイルの打撃が彼の横腹に命中したのである。

痛さと、信じられない思いを顔一面に浮かべてよろめくグエイン。有効打を彼に与えたのは恐らく初めてに近いのだろう。打撃が命中したことにより一瞬驚いているレイルの姿があった。

が、すぐに我に返ったようで、続けて剣を放つ。対するグエインも歯を食いしばって痛みを堪えながら、今度は迫り来るレイルの攻撃を木剣で必死に防御していた。

大勢は完全に逆転し、レイルがグエインを圧倒し始めた。あれだけ自信に溢れていたグエインの姿は見る影もなく、今や一方的に守勢に回っている。

ユイリスにとって、こうなることは当初からわかつていたことだつた。

始めはグエインが攻勢に出るだろうが、どの時機を経て切り替わるかはともかく、必ず立場が逆転することは2人の力を客観的に比較すれば自ずと答えが出ていたからである。

では、安心してこのまま結果を待てるか、と言えばそれはまた別の話だ。

しかもユイリスは、得体の知れない胸騒ぎを感じていたのである。確かにレイルは優勢に立つたが、ほんのわずかながらその剣先から攻撃当初の鋭さが次第に欠け始めているのをユイリスは見切っていた。

疲れから来ているものなどではない。大勢には影響はない程度だが、その変遷はレイルの心に、彼自身も気づいていない隙間『『油断』』が生まれた結果である可能性が高い。

また、確かに今やほとんどの面でレイルはグエインを上回っていたが、1つだけ確実に上回っていないことがあった。

それは『経験』である。

実は、今回の手合いでユイリスが最も懸念していた点こそ、2人

の経験の差だった。

様々な状態、状況を経験してこそ、戦闘においての臨機応変や柔軟性は磨かれる。その経験が、レイルは相手よりも絶対的に不足していた。

もちろんその点も踏まえ、様々な想定をして修練も行つた。

ただ、それはあくまで修練でのこと。台本のない実戦では想定し得ない事態も巻き起こるであろうし、仮に想定していたとしても、実際の事態に対応できるかと言えばそれはまた別の話だ。実際に対応できるかどうかを左右するものこそ、培つた『経験』だからである。

胸騒ぎの果てにあるものがいつたい何か。それはわからない。

わかっているのは、レイルの感情の変遷、そして2人の経験の差が胸騒ぎに影響を及ぼしているだろうということだけだ。

それでも、グエインに有効な手数がなければレイルの勝利は時間の問題である。

そう、このまま何事もなければ。

ユイリスは彼の勝利を祈つた。

ただ、祈つた。

いけるぞ！

守勢に回り、一方的に攻撃を受け止めるだけになつたグエインが、ついにじりじりと後退し始めたのを見、レイルは勝利を確信した。初めは半信半疑だつた。

グエインに勝つための辛く苦しい修練を、わずか一週間とはいえこなしてきたのである。多少なりとも力はつけられた、という自信はあつた。

しかし、これまでグエインと手合いをして勝てたことなど一度もない。

いつも負け続けてきたのである。力をつけた自信はあっても、確

実際に勝利を収められる自信を持つまでは至らなかつた。負けられない、という思いを固めることは話が違う。

ところが、実際に手合いが始まるとまつたくもつて予想しえない事態が起きたのである。

散々翻弄してきたグエインの剣が、動きが、あたかも時の流れが遅くなつたかのごとくはつきりと捉えられたのだ。さらに、ごく自然に体が動き、彼の攻撃を日々と回避することができたのである。毎度やられてばかりだつたのがまるで嘘のようにグエインの剣をかわすことができたレイルは、自らの成長に驚いていた心が落ち着いてきた頃、ついに攻撃へと転じた。

素人ではないとはいえ、せいぜい毛の生えた程度の剣でしかないグエインには幾つかの隙があり、驚くほど鍛度を上げたレイルはその隙をはつきりと認識していた。

苦し紛れに放つてきた突きを切つ先で打ち払い、間合いを詰める。がら空きとなつたグエインの上体に対し、頭で考えるより体が反応し小さく振り抜いた斬撃を放つた。

レイルの木剣は吸い込まれるようにグエインの横腹に命中。たちまち彼は苦悶の呻きを上げ、苦痛に顔を歪めながらよろめいて2歩、3歩と後退つた。

まともな打撃を彼に与えたのはこれが初めてのことだけに、レイルは一瞬我が目を疑つてしまつ。これまで散々煮え湯を飲まされてきたグエインに対し、一矢報いたのだ。信じられない思いに駆られても無理はない。

では、これは夢なのか、それとも幻なのか。答えは否。現実なのだ。

であれば、この好機を逃すことは愚の骨頂である。

修練によつて著しいまでも剣技を、戦術に対する才を伸ばしたレイルは、思考を素早く切り替え、すぐさま次撃を繰り出した。さすがにグエインも必死になつて堪えていたため、なかなか直撃を与えることはできなかつたものの形勢は真逆になつた。格段に素

早さと鋭さを増したレイルの剣撃が間断置くことなくグエインに襲いかかり、グエインは反撃の糸口すらまつたくつかむことができぬまでに追い詰められていったのである。

レイルの剣は手合いを完全に支配していた。

ことここまでくれば、初めてにして大変価値ある一勝を確かなも

のと感じるのも当然のことだ。

不確かな自信を確信に変えたレイルの攻撃は、この手合いの終焉を飾ろうとしていた。

強烈なレイルの斬撃を受け損ねて体勢を崩したグエインは、たたらを踏むようにして後退るも踏ん張りが利かずそのまま後ろに倒れてしまう。

丁度尻餅をついた形になるグエインだが、その倒れ方に勢いがありすぎた。尻餅をついた衝撃で木剣を手離してしまい、まったくの無防備になってしまったのである。

グエインにとつては絶体絶命の窮地。

レイルにとつては完全なる勝機だった。

手合いはあくまで修練の一環であるため、相手を必要以上に傷つけたり、ましてや殺すことが目的ではない。

よつて、相手が戦闘力を明らか失つた場合は、その鼻先に木剣の切つ先を突きつけることで手合いの勝敗を決めるのが一般的な規定だった。

グエインは武器を取り落とし、さらに尻餅をついた状態で明らかに無防備だ。

このまま彼の鼻面に木剣を突きつければ、誰が見てもレイルの勝利を疑う者はいないだろう。

記念すべき、初めての勝利。それがとつとつ手の届くところまでやつてきた。

コイリスの厳しい修練に必死になつて喰らいつき、辛く苦しい一週間を耐え抜いたこと それだけではない、この半年の屈辱の日々を耐えてきたことが今まさに報われようとしている。

これから迎える結末に、胸が高鳴る。もはや後がないグエインは苦虫を噛み潰した表情でこちらを睨みつけていたが、今となつてはまったく気にならなかつた。

これまで味わつたことのない勝利の高揚感に、レイルは頬を高潮させていた。

一步、また一步、倒れているグエインに近づく。

これで終わる。

なんとも言えない思いが胸の内一杯に広がるのを感じつつ、いよいよ木剣を宿敵の鼻先へと突き出そうとする。

その時だつた。突然、急に胸焼けを起こしたような非常に不快な感覚に襲われた。

これまで感じたことのない感覚に、反射的にレイルの動きが止まる。

いつたいなんなんだ？

考えてみても心当たりはまったく浮かばない。

その答えを教えてくれたのは、この場において彼の最大の敵であった。

もちろん忘れていたわけではない。

ただ、自身に急激に湧き起つた不快な感覚に気をやつてしまつたのも間違いないことだつた。

それまで苦渋に満ちた表情をしていた眼前のグエインが、いつの間に唇の端に歪めて不敵な笑みを漏らしていたことに気づいた時ももう遅かつた。

グエインの手が翻つた瞬間、一瞬にして視界一杯に広がる無数の何か。

とつそに両手を目の前に翳して瞬間的に防御するが、間に合わなかつた。

目をつぶるも、その何かが両の目の中に入つてしまつたのである。激痛が走り、目を開けることができない。

慌てて手の甲で目元を拭うが、まったく効果はなかつた。

異物が目の中に入ったことにより当然滝のように涙が溢れ出しが、事態はまったく好転しなかつた。

突然、激痛は両目元だけでなく、腹の真ん中にも湧き起こつた。痛みと共に襲い来る浮遊感。レイルは、自分の腹に何かが当たり、後ろへ弾き飛ばされたことを悟つた。

一週間とはいえ、ユイリスの地獄の修練を耐え抜いただけあり、レイルは目が見えずとも反射的に受身を取つて衝撃少しでも緩和していた。

それでも、背面から地面に叩きつけられたことは変わりなく、その衝撃に呼吸が一瞬止まりむせ返る。

目元と腹、さらに背中から襲い来る痛みといつも重苦に、むらに四つ目の苦しみがレイルを襲つた。憎きグエインの勝ち誇った肉声となつて。

「ざまあねえな、レイル。それなりに腕を上げたことは認めてやるが、しょせん付け焼き刃。たかだか一週間やそこらで俺様に勝てるわけがねえだろ？」

痛みのせいで見開くことはできなかつたが、片目をほんの少しだけなら開けることはできたため、涙の向こうにうすらと映る男の姿を見た。

立ち上がり、いつの間にか取り戻した木剣を弄びながらゆっくりと近づいてくるグエインだつた。

あとほんの少しだけ手を伸ばせば手に入った勝利。それが、ほんの刹那の気の迷いから失われようとしている。

満面に喜色を浮かべたグエインが、木剣を振り上げているのが見えた。斜め横なぎにそれは振り下ろされた。

衝撃と激痛が、再びレイルを襲つた。

ユイリスが抱いた懸念は、現実のものとなつてしまつた。

木剣を失い、さらに尻餅をついた状態に追い込まれたグエインに

勝機はもはやなく、レイルがどめを示すために木剣を彼の鼻先に突きつけるだけで勝敗は決まるところだつたにも関わらず。

なぜか。その理由は明白だつた。

ユイリスは、グエインが尻餅を着いた時点で、逆にレイルに危機が迫つたことに気づいた。狼狽している表情とは裏腹に、グエインは戦意を失わず河原の『砂』をゆっくりと握り締めていくのを見逃さなかつたからである。

一方のレイルはその彼の行為にまったく気づいていなかつた。目の前の勝利だけしか見えていない状態に陥つていた。

このままではグエインの手から放たれた砂つぶてがレイルを襲い、まったく気づいていない彼は無防備なままその攻撃を一身に受けてしまうことだらう。

砂つぶてが目に入れば、痛みで目を開けられないのは必至。そうなれば勝負の趨勢は再び逆転し、今度は圧倒的に不利なレイルに勝機など塵ほどもなくなつてしまつ。

グエインが無法を働いているのであれば、それを理由に手合いを止めてレイルの反則勝ちと決定づけられるが、直接目を突くのは禁じられているものの砂を投げつけてはいけないという規定はない。手合いの掟が破られていない以上、一対一の手合いが一度始まつてしまつたら助けに入るのももちろんのこと、声をかけることすら許されない。もしそれをすれば、規定を犯したとみなされて逆にレイルが反則負けとなつてしまつ。

彼を助けることはできない。

それでも、まだ今ならば間に合つ。自分の力だけで窮地を乗り越えられる。

グエインの異変に対しレイルが一刻も早く気づくこと ユイリスはひたすらそう願つた。

彼女の願いが通じたのか、レイルの動きが止まつた。気づいてくれた ユイリスは歓喜に小躍りしそうになるも、すぐに凍りつく。遅かつたのだ、全てが。

グエインの手が翻り、彼の手を離れた砂つぶては手をかざしてたレイルの防御をかいぐってその両の目に飛び込んだのだから。懸念は、最悪の事態となつて具現化した。

両目を潰されてしまつたレイルは瞬く間に打ち倒され、それまで圧倒されていた鬱憤を晴らすかの「ぐく、グエインの陰湿な攻撃にさらされていた。

目が利かない中、レイルは激痛に耐えながらも勘を頼りに木剣を振り回して反撃を試みてはいたが、ことごとく失敗してしまつ。懸命に反撃しようとしている姿勢がグエインの嗜虐心を煽つたのか、圧倒的有利な立場となつた彼は、満面に負の喜色を湛えてレイルの体にさらに木剣を打ちつけていた。

もはや、レイルがグエインに勝利するのは極めて難しい。皆無に近いと言つても語弊はないだろう。

すぐにでも駆け出し、手合いを止めさせたかった。先ほどから握り締めている拳は、指の色が赤く変色し始めた

だが、足が動かなかつたのだ。一步を踏み出せなかつた。

我が身が可愛いから？ 否 レイルの敗北はすなわち自身がグエインの慰み者になるということだが、無論そのような表面的で浅薄なことなど原因ではない。

この、絶望的な状況でも、レイルの勝利を感じる口の心が彼女を留めていたのである。

まだレイルは終わつていない。

ユイリスの教えた全てを、彼は出し尽くしていない。

彼には窮地を脱する手立てを教えてある。今のこの状況を覆せる方法を。

レイルがそれに気づき、実行できれば結果は必ずとついてくる。彼の勝利を邪魔してはならない。

誰が見ても勝負の帰趨、グエインの勝利を疑わないであろう状態の中、ユイリスはレイルが手合いを制することを信じた。

他でもない。とても短い間ではあつたが、レイルは彼女が育てた

初めての『生徒』なのだから。

何度も体験した痛みだが、今日味わった痛みはことさら度合
いが激しかった。

それは単純な肉体的な苦痛以上に、精神的にとても苦しいものだ
ったからだ。

一時は勝利を確信するほど圧倒的優位に立つたにもかかわらず、
今はただグエインの剣を体で受けるのみ。後ほんの少し手を伸ばせ
ば得ることのできたものが失われたのだ。その喪失感は計り知れな
い。

それでもできることはしようとした。恐らく砂を投げつけられた
ため、目が開けられなくなり視界を失いはしたが、グエインの気配
を頼りに木剣を振り回してみたのだ。

結果は全て空振り。まったく功を奏さず、逆に空振りしたところ
を攻撃されてしまった。

後は一方的に打たれるのみ。

砂の入った両目の激痛はいまだ癒えず、まったく目を開けられな
い。かなり涙を流したが、効果は現れていなかつた。

体に蓄積したグエインの打撃もじわじわと効いていた。最後のよ
りどころである自身の木剣を必死に握り締めていたものの、何度も
腕を打たれたためにだんだんとその感覚が失われてきていた。

やっぱり、グエインには勝てないのか。

花開いた自信を無残に打ち碎かれ、レイルはもはや為すがままの
状態になっていた。立っていることなど当然できず、河原に倒れ込
み頭を抱えて丸くなつてできる限りの防御の姿勢を取るのが精一杯。
喪失感に連鎖して、絶望感が急速に胸の内を占めていく。

どうせ負けるなら、いっそ敗北をグエインに認める方がいいに違
いない。これ以上、痛めつけられることはなくなるからだ。そこま
での思いが首をもたげ始めていた。

崩れ折れた体の痛みに、心まで折れそうになるレイル。

その彼を、崖っぷちで踏みとどまらせたのは、生涯で初めての、そして最高の剣の師匠の存在だった。

「いつもあつさり勝つてばかりじゅつまらねえからな。お前に花を持たせてやつたんだよ。そんなこともわからず、お前、自分が勝てると思つたる？ 残念だつたな。あんないい女が手に入るつてのに、勝ちまではお前にゆずれねえよ」

ほぼを勝ちを得たことにすっかりご満悦になつたグエインだつた。レイルを打ちすえる手を休め、余裕たつぱりに言い放つたその言葉。もはや風前の灯火だつたレイルの『戦意』を蘇らせたのは、グエインの勝利はユイリスの身柄が彼のものになつてしまつという現実である。

単に自分が負けるだけならまだいい。

だが、自身の敗北はそれだけでは済まない。大切なユイリスをこのまま無為にグエインへ差し出すような結果に終わることなど絶対に許せなかつた。

グエインに勝つしかない。

しかし、圧倒的に不利なこの状況をどう覆すか。

答えは自然と脳裏に浮かんだ。いや、蘇つたと言つ方が正しいだろ。ひ。

そうだ、ユイリスが教えてくれた『とつておき』だ。

成功する可能性が必ずしも高いわけではない。

外せば、当然意図することをグエインに気づかれると考えて然るべきだつ。それでもこの状況を開拓するには、もはやあの『とつておき』ぐらいしか思いつかない。

打たれすぎてしまつた今の体の状態を考えれば、機会は一度きりだろう。一度はないと考え、ただの一度の機会を活かす覚悟をすべき時だつた。

レイルの心は一つだつた。

「何！？ なんだ、まだ動けるのか？」

グエインが驚く声を耳に受けながら、レイルは必死に河原を転がつた。『とつておき』を行使するためには彼との間合いが近すぎる。距離を置くためにも、転がつて間合いを取つたのだ。

「レイル君、諦めが悪いってのは感心しないなあ。男らしく、潔く負けを認めた方がいいんじゃねえか？」

嫌悪しか抱けないグエインの声。

だが、今はその声ありがたい。なぜなら、気配は読みきれずとも、グエインの声が彼のいる方角、彼と自分とのおおよその距離を教えてくれるのだから。

彼の間合いが十分取れたことを確認できたレイルは、久しぶりに一の足で立ち上がり木剣を構えた。それがグエインの気に障つたようだった。

「なんだよ、この期に及んで自分の置かれた立場に気づいてないようだな。よし、わかつた。そろそろ飽きてきた頃だ。勝負、決めさせてもらひつけ」

舌打ちしてそう吐き捨てた彼が歩き出す足音が聞こえる。グエインはとじめを刺しに来るつもりだ。

それでいい。それこそが『とつておき』を行使するに最も適した状況なのだから。

レイルは一度きりの機会を外さぬためにも、激痛が襲い来る両の目を少しでも開けようと試みた。

右目はあまりの痛さに開けることができなかつた。左目も痛みは激しかつたが、どうにか薄目を開けることに成功した。涙が溢れ出しているので見える光景も滲んでいる上、視界もほとんどない。

それでも近づいてくるグエインの姿、拳動を確認することができる。それで十分だ。

体中が痛い。立つているのもやつと。ただ、戦意だけは今日最も高かつた。それが、極限状態に置かれながらも、冷静さを逆に高めていたのかもしれない。

わずか一瞬の機会を逃さぬべく、研ぎ澄まされた感覚が広がつて

いく。だんだんと、グエインが河原の砂を踏みしめる音しか聞こえなくなつていつた。

その時が、やつてきた。

「これで、終わりだ！」

高らかに宣言しながら木剣を掲げ、グエインが飛びかかってきた。頭上に迫る、グエインの木剣。

今だ！！

ぎりぎりまで引きつけると、レイルは懸命の足捌きで後方へわずかに下がつた。

必然、振り下ろされてきたグエインの木剣は目標を失いそのまま下方へ流れていく。その瞬間を待つていた。

持てる最後の力を振り絞つて、レイルは腕を振るつた。流れ行くグエインの木剣目掛けて。

それはまさに、後ろからの追い討ちとなつた。

勢いがついていたところに、さらに強烈な打撃が与えられたのである。そのまま木剣を握り締めていることなど、できるわけがなかつた。

あたかも抜け落ちるかのように、グエインの手から木剣は弾かれ、遠くへ飛んでいく。

だが、これで終わりではない。

ユイリスから授かつた起死回生の技が真価を發揮するのは、次の一撃だつたのだから。

思い切り振り下ろした木剣の力を殺さず、足を踏ん張り、膝のバネを上手く使って全てを反動に変える。

切り返される木剣。

滲む視界の向こうに一瞬垣間見えた、驚愕に染まるグエインの表情。

自然と放たれる絶叫。

鈍い音。

やつてくる静寂。

全ては、終わりを迎えた。

人が倒れる、乾いた音が河原に響く。
後は、荒い息遣いだけ。

誰の息遣いか。紛れもなく、それはレイル自身の息遣いだった。
肩を大きく上下させて呼吸を繰り返したレイルは、そこでようやく自分が渾身の力をもって木剣を思い切り斬り上げたままの状態で固まっていたことに気づいた。

「勝負は、グ、グエインは！？」

我に返ると、慌てて宿敵の姿を探す。すると、すぐ目の前で仰向けに倒れ伏している男の姿が視界に飛び込んできた。

全ての力を使い果たしたため、もはや緩慢にしか動かない体に鞭打ち、木剣を捨てて男の元へと歩みよる。ゆっくりとしゃがみ込んで手を伸ばし、男の体を裏返した。

それは、悶絶したグエインだった。もちろん死んでなどいないが、凍りついたその表情には恐怖と、そして苦悶の表情がありありと浮かんでいた。

最後の一撃　まつたくの無防備となつたグエインへ下から渾身の力を思い切り斬り上げた一撃は、違うことなくグエインの体へと命中し、彼を河原へと沈めたのである。

勝利は、レイルと共にあった。

「やつた……、俺、やつたのか……？」

信じられない思いが胸一杯に広がっていく。

ただでさえ垂れ流しだった涙が、さらにこぼれた。

だからだろうか。急激に両の目から痛みが引いていく。恐る恐る瞬きをしてみると、左右いずれの目も見開くことができた。

いつの間にか、背後から胸に回されている細い腕に気づいた。背中からそっと抱きしめられていたのだ。

「心配したんだから。でも、本当によく頑張ったわ」
耳元でささやく、彼を心から労う声。顔を見ずとも、もちろんすぐにはわかった。

姿勢を少し傾け、首を巡らし振り向く。

「おめでとう、レイル。貴方の勝ちよ」

彼に勝利をもたらした、彼の敬愛する師匠が、これ以上ない温かく優しい微笑みをその美しい面立ち一杯に湛えていた。

木扉が開放された窓から射し込む月明かりはどこか優しかった。傷ついた体をベッドに横たえたまま、レイルは目を閉じて眠るでもなく空ろな視線を月と星の光がまばゆい夜空に向けていた。

劇的な逆転勝利を飾ったグエインとの手合いの後、レイルとユイリスはロイドたちに見つからぬようこつそりと帰宅。ユイリスから傷の手当てを受けてからこうして大人しくベッドに臥せつたのだが、目蓋は重くなってくれそうもなかつた。

一時は敗北寸前にまで追い込まれ窮地を味わつたものの、ユイリスの教えを活かして危機を脱しグエインを打ち負かした興奮が冷めやらないから、といふこともある。

だが、それ以上に衝撃的だつたできごと。それが、彼を眠りの世界から遠ざけていた。

彼は何度でも回想する。

ほんの数刻前に起きた、驚くべきできごとを。

「見せつけてくれるじゃないか。だが、坊やにはまだ早いんじゃないかな
いか？」

抱きしめてくれているユイリスの心地よい温かさに、いつまでも体を委ねていきたい思いにかられていたレイルを現実へと呼び戻したのは低い男の声だつた。

泣き腫らした重い目蓋をどうにか開き、声のした方 倒れ伏したグエインを挟んだ向こうを見やつた。

声の主は、グエインに同行したあちら側の見届け人の男である。

彼は不機嫌さを顔面一杯に貼り付けたまま、ふざけた口調とは裏腹の鋭い視線をこちらに向けてきていた。

「しかしなんだ。グエインが楽勝と言つていたから相手はどんなうすのろだと思っていたが、なかなかどうして、腕の立つ奴じやないか。最後の技は目を見張つたぞ」

一方的に喋り倒している男。一見、彼はレイルを褒めちぎつてゐるようだつたが、眼光は決して好意的ではない。敵意が全身から滲み出していた。

男の真意は、すぐに明らかとなる。

「ど、大いに関心させてもらつたが、それはそれ。俺の舍弟を叩きのめしてくれた事実は許しがたい問題だ。きつちり落とし前はつけさせてもらうぞ」

凍てついたような男の眼差しはさらに厳しいものとなつた。彼はおもむろに背中へと腕を回すと、背後 服の中に隠し持つていたから長い棒のようなものを取り出した。

眼前に取り出したそれを両の手で持つと、一方へとゆっくり引っ張つた。すると、中から現れたのは鈍く光る鋭い刃。小剣が仕込まれた偽装小剣だつた。

相手は真剣を取り出した。レイルの背筋に冷たいものが走る。

こちらも木剣を持っているとはいへ、今や満身創痍。満足に動くことなどできない。

ましてや相手は真剣なのだ。木剣で受けてどこまで持ちこたえられるかわからない上、万が一受け損なつた場合どうなるか 答えは火を見るより明らかだつた。

グエインに放つたようなとつておきの奥の手はもつない。まさに絶対絶命の窮地にレイルは唇を噛んだ。

突然、彼の視界が何かに遮られた。

ユイリスだつた。レイルの背後にいたはずの彼女は、音もなくレイルを背後に追いやるようにして彼の眼前に立つたのである。

「で？ そんなのを取り出していつたい何が言いたいのかしら」

真剣を持つ屈強な男を前にして怯むことなく言い放つユイリス。度々彼女には驚かされてきたが、彼女に怖いものはないのか、とあらためて驚かされる。

男の方もレイルと同じ気持ちだったようで、偽装小剣にもまったく動じないユイリスに拍子抜けした表情を一瞬見せたが、すぐに我を取り戻していた。

「ユイリス、だつたな。多少は剣の腕に自信はあるようだが、あまりいきがらない方がいいぞ。上には上がいるということをわきまえるのが身のためだ。ま、俺も女子供相手に手荒なことはできればしたくない。この手合い、お前たちが負けを認めるならグエインのことは目をつむつてやるつ」

「あら、正々堂々と勝負に臨んでレイルは勝つた。なのに、どうして負けを認めなければならないのかしら？」

「気の強い女だな。少しは痛い目に合わないと口の置かれている立場つてものがわからないのか？」

「どうして痛い目に合わされなければならないの？ おかしいわね。最初の取り決めと話が違うわ。いつたいどうじうこと？」

明らかに男はこちらを脅していた。

いや、端から彼らはそのつもりだつたのだ。万が一にもグエインが負けてしまつたら、その負けを目の前の男が覆す算段をしていたのである。見届け人などという体のいい言葉を使って男が同行していたのは単なる見せかけだったのだ。

がつしりした体躯の男は、全身からグエインよりもはるかに手だれである雰囲気を滲み出させていた。低い声はその迫力をさらに増長させていた。

にもかかわらず、ユイリスは一步も引かない。むしろ、男を焚きつけるような言葉を次から次へと投げかけていた。

いくらユイリスが相当な使い手であるとはい、相手は真剣を持っているのだ。さすがに不安が胸を過ぎるが、当の彼女は先ほどから一環して毅然とした姿勢を崩さなかつた。

「『約束』、なんてものはその都度変わるものだ。そんなことも知らずに生きてきたのか？　おめでたい女だな」

「つまり、そちらはお互いが納得して取り決めた『約束』を反故にする、ということなのね？」

「そうだ、と言つたら？」

ぬけぬけと言い放つ男。これにはレイルも憤りを隠せず、拳を握り締めた。

怒りに氣を高ぶらせたレイルだが、すぐに我に返る。返らされた、と言つべきだらうか。そつと後ろ手にユイリスの右手が差し出されていたことに気づいたからだ。

彼女が何を無言で言わんとしているのか。短い間ではあるとはいえ、彼女と交流を深め、彼女の弟子として修練を重ねてきたレイルはすぐに悟つた。

悟りの答えとして、彼も無言で手に持つ木剣の柄を彼女の手に受け渡した。

「なら、私はもう影に徹する必要はないわね」

レイルから木剣を受け取つたユイリスは、そつと言つた後、後ろを振り返らぬまま小声で、

「レイル、相手が例え真剣を持つていたとしても、相手が間違つているのなら屈しては駄目よ。戦い方を間違えなければ、真剣相手だとしても恐れる必要はないわ。弱い己の心に負けず、勇気を持つて事に当たれば道は開ける。よく見ていなさい、道を開いてみせるから」

と語つた。彼女はそのままゆっくりと前へと踏み出す。

「ほう、やる気か。いいだらう、その小生意気な鼻つ柱、へし折つてやる」

偽装小剣を構え、男も前へと踏み出した。

もはやレイルにはユイリスを見守ることしか出来なかつたが、不思議と不安はない。

彼女の姿勢、彼女が語つた言葉、それらがレイルの心に深く響い

ていた。

彼は師匠の背中を静かに見送った。
いかな戦いになるのか。圧倒的にユイリスにとつて不利な条件での勝負である。どんな展開になつても見逃してたまるかと、まだ痛む両目をどうにか見開いて動向を追おうとした。

図らずと行わたるこの戦いは、だがレイルが想像できる程度の生易しいものではなかつたのである。

勝負はたつた一撃で終わつた。硬いものを粉碎するような鈍い音とともに。

いつたといつ始動したのかもわからなかつた。

氣づいた時には、木剣を横に屈いだユイリスの姿と、その切先の方向に大きく吹き飛ばされていく男の姿。

弾かれるように宙を待つた男は、一の腕に新しい関節を一つ作られた拳句、河原に体躯を叩きつけられて転がり、ようやく静止した後には微動だにしなくなつた。

あまりにも衝撃的な光景に、両目に走る痛みも忘れ見入るレイル。目にも留まらぬ、という言葉があるが、誇張や比喩などではなく現実のものとして存在していることを彼は知つた。

もちろん見切ることなどできるわけがないのであくまで推測だが、男の真剣など恐れるに足りないユイリスにとつてみれば彼の動きなど蟻が止まつている程度のものなのだろう。だからこそ、相手が真剣でも躊躇せずに踏み込み、相手の剣が自身を害す前に打撃を与えられたに違ひない。

と、顧みることはできても、一瞬でそれを為してしまつた彼女の神速と言つてもいい体捌きと剣速はあまりに常軌を逸していた。なにより、あれだけの体躯を持つ成人の男を、ただの一撃で、あのか細い腕で遠くへと弾き飛ばしたことなどとても人間技ではない。その破壊力がいかに壮絶だつたかは、男に打撃を与えた木剣が衝撃に耐え切れずにはね曲がつてしまつていたことからも分かる。

少なくともどんなに手だれでも、このような芸当は女性には不可

能だと直感が囁きかけてきていた。

修練を通して彼女の凄さは身に染みていたはずだった。修練では手加減していることもわかつていただが、ある程度彼女の本当の強さを予測していたつもりだった。

その予測が根本から間違つていたことを、彼は知ることとなつた。つまり、修練の時、彼女は手加減どころか爪の先程度の力しか見せていなかつたのだ。

レイルは凍りついたようにあまりにも凄まじい光景をただただ凝視するしかなかつた。

一方、驚愕に呆然とするレイルをよそに、当の本人はいつの間にかにくだんの男の元へと歩み寄つていた。派手に宙を舞い、河原に叩きつけられた拳句一転三転しようやく仰向けで止まつた男は、二の腕をありえない方向に曲げたまま力尽きていた。

それでもか細いうめき声が聞こえてくる。どうやら彼女は命まで奪つたわけではないようだつた。

「聞きなさい」

男の傍に立ちはだかつたコイリスは、意識が混濁しているであろう男を見下ろしつつ声を張り上げて言った。

「当初の約束通り、今後一切、レイルとレイルの近親縁者に害を為すこと、近づくことを私は許さない。これは警告よ。禁を破れば、次は命がないと听いなさい」

恐ろしいほど凍りつくような声だつた。優しさや温かさなど微塵も込められていない、いつものコイリスからは想像もできないほどの冷徹さに満ちた声に、レイルは彼女が本気で怒つているということを感じた。

彼女はこちらに背中の多くを向けているため、その表情までを窺い知ることはできない。

だが、以前グエインを制止した時同様、彼女の全身から一切の妥協や反論を許さない毅然とした意思の力が放たれていることを感じ、それ相応の恐ろしい表情をしているだろうことは認識できた。

緊迫した雰囲気が辺りに立ち込め、レイルも固唾を呑んで事のな
りゆきを見守っていたが、均衡を破つたのは当のコイリスだった。

「さ、帰るわよ」

彼女の声　いつもの優しい声だ　に、レイルは体の強張りを
解いた。

言いたいことを言つたので満足したのか、それまでの冷徹な意思
がまるで幻だつたかのように、踵を返して事も無げにこちらへ戻つ
てくるユイリス。レイルを視界に納めたその表情には、薄つすらと
笑みまで浮かんでいたほどである。

あまりにも急激な変化に目を白黒させたレイルだが、それでもど
うにか心を落ちつかせてふと気になつたことを問うた。

「グ、グエインたちは」

確かに憎むべき輩たちだが、今はもう何をすることもできない。
傷を負つて倒れている以上、いくら敵でもそのままにして立ち去る
には若干気が引けたのである。

これに、コイリスの答えは明快だつた。

「放つておきなさい。手加減はしたから命を落とすことなんてない
し、しばらくしたらこれに懲りて自分たちの足で大人しく帰るでし
ょ。それとも、約束を破つて私を手籠めにしようとした彼らの面
倒まで見ていく?」

彼女の言う通りだつた。男が認めさせようとしていた敗北をもし
呑んだら、結果は負けが付くだけでなくコイリスがグエインのもの
になつてしまつていたのだ。

それを強要しようとしていた奴らの面倒などビリして見てやれよ
うか。レイルは無言で首を横に振つた。

「でしょ?　じゃ、帰りましょ?」

満足げに笑みを浮かべたユイリスは、体が自由に動かないレイル
の腕に腕を回して支えると、テルミット亭への帰路へと誘つ。

こうして、悶絶しているグエインと意識が混濁したまま倒れた男
を後に、2人は夜のギョーム河岸を後にしたのだった。

幾度振り返つても、いまだに信じられないほどのできい」とだった。単に『強い』、という一括りの言葉で表現できないほどの、その場にいる者全てを圧倒してしまうような、そんな力をユイリスは見せつけだのだ。

思い出せば思い出すほど、なんだか自分がグエインに勝つことなど遠い昔の大して重みのないものに思えてくる。

月の夜空から自室の天井裏へと視線を戻し、レイルは小さく嘆息した。

彼女の実力は果たして本当は幾ばくのものなのか。もはや見当もつかない。

信じられないほどの彼女の力はレイルに衝撃を与えたが、その衝撃は同時に一つ、彼に気づかせることとなつた。

あれだけの力を持つ彼女だ。文化や伝統を見るためだけに諸国を渡り歩いているという話に嘘はなくとも、旅をする理由はそれだけではないはずである。何らかの目的でこのファルアリア王国へと足を踏み入れ、このサイレア近郊までやつてきたに違いない。

彼女がこの町へ来てからもう2週間近くが過ぎ去つていた。

失われていた体力はすっかり元の通りに回復し、さらに彼女が担つたレイルの修練師匠役も目的を達成している。

彼女は昔からこの町に居たわけではない。そして、彼女がこの町に居続ける理由は、もはや失われていた。

レイルは直感的に感じ取つた。

ユイリス＝レンファイアとの別れが、もう目の前まで近づいているということを。

サイレアに来てからほぼ2週間が経ち町中も方々歩き回つたつも
りだつたが、思えばここに来るのは初めてのことだ。

真上に昇つた太陽の日差しを心地よく受けながら、ユイリスはサイレア郊外にある小高い丘の緩やかな斜面を一步一歩踏みしめて登つていた。

運命の手合いがレイルの勝利という結果で終わり、明けた翌日。いつの間にか傷だらけで起きてきた息子の姿に大騒ぎとなつたフュンフル夫妻にありもしないでき」と 夜釣りに出かけ、化け物じみた巨大怪魚と格闘した末の有様というもちろん創作で、言い訳にならない言い訳 を信じ込ませるのに大層骨を折つたものだが、どうにかその場は収めることに成功。

レイルと共に胸を撫で下ろしたものだが、彼が昨晩為し得たことに比べればほんの些細な後始末である。

厳しい一週間の修練に耐え抜き、レイルは見事に己の才能を開花させ、グエインを打ち破つた。それも、グエインの狡猾な戦法を受けた上で勝利である。

今回ることは自らの力で難題を克服したということで大いに自信になつたであろうし、一回りも一回りも彼のことを成長させたに違いない。

それはつまり、ユイリスの役目 すなわち、『剣と勇気を与える』務めも終わりを迎えたことを意味する。

そう、サイレアを離れる時がやつてきたのだ。

ただ、その前にやつておかなければならぬことがあつた。
だからこそ、この丘へとやつてきたのである。

「来たか」

小高い丘の頂き辺りにそびえ立つ巨木の元へと近づいた時、彼女を迎えたのは特徴のあるあまり抑揚のない声。

声の主は巨木の影から姿を現した。ウルゼック＝ラインローグである。

「必ず来るとは思つっていた。様々な肩書きを持つ貴様も、元をたどれば我らの恩師イスカムが最後の弟子。戦師が認めた者が賢明な判断を下せぬはずがないからな」

3年ぶりの再会の際はあれほど辛辣だつたウルゼックだが、今は表情も語り口も穏やかだ。実際、色々と誤解を受けやすい性分をしている彼ではあるが、理路整然としながらも損得だけでは決して動かない義に厚い心に血の通つた人間である。戦師イスカムから託された『遺志』を果たすためだけに、国を跨いでユイリスを探し回つていたことがその証の一つだつた。

そして、彼は手に持つた小さな木箱から戦師イスカムの『遺志』を取り出した。『調和の法環』という名の遺志を。

「ここへ来たということは、本来進むべき道へと進む、その決意をしたということだな」

大層な装飾はないが、何代もに渡つて重責を担う証として受け継がれてきた銀色の指輪を手のひらにのせ、ウルゼックはその手を彼女へと差し出してきた。

「レイルに、教えられたから」

ウルゼックの真摯な眼差しを空色の双眸で受け止めつつ、ユイリスは調和の法環へと手を伸ばした。そして、左手の中指にゅつくりとはめ込んでいく。およそ三年ぶりに本来の持ち主のもとへと戻つた瞬間だつた。

「貴方に言われた通り、私は逃げていた」

あたかも何十年も前からそこにあつたかのように、見事にユイリスの指と馴染んでいるその名称通りの銀色の指輪が収められた左手を眼前にかざし、それを懐かしそうに見やりながら彼女は語り出した。

「あの戦争が終わつて、隊を解隊して旅に出たのは身も心も疲れていながら、安息を求めたかつたと、皆に残して国を去つたのは口実で、逃げ出した理由ではないわ」

ゆつくりと腕を下ろすと、やや表情を曇らせ、彼女はおもむろに

巨木へと歩み出した。

「私がフレアミスを去ったのは、平和になつたあの国にとつて私の力はあまりに強力すぎたから。私の力や影響力はあの国には不要なものだつた。それどころか、私が居るだけで方々に悪影響を及ぼしかねなかつた。私の居場所は、フレアミスにはなかつた」

淡々と語りながら巨木の根元までたどり着いたユイリスは、そのまま俯き、瞳を閉じた。

「そして、それ以上に私がフレアミスを去った理由は、私が現実から目を背けて逃げ出した理由は、私自身に備わつた力とこの先どう共生していくべきか、目指すものを失つてしまつたから」

段々と弱々しくなる声。それは、彼女が思い悩んできた胸の内を証明するかのようだつた。それでも、彼女は語ることを止めなかつた。

「この力があつたからこそ、私は私の故郷の皆が味わつた辛酸と無念を晴らすことができたし、数々の困難も乗り越えられたわ。ひいては多くの人を救うことができた。だから何も後悔はしていないわ」
言つて、ユイリスは閉じていた双眸を見開き、顔を上げた。振り返り、ウルゼックへと悲壮な光を湛えた空色の瞳を真つ直ぐ向けた。
「けれどその先は？ フレアミスを解放したその先は？ 一生、死ぬまで消えないこの力をどう使えばいい？ 私は自身の行く末に対して道標がなくなつてしまつた空虚感に心を支配されてしまった」
いささか感情的になつて心情を吐露してしまつたが、ウルゼックは何も言わずに黙つて独白を聞いてくれている。ユイリスはそんな彼に感謝しながらも、努めて冷静さを取り戻そうとした。

それでもウルゼックの真つ直ぐな視線を直視できず、彼女は視線を外し、一拍間を置いてから続けた。

「でも本当はね、私、わかつてはいたの。私が得てしまつたこの力、戦うための力が一生消えないのであれば、戦いの場でこそ活かし、人々を救済するために生きていくことこそ、生涯私に与えられた使命だということを。それをわかつていながら、私は空虚感に身をつ

やし、一度離れた戦いの世界へと再び一歩踏み出す勇気を失っていた。本当、私は逃げていたんだわ」

わかつてはいた。だが、わからうとしなかつた自身の不作為と、彼女は今、自ら口にすることを初めて正面から向き合っていた。

3年という短くも長い年月の間、現実から田を背けていた彼女を変えたのは、他ならぬ1人の少年だった。

「その、逃避している私に道を指し示してくれたのが、レイルだつた。彼の真っ直ぐな生き様、困難に打ち勝つ強さ。それは私に思い出させてくれた。そう、自分に打ち克つこと、自分に負けないということを」

伏田勝ちになっていた両の田を見開き、彼女は言い切つた。自らに言い聞かせるように。

その表情にもはや迷いはない。

かつての彼女が、今、帰ってきたのである。

「今貴様がここにあるのは、レイルのおかげといふことか。貴様はレイルの師匠なのあるう。これではどちらが師なのかわからんな」黙つて聞いていたウルゼックが口を開いたかと思えば、出てきたのは皮肉めいた言葉。

だが、それはユイリスを悪し様に思つてゐるからではない。重く沈鬱な空気を払拭するための彼なりの優しさの現われだつた。

その心遣いがよくわかつたからこそ、

「失礼ね。レイルの先生はあくまでこの私よ」とむくれても見せる。

これに、ウルゼックは破顔して応えた。彼の笑みを見たのは本当に久しぶりのことである。驚きはしたが、すぐにユイリスも微笑みを湛えた。

「そうだ。決意した貴様には、これが必要だらう」

何かを企むようにユイリスを一瞥した後、ウルゼックは巨木の根元にある洞へしゃがみこんで手を伸ばした。

中から次々に取り出したのは、両腕でようやく抱え込めそうな古

びた大きなトランクケースと、麻布で包まれた上に縄で何重にも縛られたやや縦長の板状のものだった。

それらがいつたい何か、ユイリスはすぐに気づいた。

「どこでその在り処を？」

「ハンスから聞いてな。しかし随分深く埋めたな。アデューフェの根元を掘り返すだけでも大層骨が折れたぞ」

嘆息し、首の後ろ辺りを撫で回す仕草をするウルゼック。いかに苦労したかを表現しているのだろう。

ただ、そういう仕草はあまり彼には似合わない。ユイリスはつい小さくも噴出してしまう。

彼女の反応に憮然とした表情のウルゼックではあったが、すぐにあらため、真剣な、それでいて温かみのある眼差しを彼女に向かた。「調和の法環も、こいつらも、貴様と共にあるべきものだ。いつか貴様の後継が現れる時までは、もう一度と手離すなよ

淡々とした言葉遣いの中にも彼の温かい想いがしつかりと込められている。

彼の想いに、ユイリスは深く感謝し、頷いた。

「色々とありがとう、ウル」

「礼なら戦師イスカムの御靈に報告するんだな。いつか、我らが心の故郷フレアミスのブルーフェン郷で」

それは、ユイリスの故郷にほど近い、彼女がしばらく逗留した戦師イスカムの庵がある場所だった。

同時にその場所は、今では偉大なる恩師の墓所であることをウルゼックの言葉は示していた。

彼の言う通り、いつかはブルーフェンに戻り、戦師イスカムの墓標に自身がたどった生き様を報告せねばなるまい。

だが、それはまだ先の話だ。

今為すべきことは決まっている。

旅立ちの時がやつてきた。

「そうしたらユイリス、むきになっちゃって。釣竿を放り投げたと思つたらそのまま河に入つて素手で魚獲り始めたから、おかしくつて仕方なかつたんだ」

身振り手振りを交えながら、それはもう大変だつたことを熱っぽく表現する。それを、リュルゾ亭主人のフェンソはカウンターの向こうで笑顔を湛え聞いてくれていた。

手合いから2日経ち、レイルは恒例の『お使い後の油売り』をリュルゾ亭にて敢行している最中だつた。

手合い自体の興奮はもう大分収まつたが、今彼の心を占めているのはユイリス『レンフィアの旅立ちが間近に迫つたことを直感的に悟つてしまつたことである。

ユイリスがいつも傍に居るということを日常のものとして慣れきつてしまつた彼にとって、恩師であり憧れのその人が目の前からいなくなつてしまつたことはにわかには受け入れがたいことだつた。

寂しさで胸が一杯になつてゐる今、誰かと話していなければ耐えられそうにない。かと言つて、当の本人と話すのは余計に寂寥感が高まつてしまいそうだったので、何でも話しひを聞いてくれるフェンソに相手になつてもらつてゐたのである。

もちろんフェンソにユイリスが旅立つてしまつたため寂しいから話に来たなどと恥ずかしくて言えるわけもなく、胸の内を悟られないよう逆に努めて明るく振舞つていたのだつた。

一方、珍しいことに、普段あまり店内には出てこないミスリイがレイルの隣に座り、彼の話を大して面白くもなさそうに聞いている。フェンソに話している最中、『面倒事』の2つ名をレイルが心中で贈呈している彼女が裏方から出てきた時はよほど席を立とうと思つた。ただ、それではあまりによそよそしいので椅子から浮き

かけた腰をなんとか再び下ろしたのである。

彼女がやつてきた当初は彼女のことが気になつて喋りの勢いも弱くなつてしまつたのだが、いつも騒音を無駄に撒き散らしている彼女が今日に限つては静かにしていたために再びレイルの話は力を強めていった。

ところが、ミスリイが放つた何気ない一言に、レイルの熱弁は中断することとなる。

「なんだかレイル、無理してゐみたい」

言葉を失い、彼女の方を見る。カウンターに片肘をつき手のひらに顎を乗せて相変わらずつまらなそうにしている彼女の表情は、特段何かを真剣に考えているようなものではない。

だが、彼女の指摘は的を得ていた。だからこそレイルは凍りついてしまつたのだ。

そつは言つても口を開いたまま呆けているわけにもいかないので、

彼はどうにか取り繕うと彼女の言を否定するが、

「いつものレイルらしくないもん」

と切り替えされてしまった。

彼女の態度から、心底心配して、というよりは幼馴染として長い付き合いから培つた経験上感じたことをただそのまま口にしただけということが窺える。

しかし、程度の差はあれ見透かされていることには間違いない。フェンソもミスリイも別段様子に変化はないが、当の本人は内心

凶星を突かれてかなり焦つていた。

どうにかして取り繕うべく上手い言葉を慌てて搜していると、助け舟が入つた。

いや、厳密に言えば、それは助け舟などでは毛頭ありえない。

その場の状況を破壊するだけの、招かれざる客。騒々しい足音。

「ようレイル。こんな小汚い店で会うとは奇遇だな。ああそ such うか、こここの娘とお前、いい仲なんだよな」

言つて、皮肉めいた笑い声を上げる男。

振り向くと、店の入り口に見るからに悪党とわかる帶剣した数人の男たちがあり、その中に宿敵の姿があつた。

「グエイン！」

2日前に倒した、憎むべき男の名が自然と口から放たれた。

もう一度と会うことはないと思っていた顔を再び見てしまつては、怒氣交じりになるのもいた仕方なかつた。

「何しにきた！ 約束が違うじゃないか！」

「約束？ さて何のことだか。ああでも覚えてることはあるぜ。手前だけは許しちゃ おけねえってことをな」

にわかにグエインの目が鋭くなると、彼は小声で周りの男たちに何か囁いた。

それを受け、男たちは無言で店内へと押し入り、進路の邪魔になる机と組になる椅子に腰掛けっていた客たちをなぎ倒して真っ直ぐ力ウンターへと向かつてきた。

瞬く間に悲鳴と怒声が立ち込める店内。

レイルは椅子から立ち上がると、とつせにミスリイを背後にかばい彼らの前に立ちはだかった。

子供相手に余裕をかましていたのだろう。男の1人は薄ら笑いを浮かべながら軽くつかみかかってきた。

これに対し、レイルは男との太い腕を取ると、彼の腕を自然であるべき方向とは逆に渾身の力を込めて捻り上げる。同時に、まつたく無防備になつている男の足元へ強烈な足払いを叩き込んだ。支えを失つた男の体は派手な音を立てながらあっけなく床に叩きつけられた。

一連の流れは自然と体が動いた結果である。

これもひとえにユイリスから受けた修練のおかげではあつたが、彼の今の力ではまだ程度のそれほど高くない相手、それも1人だけにしか対応できない。

今の相手は複数。しかも武装している。

それが何をもたらすか、答えは火を見るより明らかだつた。

倒したはずの男に足首を突然つかまれたレイルは、そのまま足元を救われて引き倒されてしまう。

なんとか受身を取ると後頭部だけは守ったが、一昨日の手合いで受けた傷や体力の疲弊はまだ癒えておらず、万全な受身は取れなかつた。背中から思い切り床に叩きつけられてしまい息が詰まる。追い討ちを駆けるように、いつの間にか立ち上がつた男の踵が襲いかかってきた。それは腹に突き刺さり、レイルは顔を赤くして床をのた打ち回る。

それでも相手は容赦してくれなかつた。先の男を含めた複数の男の足が次々と彼を蹴りつけた。

「ざまあねえな、レイル君。ひでえ有様だ。しかしなんだ、一つ手間がはぶけたことは礼を言つておくぜ。予定ではこここの娘を人質にお前んとこに出向いて、本命とついでにお前も誘き出す算段だつたんだが、お前はここでふん縛れるんだからな」

蹴りつけてくる足音に混じつて、店の入り口からグエインの声が聞こえてくる。

彼は手合いの結果を認めず、レイルに復讐しようとした上、人質という手を使つてユイリスを脅し彼女の力を封じようとした凶行を始めたのだ。

そのあまりに身勝手で卑怯なやり口に全身の血が沸きあがる思いに駆られる。

すると、レイルの思いを代弁するような声が上がつた。

「あんたら子供相手になんてことするんだ！ うちの店で狼藉は許さないよ！ 今すぐ出て行きなさい！」

フェンソだ。温厚篤実の模範のよくな彼が、グエインの暴挙には毅然とした怒りを露にしていた。

「うるせえぞ、おっさん」

誰かが放つた返しの一言。これに、フェンソの反論は上がらなかつた。

いや、上げられなかつたのだ。

いつの間にか男たちの蹴りが止まっていたので、仰向けになつたまま上を見ると、カウンター内へと身を乗り出している男の姿が目に入った。

と、何かが床に倒れる音。驚きのあまり凍りついていたのか、それまで何も声を発していなかつたミスリイが悲鳴を上げたのが聞こた。フェンソは殴り倒されてしまつたに違ひなかつた。

沈黙したフェンソのことを気遣う間もなく、やがてレイルは男たちに縛り上げられ、無理やり立たされる。

埃まみれ、傷だらけとなつたレイルは、そこで店内を見回すことができたが、いつの間にかそこは戦場のように酷い有様となつていた。

机は横倒しにされ、ひっくり返つた椅子が散乱し、床に倒れたり壁際で怯える客たちの姿がそこにはあつた。

隣には同じく縛り上げられたミスリイが立たされていた。抵抗したのだろう。彼女の頬には平手を受けた赤みがさしていた。さしも彼女もしゃくりあげ、涙をとめどなく流している。

店を滅茶苦茶にし、フェンソを悶絶させ、ミスリイまで捕縛したグエインらに抑えようのない怒りが湧き起こる。冷静に考えればできるはずもないが、レイルの怒りはそのことを忘れるほどで、力にまかせて縄を引きちぎろうとした。

もちろん無駄な労力だった。それどころか、倒れないよう体をつかまれたまま男の1人に一発頬に拳を入れられた。

「諦めが肝心つて奴だ、レイル君。もうお前にどうすることもできねえよ」

勝ち誇つたように嘲笑するグエイン。これほど彼のことを憎く思つたことはなかつた。

だが、今のレイルはあまりに無力だった。
何もできない彼の姿に、満足そうに狂氣じみた様子で唇の端を歪めグエインは言った。

「さて、それじゃそろそろ行こうか。我らがユイリスの元へ」

かき入れ時であるお昼時のテルミニート亭の手伝いを慌しく済ませた後、コイリスは割り当てられている自室に戻り、旅立ちへの身辺整理を始めていた。

入念に部屋を掃除し、借りていたミランの衣服を丁寧に折りたたんでまとめていく。

その最中、彼女は思い出したかのように着ている衣服を脱いだ。もちろんそれもミランの衣服だったからだが、別の衣装へ着替えるために脱いだ、という理由もある。

下着姿のまま、彼女は机の上に鎮座しているギョーム河岸で回収したあの長大なトランクケースと向かい合つた。

おもむろに蓋を開けると、目に飛び込んでくるのはあの枯れ草色の衣装。

一の腕に縫いつけられた紋章を懐かしむようにそっと指先で触れる。

ひとしきり過去の思いに浸ると、もう身につけることはないかもしないと思つていた愛着あるそれを両手で丁寧に取り出した。

枯れ草色の衣装は、ワンピースとズボンで構成された女性用ながらも活動的なものだつた。

実際に着用したのはそれほど長い期間ではないが、決して新しいものではないので総じて褪せた色合いになつてゐる。それでもトランクケースに封入する前にしっかりと洗浄したので清潔感に溢れていた。

コイリスは慣れた手つきで衣装を身につけていく。年月を経て成長したため全体的に気持ちきつくなつたように感じたが、気にするほどでもない。

トランクケースから長靴ながくつも取り出し、全ての着用を完了した彼女は、部屋の片隅に置かれた姿見の前に立つ。

3年前はまだどことなくあどけなかつた面立ちも、今やすっかり

大人の女性のものとなつて映し出されている。

だが、衣装も、二の腕に縫いつけられた紋章もなにも変わらない。

そして、その衣装を身につけた己の姿もまったく違和感はなかつた。

さすがに感慨が込み上げてきてなんとも言えない気持ちが胸の内を占める。

17年間普通の村娘として過ごしてきた自分が、血で血を洗う戦乱に身を投じ駆け抜けることになるなど、今顧みても予想だにしたことではない。

それでも、まじつことなき現実なのだ。だからこそ田を背けてはならない。

「為すべきことを為せ、か」

人生最大の恩師で今は亡き戦師イスカムが口にしていた言葉を反芻する。それは、自らの心を奮い立たせるためでもあった。

もう迷いはない。

為すべきことを為す、それだけである。

決意を新たにしたユイリス。

その彼女に、早くも試練が訪れようとしていた。

にわかに表が騒がしくなり、雑然とした音が2階の自室にまで聞こえてくる。ユイリスは机の向こうにある窓から身を乗り出して下を覗き込んだ。

彼女の双眸が大きく見開かれる。

空色の瞳に映り込んだのは、縄で縛られたレイルと栗毛の少女を先頭に、十数人の武装した男たちがテルミト亭前小さな広場に徒党を組んでやつてきたのだ。町の人や通行人らは、彼らの姿を見て怯えたり悲鳴を上げたりして次々とその進路を明け渡していく。

目を凝らすと、レイルの衣服は薄汚れ頬は腫れ上がつての状態が窺えた。隣の少女　その特徴から言って、レイルから聞いていた彼の幼馴染ミスリイに違いないだろう　も頬を赤く腫らしている。

2人は暴行を受けたのだ。

それだけでもユイリスの胸中は怒りに煮えたぎったが、徒党の中にレイルの宿敵の姿を確認して全てを理解した。

途端、彼女の面立ちから表情が一切失われる。

いつもの優しい彼女は奥底に引き込み、代わって顔を出す、氷のような冷徹なる一面。

「さすがに憲りたのか、あの見届け人の男はいないようね。だけど、あの男から彼は何も聞かなかつたのかしら。あるいは、聞く耳をもたなかつたか？」

窓から体を離すと、ユイリスはトランクケースから帶状の物を取り出し、それを腰に巻きつける。

「言って聞かない愚か者には、力をもつて分からせるしかない、か。いいわ、一度とそんな気が起きないよう、骨の髓まで『真の恐怖』というものを教えてあげる」

恐ろしいほど感情のこもっていない冷めた声で独り言つと、ユイリスはついに彼女の長い戦いを支えた戦友をトランクケースの奥底からつかみ出した。

停滞していた己が時を振り払つかのようだ。

「父さん！ 母さん！」

グエインの絶叫がテルミト亭前小広場にこだまする。

灰色の瞳に映し出された光景は、ならず者どもに殴り倒され地に組み伏されている彼の父ロイドの姿と、後ろ手に拘束されている母ミランの姿だつた。

リュルゾ亭からテルミト亭までやつてきたグエインの徒党。彼はテルミト亭前に到着するなり店に向かつて叫んだ。ユイリス出て来い、と。

騒ぎを聞いて早速駆けつけたのはユイリスではなく、レイルの両親だつた。

2人は、暴行され捕縛されたレイルとミスリイの姿を目にし激怒。十数人のならず者を前にしても臆することなく彼らに詰め寄った。元々癪癩持ちの父ロイドと、芯の強い母ミランであるため、屈強な男たちを前にしても息子と友人の娘が酷い目に合わされているのを見れば黙っているはずがない。

だが、あまりに多勢に無勢過ぎた。結果は今レイルの眼前にある光景通りである。

自分でけならまだしも、大事な友人や家族に手を出されレイルの怒りは頂点に達していた。

しかしどうすることもできない。

己の力では覆せない状況に、レイルは口惜しくて歯噛みした。
「出でこねえな、極上の美人ちゃん。俺が引きずり出してくるぜ」
徒党の1人である小太りの男がやにわに店の中へと向かった。
レイルは身じろぎをして必死に縄から脱出しようと幾度目かの挑戦を試みたが、どうやっても抜けることはできなかつた。

このままではユイリスが危ない。

一方で、同時に妙な思いも感じていた。
すなわち、彼女ならばこの状況もどうにかしてしまうのではないか、と。

これまで数々の力をまざまざと見せつけられてきた上、とどめのあの光景　屈強な男を木剣の一撃で弾き飛ばした一幕をこの目で見たのだ。

尋常ならざる彼女の『力』に自然と期待を寄せてしまつのも無理からぬことだつた。

レイルの期待。果たしてそれは夢想にしかすぎないのか。
答えは否だつた。

彼の想いは、遠からず現実のものとなる。

テルミト亭店内から鈍い音がするやいなや、物凄い勢いで何かが飛び出してきた。

それは派手に大地を転がり、店前小広場の中央にある井戸にぶつ

かつて停止する。

コイリスを連れ出すべく意氣揚々と先ほど店内に入つて行つた小太りの男だつた。地面を転がつたために砂埃で真つ白になつた彼は、口から泡を吹いて悶絶していた。

仲間がやられたことにわかに色めき立つならず者たち。各々が腰の獲物に手をかけ、すぐにも凶器を振るえるよう身構えている。

徒党はもとより、遠巻きに見守る群衆からも一切の音が失われ、静まり返る辺り。

「だ、誰だ！」

たまらず、グエインが声を上げた。

返つてきたのは、等間隔で店内から響いてくる金属が触れ合う甲高い音とゆつくりとした足音。

皆の視線が集まる音の正体はすぐに明らかとなつた。

枯れ草色の衣装　日常着るものなどではなく、明らかに戦場等で身につける戦闘服だつた　を身にまとい、その二の腕には十字章と交差した一对の長剣を護るようにして囲む一对のオリーブの枝葉を1429といつ年号とともに意匠した紋章が縫いつけられた。

腰には剣を吊り下げるための剣帯が巻かれ、左腰には白磁器のような光沢を放つ白い鞘に收められた長剣が下げられている。一見して素人のレイルですらわかる、この世に2つとないほど貴重なものに見える長剣の鍔には見事な意匠の金色の十字章が施されていた。歩く度に響いていた金属が触れ合う音は、剣帯と鞘とを結ぶ金属部品が擦れ合う音だつたのである。

姿を現した1人の武装したうら若き乙女。

各自の思惑はどうあれ、その場にいる者たちが待ちわびた人物。コイリス＝レンファイアだつた。

店外に出ると、ならず者たちは一様に驚いた眼差しをこちらへと

向けていた。

店内に押し入ってきた小太りの男を挨拶代わりに殴り飛ばしたことが効いているのだろう。さらに言えば、戦うための衣装と長剣で武装している姿も彼らを驚かせている一端を担っているに違いない。だが、彼らはすぐに好奇と好色へと目の色を変容させていた。

彼らの思惑など知ったことではない。徒党の中にいるレイルの宿敵 グエインの姿を見つけると、ユイリスは鋭い眼差しで彼を睨みつけた。

「これはいつたい何の騒ぎ？ そもそも一度とレイルとその縁者の前に姿を現さないと約束した貴方が、どうして彼らの前にいて、あまつさえ彼らに暴行を加え拘束しているのかしら？」

一言も言い濁ることなく、感情を一切表に出さず淡々と問い合わせる。

その冷たい迫力を以前味わったことがあるからだろう。グエインは表情を引きつらせていた。

が、自身の弱みを包み隠すように、彼は大きな声を張り上げた。
「約束？ ろめでたい奴だな。約束なんてものはな、破られるためにあるんだよ。それに、この状況をよく考えてからもの言えよ。多少腕が立つからってな、この人数相手に何ができる。何より、こっちには人質がいるんだ。こいつらのことがそんなに大事なら、何をしなきゃなんねえか、わかつてるよな、ユイリスちゃんよ」

多勢を武器に虚勢を張っているのが見え見えではあるが、彼に「敗北」という文字を想像することなど今の状況ではできないのだろう。圧倒的な力を背景に、彼は勝ち誇っていた。

徒党の連中はどう見てもグエインよりは遙かに手練に見える。大方、口八丁手八丁上手い話でもしてつてのならず者を巻き込んだのである。

いざれにせよ、レイルとレイルの大切な人間たちを害した輩どもだ。1人として許すわけにはいかない。

ユイリスは徒党のならず者たちを見回しつつ睨みつけ、言った。

「わかっているわ。皆を助け出して、お前たちを叩き伏せなければならぬということを」

グエインの脅しに一切屈しないユイリスに、彼らは一斉に獲物を抜き放つことで応えていた。

これに、ユイリスも動いた。

否、動いた、などという言葉で片付けられるものではなかつた。その場に居た者で彼女の動きを目で捉えられた者はただの1人もいなかつた。

まさに目にも留まらぬ『神速』で飛び出したユイリスは、あまりの速力に反応できない男たちの間を抜け、レイルとミスリイを捕縛している小柄な男の顔面に向けて殴りつけるように手のひらを叩きつけ、倒したのだ。

小さいとはいえ大の男を一撃で昏倒させると、彼女はなんと手の力だけで2人を縛つた縄を日々と引きちぎつた。

突然の展開に状況を理解できていないのだろう。レイルたちは当初呆然としていた。

彼らを安心させるべく、ユイリスは鋼のようく硬く冷徹に凍りついた表情を解き、微笑みかけた

「2人とももう大丈夫よ。激しく痛んだり、熱を持っている怪我つてある？」

努めて優しい声をかけると、レイルはようやく我を取り戻したようで問題ない旨を主張するかのように首を横に振つていた。隣のミスリイはまだ呆けていたが、見た感じでは重い傷を負つてはいない。

「レイル、彼女をお願いね。後は私に任せて」

2人を背後に隠し、ユイリスはならず者たちへと正対する。再び、氷の仮面を面立ちに貼りつけて。

徒党の数はグエインを含め12名。内、1人は店内から殴り飛ばし、もう1人はたつた今昏倒させていざれも戦闘力を奪つている。

残り10名。

レイルとユイリスを守りつつ、さらにロイドとミランを救出しな

ければならないという制約はあるが、問題になるほどではない。

ユイリスはゆっくりと左腰の長剣の柄に手をかけた。

「誰

静かに発したその言葉が向かう先は、グエインたちではない。背後に気配を感じたための言葉だった。敵意は感じられず、だからこそ彼女はならず者たちを見据えたまま問つたのである。

「助け船に来た人間に對して、一言発するだけなのか？」

抑揚のあまりない低い男の声。生来的に言葉に棘を埋め込む天才の声だった。

「2人のことは任せとけ。お前の腕が曇つていなか、督戦させてもらうぞ」

時には相手の心情を無視した厳しい言葉を投げかける彼ではあるが、今は誰よりも頼もしく信頼に足る存在だった。

彼に、ウルゼックに2人を任せておけば何の心配もいらない。剣聖に迫る剣技を誇る、元鷹剣士結社筆頭剣士ウルゼック＝ライン口一グその人が力を貸してくれるのだから。

「ありがとう、ウル」

振り返らぬまま礼を言つと、ユイリスは3年の年月を経て、金十字章の鍔を持った長剣『聖剣エル』をゆっくりと抜剣した。

微細な刃こぼれはあるが、一点の曇りもない鋭い刃が昼下がりの陽光に照らされ、輝く。

一方、まだ数の上では圧倒的に有利なグエインたちは、各々が手にした武器をちらつかせつつ攻撃の機会を窺つていた。

最初はユイリスをたかが女と思つていたからか明らかに油断している彼らだが、さすがに2人の仲間を倒されて目の色は変わつていた。グエインなどの素人に毛が生えた程度ではない、実戦を潜り抜けてきた者たちの目だった。

だが、彼らは生涯後悔することになるだろう。

自分たちが一体誰を敵に回し、誰を怒らせてしまったかということを。

砂埃を巻き上げてユイリスが駆けた。

ミラン田がけて走る最中、進路の障害となつた頬に傷のある男の間合いを侵略。

獲物の長剣を反射的に振り上げていた男の懷に侵入すると、最小限の弧を描いてエルを振り切り、男の手首を切り裂く。急所はわざと外しているため深手ではないが、鮮血が飛び散り、彼はたまらず長剣を取り落とす。

ユイリスはそれでも許さない。痛みに上体を屈めた彼の顎先にエルの柄頭を思い切り叩き込んだ。顎を破壊された男は、仰け反るようにして倒れて沈黙した。

障害を排除したかに見えた彼女だが、気を緩めない。仲間の血飛沫を目にして逆上した男たちの一部が同時に襲いかかってきたのだ。細剣による突きを放ってきた角刈りの男の攻撃を紙一重でかわしそこへエルを打ち下ろした。一振りで細剣を両断すると、後ろから斬りつけて来ていた気配に対し反転し、エルを切り返して今まで振り下ろされようとしていた背後からの長剣を弾き飛ばす。

卑怯にも背中から攻撃しようとしていた狐目の男は獲物を失い驚愕の色に表情を染めたが、何の免罪符にもならない。長靴を振り上げ、ユイリスは狐目の腹に強烈な蹴りを突き刺した。吹き飛ばされた男は崖から転がり落ちる岩石のように大地に弾かれながら大地を転がり、動かなくなつた。

続けて、細剣を折られた角刈りの男だ。彼は使えなくなつた獲物を潔く放り捨てる、後ろ腰から補助武装の小剣を抜き放ち、幻惑させるかのごとく刃を振り回していた。

冷静にその切先を見極めると、強烈なエルの一撃を見舞わせる。切先に対し、エルの切先を叩きつけると、小剣の切先が硝子のよに砕け散つた。

驚き焦る男を無視し彼の間合いを躊躇したユイリスは、そのまま肩口から浅目に斬り込んだ。角刈りは金属となめし皮を合わせたような防具を着込んでいたが、エルの前にはまったく意味をなさなか

つた。紙に刃を入れるかのように、エルの刃先は容易く金属となめし皮を切り裂き、彼の体を傷つけた。致命傷までは与えていないが、やはり派手に鮮血を撒き散らし角刈りはあまりの激痛にその場をのたうち回る。

気勢に乗つて攻撃を仕掛けっこようとしていた顎鬚の男には、エルの切先で威嚇し腰を引かせ、ミランへ向かうことを優先させた。彼女を捕縛していたのは大槌を持った大男。

大男は向かってきたユイリスに対するため、ミランを横に突き飛ばして大槌を振り上げた。

これに、ユイリスは一步も引かず真正面から受け立つた。

振り下ろされた大槌。大男の表情は明らかに勝ち誇っていた。

鈍い音はした。

ただ、それだけだつた。

何が起きたかは、一転して信じられない物を見たという大男の表情が雄弁に物語つていた。

大槌はユイリスの真上に正確に振り下ろされていた。

にもかかわらず、彼女は2つの脚でいまだ大地を踏みしめている。大槌は、振り上げたエルの剣腹によつて受け止められていたのだ。通常、剣というものは刃方向よりも剣腹方向に受ける衝撃に対して非常に脆弱だった。剣腹に衝撃を与えられれば、下手をすれば折られてしまうことすらある。

その、剣の弱点とも言える剣腹で大槌の打撃を受け止めることができる長剣など、常識で考えれば皆無に近い。

聖剣エルはそれを事も無げに実現してしまつ、地上最強の剣たる一振りだつた。

さらに、彼女は片手でそのエルを頭上に掲げ、腕一本で大槌の打撃を支えたのである。

岩をも砕きかねない巨漢の一撃を、女性の、それも剣を振るうことにすら奇跡に思える細腕一本で凌いだのだ。

常識といつもの根底から覆しえかねない光景に、大男は表情を

激しく引きつらせた。

その彼に、ユイリスはどごめをさした。

「それで？」

涼しい顔をして言つてのけた彼女の言葉に、大男の一撃など露ほども効いていない旨が込められていた。

動搖して二の手を打てない大男に対しても、ユイリスは容赦しなかつた。大男の腕力と大槌の重量が載つたエルを軽々と振るつて大槌を打ち払うと、切り返しで大男の太もも辺りを軽く凧ぐ。激痛に腰が落ちた大男の側頭に対し、ユイリスはエルの剣腹を叩きつけた。

恐らく目から星が飛び出たに違いない大男は、そのまま白目を剥いて前のめりに倒れた。

「ミランさん、こっち！」

大男を排除したユイリスは、目の前で繰り広げらている驚くべきでき」とに目を白黒させているミランの手を取り、そのまま走つた。間一髪、大男に代わつてミランを再び捉えようとしていた鼠顔の手から彼女を救い出すと、次の目標、捕らわれのロイドへと駆ける。ロイドは丸刈りの筋肉男にうつ伏せに組み敷かれていた。

丸刈りは一直線に自身に向かつてくるユイリスに気づき、慌てて立ち上がると腰の長剣を抜こうと手をかけた。

が、抜けない。抜剣することができないのだ。

簡単である。丸刈りが剣を抜く間もなく彼我の間合いを詰めたユイリスは、誘つてきたミランの手を安全のため一端離すと、鋭いエルの突きを放つたのだ。

鎌よりも尖鋭なるエルの切先は、なんと丸刈りの長剣の柄頭に突き刺さつた。つまり、エルによつて柄頭を押さえられてしまつたため、抜剣できなくなつてしまつたのである。

「残念だつたわね」

毛先ほども同情などしていないにもかかわらず、決して目は笑わずに微笑みながら憐憫の言葉を手向けるユイリス。

次の瞬間、彼女の腕が翻り、なんと長剣の柄をつかんだ男の手と
鎧との間を縫つてエルの刃を叩きつけ、柄と剣身を綺麗に分断して
しまったのだ。

もはや剣を完全に抜くことができなくなつた丸刈りは、見かけに
よらず情けない悲鳴を上げ、背中を向けて逃げ出した。

しかし、丸刈りにとつてさらに運の悪いことに、逃げた先にはあ
のウルゼックの姿が。

後のことばは彼に任せ、ユイリスは直ちに攻撃を受けても対処でき
るよう周囲を警戒しながらロイドの傍にしゃがみ込んだ。

「ロイドさん、大丈夫ですか？」

声をかけると、弱々しいながら彼は頷いた。殴打されたためか口
から血を流していくが、口腔内を切つたためのようで内臓を損傷し
たからではなさそうだった。

「それにしても、ユイリスよ。お前さんはいつたい」

「細かい話は後で。お2人とも今は安全なところ、レイルたちを保
護しているあの男の庇護に入つて下さい。信頼できる、凄腕の男で
す」

顎をしゃくつてウルゼックの方を示す。丁度、あの丸刈りの男を
鞘つきの長剣で打ち倒していた彼の姿が目に飛び込んでくる。

「ほらね。ですから急いで」

ミランの手を借りて起き上がつたロイドは再び頷き、氣をつけて
な、とユイリスに声をかけると妻とともにウルゼックの元へと向か
つて行つた。

これで全員を救出した。後顧の憂いなく、残りのならず者どもを
叩きのめせる。

当初の予定からは大幅に状況が変わつてしまつたからだろう。彼
らの表情には戸惑いと焦りの色が一様にありありと浮かんでいる。

それでも許さない。

彼らに絶対的な『恐怖』を植えつけるまでは。

ユイリスならばこの状況もなんとかしてくれるかもしれない。レイルが感じていた直感のよつなものは、まだ半ばほどではあるが実現していた。

抜剣した彼女は、4人の手練の男たちを瞬く間にうちに大地に沈めたのである。

その剣術は見ていて背筋が凍りつくほど恐ろしく洗練されたものだった。

まだ見習い剣士程度のレイルでも分かる。

神業のような体捌きと、圧倒的な神速に加え想像を絶する破壊力を伴った攻撃はもはや人間技ではなく、絶対的に数的不利な状態であっても微塵も揺らぐことはなかつた。

さらに彼女は、極力敵に同時に攻撃させず、万が一同時に襲われても対処できるよう常に敵全体に気を配つて戦闘を組み立てていた。一対多数で戦う際のお手本のような戦いを行つていたのである。とどめは彼女のあの長剣だ。信じられないほどの切れ味を見せつけているだけでも驚きなのだが、あれだけ酷使した使い方をしているにもかかわらず、いまだ歯ごぼれ一つ起こした様子がないのはもはや常軌を逸しているとしか言えない。

これが本当のユイリスの力。その片鱗を既に垣間見ていたとはいえ、レイルはその凄まじさに驚嘆を禁じえなかつた。

全力を出し尽くしているわけではないだろう。彼女の真の実力はもつと遙か高みで発揮されるに違いない。

ただ、それでも彼女自身真剣を打ち振るう実戦を行つているのだ。その力を存分に活かしていることもまた、間違ひのないことだつた。あまりにも鮮烈で衝撃的なユイリスの力に、レイルは引き込まれるように見入つていた。

だからこそ、彼女の攻撃から逃げ出した丸刈りの男がこちらに向

かつてきた際、反応が遅れてしまったのもいた仕方のないことだった。

男は逃げ出してはいるが、敵には違いない。回避しようにも対応が遅れてしまつたため間に合わず、武器もない。そもそも、暴行を受けた傷のせいで体を自由に動かせないのだ。

レイルの背筋に戦慄が走つた。

その時、前に出る黒い影。

ウルゼックだつた。

黒いマントを翻し、腰から鞘ごと剣を抜き放つた彼は、混乱状態に陥り盲目的にこちらへ一直線に向かつてきた丸刈りを一撃で叩き伏せた。

肩口に重い打撃を受けて膝を着いた男は、鼻と口から血を流しながら苦悶に呻いた。

「あいつは、あの紋章は、まさか、まさか」

激痛によるものだけでなく、明らかに恐怖にからくる要因で体を小刻みに震わせている丸刈り。

ウルゼックは彼の鼻先に鞘先を突きつけ、詰問した。

「貴様、知つているのか」

「お、俺はフレアミス戦争で帝国兵士として戦つていたんだ。わ、忘れもしねえよ、あの、あの紋章」

「そうか、貴様らにしてみれば『恐怖と死の紋章』だものな。見間違ひじゃないぞ。彼女が着けるあの紋章　いや、『隊章』は、かつてフレアミス戦争で多大な功績を残した、エウロニア史上最強の剣士集団『ハーキュリー隊』のものだよ」

丸刈りから目を離し、彼はいまだ剣を打ち振るつてゐる乙女に目を向けてた。

「そして、彼のハーキュリー隊隊長にして、フレアミス戦争を終結に導いた『フレアミスの聖女』と謳われる人物は、同時に前剣聖『イスカム』スカラ』から剣聖号とその称号の印である『調和の法環』を受け継いだ現剣聖だ。彼女が振るう長剣『聖剣エル』には、

金十字の紋章を抱いた鍔が設えてある」

ウルゼックが言わんとしていることに気づいたならず者は、田と口を丸く開いて驚愕の有様を表現すると、肩口を打たれた激痛など吹き飛ばしてしまったかの勢いで情けない悲鳴を上げながら再び逃げだそうとした。

「待て、丸刈り。貴様の相手はこの俺だ」

目にも留まらぬ早業で抜剣したウルゼックは、丸刈りの鼻先に長剣の切先を突きつけていた。これに丸刈りはどうすることもできず、あらゆる戦意を失つたようで腰を抜かしてへたり込んでしまつていった。

「いい態度だ。フレアミスの聖女だけではなく、この俺まで敵に回してしまつては命が幾つあつても足りんからな」

大業なことを言つて、満足そうに頷いているウルゼック。そこらの人間が口にするのであれば法螺か虚勢にしかならないが、彼が言うとこれ以上ない事実にしか思えない。

彼の見た目は見かけ倒しなどではなく、雷光のような抜剣の鋭さや、隙のない構えを見れば、凄まじい手練だということはレイルでもわかる。

ウルゼックの力に感嘆するが、それ以上に驚くべきは華麗に長剣を打ち振るつている師匠のことだ。

今ウルゼックが語つたことに触発され、以前のリュルゾ亭で彼が語つたことも思い出し、頭の中が混乱しそうになる。

ただ一つ言えることは、『歴史上の人物』を目の前にしてみると、いうことだ。

生涯忘ることのできないであろう光景を片時も逃さぬべく、レイルは田を見開き歴史的な戦いを見守るのだった。

残るならず者は5人。

高慢な悪党どもでもさすがに彼我の力の差を認めざるを得なくな

つたのか、各個に攻撃することは止めたようだつた。ユイリスを囲むように散らばると、その輪を少しづつ狭めようと動き出した。

小賢しい知恵を働かせようとしたのだろうが、まさに浅薄。

最大で50人を超える敵と1人で対峙したこともある彼女にとつて、この程度の包囲はざるにすらならない。

己がいかに矮小な存在であるか。そのことを体で教え込ませるべく、彼女は行動を開始した。

多数の敵を圧倒するには、まず先制するのが第一である。守勢に回れば数的有利を武器に押し込まれてしまつ。

第一には、いかに早い段階で敵集団の指揮官を倒すかだ。多数の敵というのは統率され組織的な攻撃力を展開できてこそ最大の威力を發揮する。逆に言えば、集団を統制する指揮官を失えば、下手をするといかに数的戦力があつても単なる鳥合の衆に成り果てかねない弱点を孕んでいた。これを回避するため、優れた集団は指揮官が倒れても次席の指揮官が予め決められ、どんな状況にも対応できるようになつてゐる。

とはいへ、今回の場合は数的優位といつて、だけしか彼らには有利な面はなく、元から鳥合の衆であるため、指揮官云々は考えずともよい。

だとすれば、ただ1つ。機先を制することである。

先に切先で威嚇してやつた顎鬚に狙いを定め、神速を飛ばした。自身に向かってきた彼女の姿を見、顎鬚は慌てて剣を繰り出してくるが無駄な抵抗だった。

1対1で彼女に勝てる可能性を持った人間は2人いたが、1人は彼女が3年前に命がけで辛くも打ち倒し、もう1人は彼女の恩師で病没した前剣聖イスカムである。つまり、この地上で現在、1対1で彼女に勝てる人間は存在していない。

怯えながらも打ち下ろしてきた顎鬚の長剣の軌跡を易々と見切り、最小限の回避だけでかわす。

彼の間合いを制したユイリスは、下方からエルを斬り上げた。

それは顎鬚の長剣を下段から届き、エルの刃はその剣身を切斷。折られたのではなく『切り裂かれた』顎鬚の長剣の刀身は、回転しながら明後日の方向へと飛んでいく。

信じられない光景に、恐怖を顔一面に貼りつける顎鬚。だが、ユイリスの攻撃はそれで終わつたわけではなかつた。

殺傷を目的とせずにエルを打ち振るうには間合いが接近しすぎている。ユイリスはエルを使えない代わりに、近間の間合いを逆利用した。斬り込むことで体に乗つた速力を、そのまま突き出した膝に乗せ、腹部へと叩き込んだのである。

たまらず嘔吐し、腹を押さえて前のめりになる彼を、ユイリスはまだ容赦しなかつた。がら空きの後頭部へエルの柄頭を叩きつけたのである。こうなるともはや立つてことなどできず、顎鬚は夢の世界へと旅立つ他なかつた。

「矢だ！ 矢を射れ！」

突然泡食つた絶叫が上がる。声からしてグエインなのだろうが、今注意せねばならないのは今の声を受けた相手の方だ。

ならず者の中には弓矢を持つた男がいる。彼らの姿を見た時から常に注意を払つており、何度か狙撃されそうになつたが、彼女の神速が実射はおろか射撃する機会すらつかませなかつたのである。

浅薄ながらも攻撃の機会を窺つていたのだろう。何度目かにしてようやく一瞬だけつかんだ機会 誰かを攻撃している最中という、他に対応し辛い状態 を、グエインは形振りかまわざ利用したに違ひなかつた。

実際、グエインの声を受けて矢は発射された。そこいらの「じりつき」にしては腕がよく、狙い違わず一直線にユイリスに迫る。

接近戦で勝ち目のない相手に対しても弓矢を使う考え方は、1つのやり方としては間違つていない。

ただ、グエインは1つ大きな要素を加えていなかつた。狙つた相手がいつたい誰なのか、ということを。

即座に反応したユイリスは、自身の頭目がけて飛来した矢に対し

てエルを一閃。この近距離から発射されたそれをなんと叩き落とした。

泡食つた弓矢の男は、怯えながら矢筒から矢を取り出し、闇雲に2発、3発と射撃する。

これに対し、ユイリスは大してエルを構えもせず、ほとんど腕の振りだけで2発目も3発目も労せず迎撃していく。しかも、弓矢の方へとゆっくり歩み寄りながら。

4発目を男が矢をつがえようとした時には、もはや弓矢の聞合いではなかつた。

「もう終わり?」

感情のまつたくこもつていらないユイリスの声は、弓矢の男に心底からの恐怖を生み出したのだろう。彼は体を竦ませ、矢をつがえようとしたまま固まつてしまつていた。

その彼の目先にエルを突きつける。よほど恐ろしかつたのだろう。それだけで、男は黒目を反転させ、さらに失禁して腰を抜かした。「覚えておくといいわ。私が最低10人以上の敵と同時に戦つている中、気配を殺し近距離の物陰からよほどの匠が作り上げた初速の高い弓で私を狙える。そんな状況でもない限り、私に弓矢は通用しないということを」

意識を失つているためもはや彼の耳には届いていないが、ユイリスは手向けの言葉のように残すと、既に3名まで減少した徒党の残存を見やる。

完成しても包囲網どころかざる以下にしか過ぎず、しかもどうに失敗した彼らの戦術は最後の足掻きを迎へようとしていた。

お飾りにすぎないグエインを除いた2人 鼠顔の男と大きく肥えた男の2人は、示し合わせた初めての有機的な連携を見せようとしているようで、目配せをして頷きあつていてる。

何を企んでいるかはわからないが、彼らが通つてきた道よりも遥かに険しい茨の道を潜り抜けてきた自負が不安を感じさせない。

警戒しつつ、今度は彼らの出方を待つた。

動いたのは鼠顔だつた。小さな体躯を活かし、狙いを定めさせない目的か俊敏に移動しながら徐々に接近していく。

最中、鼠顔は何か光る物を放つた。

それは一直線にユイリスへと向かってきた。

彼女は反射的にエルで庇い払う。

しかし、そこで彼女はその行動が今回初めての適切ではない対応であることに気づいた。

時既に遅し。

エルの刃が庇いだのは、投げナイフとその柄に括りつけられた小さな袋。袋は庇がれた衝撃で破れ、中から白い粉が開放されたのである。

投擲されたナイフの勢いがついていたのだ。白い粉はそのまま大きく広がるように展開してユイリスに襲いかかった。

相手は粉である。エルでは防ぎきれない。

ユイリスは咄嗟に両腕を掲げつつ、視界を奪われるのを防ぐために目を閉じた。

なるほど、彼らの目的はこちらの視力を奪い、もって立場の逆転を狙つたのだろう。

卑怯ではあるが、命を奪い合つ実戦で使う手としては上策ではある。

しかし、やはり浅薄だった。

本能的に反応して策にはまつたとはいえ、彼女はもつと汚い手を何十回と仕掛けられてきた人物である。これで終わるわけがなかつた。

なんと、ユイリスは目を閉じたまま反転し、初めて両の手でエルを構えると反転で生まれた力を利用し、エルを横庇ぎに振り切つたのである。

激しい衝撃を両の手に受けながらもエルを決して離さない。

乾いた2つの音が背後からしたのを背に受けながら、彼女はまるで全てが見えているかのように駆け出した。

もちろん、目蓋を下ろした彼女の視力はいまだ皆無だ。

だが、彼女には見えていた。正確に言えば、彼女は感じていたのである。その場にいる全ての者の『気配』を。

視界を潰されて戦闘を継続できなくなるのは普通に考えれば当たり前のことだ。

しかし、彼女は全ての剣士の頂点に立つ『剣聖』なのである。視界を失つても相手の気配を察知し戦闘を組み立てるなど造作もない。それは、剣の道を究めた者だけが到達できる『心眼』の境地だった。

心の中で警鐘が鳴る。危険な気配が3つ、同時に飛来していた。即座に反応し、コイリスは鞭を振るうかのように腕をしならせてエルを操る。

甲高い音がほとんど同時に3つしたかと思うと、危険な気配は消え去った。

であれば、狙うは駆け出した先にある、小刻みに走り逃げようとしている小さな気配。

コイリスの神速から、逃れられるわけがなかつた。手を伸ばし、掴みかかる。確かな感触を得ると、彼女は掴んだ物を思い切り横に引き倒した。

『鼠を潰したような』悲鳴がすると同時に、大地を転がり回る物の音が耳に響いた。

そこで初めて、彼女は目蓋を開いた。

鼠顔が放つた白い粉は彼女の双眸を害してはいなかつたのである。咄嗟にかざした両腕と、すぐに目蓋を閉じた行動が彼女の空色の瞳を守つたのである。

ただ、あの手の粉末は一時的に空中に滞留するため、効果が及ぶ範囲外へ到達するまで彼女はあえて目を閉じて戦つていたのだった。それは、彼女が様々な体験を重ねることで培つた経験の賜物である。『心眼』により大体のことは把握しているが、視界が戻つた今、あらためて確認してみると感じた通りの現実がそこにはあつた。

白い粉を受けてから最初に対処したのは、後ろから巨大な何かが迫つたからだ。

それは両手で抱えなければ持ち上げられないほどの石だった。

鼠顔が彼女の目を潰し、そこに大きく肥えた男が道端から拾ってきた石を投げつけるという連携だったのだろう。

並みの人間であればそこで終わりだろうが、ユイリスはその策を見事に噛み破った。

襲いかかってきた石を、反転した余勢を最大限活用してエルにて両断。粉碎ではなく綺麗に切断された石は、1つから2つの塊となつた。

直後に響いた乾いた音と、離れて転がっている2つの石がいい証拠である。

次に訪れた危険は、3つの気配。それは泡食った鼠顔が苦し紛れに放つた投げナイフである。いずれも迎撃されて大地に転がついた。

最後に捉えた気配は、鼠顔そのもの。逃げる彼の襟首を掴み、投げ飛ばしたのである。

結果、彼女の恐ろしいほどの力に投げられた彼は派手に大地を転がり、今は静かになつていた。

彼らの最後のあがきはこれで完全に失敗した。

今や残るのは大きく肥えた男とグエインのみ。他のならず者は全てが沈黙するかあるいは戦意を喪失している。

テルミト亭前的小広場にはあたかも戦場の跡のような光景が広がつていた。

「さて。グエイン以外で残つたのはそこの彼だけど、どうする、まだ続ける？ 私は別にかまわないけど」

上体にかかっていた白い粉を軽く叩き落としながら、ユイリスは大きく肥えた男を見やる。

まさかこのような結果になるとは思つていなかつたのだろう。予備の石を抱えていた彼は、そのまま呆然と棒立ちになつていた。

が、声をかけられたことに気づいた彼は、慌てて石を放り投げ、さらに腰から下げた長剣や懷に隠し持ったナイフまでも次々と投げ捨てひざまずくと、両手を挙げて降伏の意を露にしつつ激しく首を横に振っていた。

であれば、残るはただ1人。

コイリスは彼の方へと向き直ると、ゆっくりと歩き出す。

「や、やめる。く、来るな」

万全と思われた策を見事に粉砕され、仲間を全て撃破されたグエイン。彼は今にも泣き出しそうな顔をしながら後退ろうとしていた。だが、恐怖が体の自由を奪っているのだろう。実質的にはほとんど後退つてはおらず、拳句、脚をもつれさせて尻餅をついてしまう。その彼に対し激しい怒りを浮かべるわけでも、かといって嘲笑を投げかけるわけでもなく、ただただ冷め切った表情のまま近づいていくコイリス。

何本もの剣を切断し、果ては刃までも両断したにもかかわらず、刃こぼれ1つない抜き身の聖剣エルを無造作にぶら下げながら無表情で歩み寄つていいくのである。彼の心情を考えると、今すぐにも現実から逃避したいことだろう。

残念ながら逃げ出すことはできない。彼は彼が起こした罪に対する罰を負わねばならないのだから。

もはや恐ろしさで何も言葉を発することができなくなつたのか、口元を戦慄かせているだけのグエインの傍までやつてきたコイリスは、彼を見下ろした。

「お仲間はもういない。後は貴方と私だけ。1対1で決闘するのもよし、でなければ 2つに1つ。ただし、私に向かつてくるのならば全ての禍根を断つためにももう手加減はしない。命を捨てる覚悟で剣を握ることね」

押し殺した声でそう告げると、言葉を発することのできない彼は陸に打ち上げられた魚のように口を何度も開閉していたが、無意識的に握り締めていた長剣をやがて慌てて放り捨て、逆らう意思はない

い旨を表明していた。

決闘ではない選択をした彼ではあるが、そこでユイリスの追及が終わるかと言えばそれはまた別の話である。

必死に無抵抗な様を表しているグエインの素振りを無視するかのように、ユイリスは身を屈めると、彼の胸倉を掴んでそのまま激しく押し倒した。

男のくせに情けない悲鳴を上げた彼の哀願など無視し、彼女は逆手に持ち替えたエルを翻すとそのまま首筋に向かつて鋭い突きを放つた。

一瞬、誰もが彼のことを刺し殺したと思ったことだろう。

聖剣エルはグエインの喉元を刺し貫いて

いなかつた。

首筋をかすめたエルは、彼の襟元を貫通し、服を大地に縫いつけただけだつた。

だが、その刃はわずかに彼の首の皮一枚を切り裂き、血が滴り出している。

長剣の衝撃と首筋の痛みに、グエインはこれまでで最も顔を引きつらせ、心底から恐怖を感じていて有様を露呈していた。

ユイリスは彼に対し、ありつたけの声を振り絞り、サイレアに来てから口にしたことのない激しい口調で言い放つ。

「いいかグエイン！ これは最後の警告だ！ 今度レイルやレイルの縁者の前に姿を現し彼らを害したら、生きたまま少しづつ肉片に解体し、魚の餌にしてやる！」

半分は脅しではあるが、もう半分は本気で怒り狂っていたからこそ出た言葉だつた。彼がこの警告をも反故にするようなことがあれば、次は本当に容赦するつもりはない。

その彼女の凄まじい気迫と殺氣を全身で感じたからか、グエインは焦点が定まらなくなつた双眸を宙に向けたまま全身を小刻みに震わせている。いつの間にか彼の股間に濡れた染みができ、やがて地面にもその染みを広げていた。

後にも先にも、彼がこれほどの恐ろしさを感じることはないだろ

う。だからこそ、彼の心には一生焼けつぐに違いない。今日という日に受けた、本当の恐怖を。

生涯ユイリスの影に怯え続けなければならないはある意味哀れではあるが、それは身から出た鎧、自ら積み上げた悪業の為せることである。自分で自分の首を絞めた愚か者に同情する言われはない。「人生をまつとうしたいのならば、己の身の程を知つて慎ましく生きていくことね」

立ち上がったユイリスはエルを引き抜くと、一軒静かな口調に戻り、最後にそう残した。

これで全てが終わった。

激しい戦いを潜り抜けたにもかかわらず輝きを一切落としていない聖剣エルを白き鞘の内へと納め、踵を返した。

ほんの少しの静寂の後、それまで息を凝らしてことの趨勢を見守つていた群衆から大きな喝采と、鳴り響く拍手が巻き起こる。

大歓声の中、ユイリスは悠然と歩を進めた。
守り通した、彼女の大切な人々のもとに。

ユイリスの筆舌し難いほどの壮絶な戦いぶりを見守つている最中、レイルは自分がいつの間にかに拳を強く握り締めていたことに気づいた。

それでも不安や焦りはまるでなかつた。

それはそうだ。彼の師匠はエウロニア最強の剣士たる称号を持つ人物だつたのだから。

その肩書きを体現するかのように、圧倒的な力でグエインらを徹底的にねじ伏せたユイリス。首謀者たるグエインはさすがに少し可哀相になるほど彼女に精神的に痛めつけられていたが、そうなつたのは自ら種を蒔いたからである。

散々卑怯な手を使われたものの、気持ち的にやるせない思いは既にない。鬱屈した思いは、もう十分にユイリスが晴らしてくれたの

だから。

にわかに歓声が上がった。

骨の髓までグエインを懲らしめたユイリスが立ち上がり、踵を返してこちらへ戻ってきたからである。

ロイドやミランはもちろん、ミスリイ、果ては遠巻きに息を呑んでことの次第を見守っていた群衆からも上がった大歓声は、テルミト亭前的小広場全体に広がっていた。

「ただいま」

屈強な男も恐れる冷徹な顔は奥底に引き込み、いつもの温和な面立ちが戻った彼女は、少し茶目っ氣を効かせたのかレイルに向かってそう言って微笑みかけた。

颯爽と戻つて来た師匠に目を奪われていたレイルは、よもやまつさきに自分へ声がかけられるとは思わなかつたために泡食つた。

「お、おかえりなさい」

ぎこちない返しをするのが精一杯。

「怪我の具合は？」

「だ、大丈夫だ、です」

慌ててしまつたのもあるが、ぎこちなさは立て続けに妙に丁寧な言葉遣いを呼び起こしてしまつ。一番の理由は、やはり今日の前にしている相手が伝説的な人物であるからに他ならなかつた。

すると、彼の師匠はほんの少しの間だが、悲しく、寂しそうな顔を覗かせたのだ。

なぜ、と思ったのもつかの間、すぐに何事もなかつたかのように、彼女はいつもの咲き誇った花々のような笑顔を見せていた。

「よかつた。でもちゃんと手当をしなければ駄目よ、ロイドさんと一緒に。ミランさんと、それからミスリイさん？ お2人は大丈夫ですか？」

しゃがみこんで父親を介抱していた母親と、頬を張られた以外は何もされていないために自力で立つていられたミスリイにも気を配り、声をかけるユイリス。彼女の言葉に、ミランはにこやかに頷き、

一方のミスリイは自分は大丈夫だが父親のフーンソが心配である顔を明かしていた。

「わかつたわ、誰か人をやりましょう。その前にまずロイドさんとレイルを運ばせてね」

丁寧で、あくまで優しいユイリスに、おずおずと頷くミスリイ。これに、ユイリスはありがとうと応えた。

「ウル、ロイドさんをお願い。私はレイルを連れて行くから」いつの間にか剣を納め、ユイリスのことを懐かしそうな眼差しで見つめていたウルゼックは、ああ、と短く答えて彼女の指示に素直に従っていた。

あれほど彼女のこと叱責していたことがまるで嘘のようである。本当に彼女のことを慮っていたからこそ、だといふことがあらためてよくわかった。

父親がウルゼックに丁寧に抱がれていく様子を見守つていると、レイルの小脇にも優しく腕が回された。ユイリスが腕を回して彼の体を支えたのだ。

「さ、行きましょうか。帰る　いいえ、私たちは彼らに勝利したんだから、凱旋ね。胸を張つて凱旋しましょう」

そう言ってユイリスは、伝説の人物でも英雄でも聖女でもない、初めて出会つた時のままの、清楚で気高い無垢なる美しいままの微笑みを湛えていた。

レイルは、応えた。殴られ、頬は腫れ上がつてはいたが、彼女と出会つた頃とは見違えるような精悍な表情で小さく頷いて。とめどない喝采と鳴り止まない拍手の凱旋門をくぐりながら、レイルたちはテルミト亭へと凱旋した。

彼が師匠と肩を並べてテルミト亭の門戸をくぐったのは、それが最後となつた。

うつすらと朝靄がかかっているサイレアの町。

早朝にもかかわらず、テルミト亭界隈にはいつたいどこから集まつてきたのかと思える数の人々が集まっていた。

それはひとえにコイリスのことがあったからである。

彼女がファルアリア王国の隣国フレアミスを今の連合評議国へと生まれ変わらせた『救国の聖女』であることはまたたく間にサイレア中に知れ渡り、昨日からひっきりなしに人々が押し寄せていたのだ。

国を救うという奇跡を起こした聖女の姿をその目に焼きつけ、あわよくば加護にあやかりたい者たちがほとんどで、その人の波は絶えることはなかつた。

おかげでテルミト亭はまともに営業できなくなつたが、店主たるロイドが負傷して満足に動けないのでどのみち店は閉めざるを得なかつた。

「それにしても凄い人だなあ。こんな時間から何考えてるんだろう」店に誰も入れないようにするため、昨日から交代で店の玄関を見張り、さらに今は店前に無理やり確保した空間を再び占拠されないよう見張つていたレイルは、何度目かの感嘆の声を漏らした。

「あら、フレアミス戦争後に行われた建国式典では隊長見たさにフレアミス中の人人が集まつたかと思うぐらいだったんですよ」

異論を挟んだのは、彼の隣で2頭の馬の手綱を持ち、主を待つ人物だつた。

ステラと名乗つた、まだどこかあどけなさの残る二十歳前ぐらいうの女性で、コイリスと同じ亞麻色の髪を背中に流している。髪の色の他にも藍色の瞳や背格好自体がコイリスに似ていたが、面立ちはさすがに似ておらず、コイリスほど目を見張る美人ではなかつたが可愛らしい容貌は至極魅力的ではあつた。

一見、少し品のよい年頃の娘に見える彼女だが、身近な例のユイリスがそうであつたように彼女もまただ者ではなかつた。ステラもまた、ユイリス同様な戦闘服に身を包み、その袖ではあの紋章ハーキュリー隊隊章が存在感を放つていたのだから。

無用な暴力を振るいレイルたちに怪我を負わせたことと町中で騒乱を起こした罪でグエイン一党全員がサイレアの自衛団に捕縛された後の晩、彼女はサイレアにやつてきた。ウルゼック同様ユイリスを探して、ではあつたが、ウルゼックが彼女を求めたのとは異なる理由で。

多くは語らなかつたが、ステラはほんの1月前まではハーキュリ一隊解隊後もユイリスと行動を共にしていたそうだ。

その後、ステラはもう1人の仲間と別行動を取り、ファルアリア王国と神聖ラミニコラン帝国との国境近辺で調査活動を行つていたのだが、合流予定の時期になつてもユイリスが現れないために国境に仲間を残し、1人彼女を探索に出た結果ようやくサイレアで彼女を見つけたということだった。

ステラはユイリスの下で先のフレアミス戦争を駆け抜けた元従騎士で、弓の専門家だと言つ。だからユイリスのことを隊長と呼んでいるのだろうが、血で血を洗う戦乱を潜り抜けてきたようには見えない面立ちは意外ではあるものの、ユイリスというあまりにも意外すぎる先例があるのでそれほど驚くまでもない。

もう少し時間さえあればステラのことも色々聞けたのだろうが、いかせんその余裕はなかつた。

なぜならば、この朝、ステラはユイリスとともにサイレアを旅立つからである。

レイルが直感的に感じたこと ユイリスとの別れは、やはり現実のものとなつたのだ。

そしてその現実は、いよいよもつて彼の身に迫りつつあつた。

眠い目を擦つていた群衆からにわかに歓声が上がる。

一瞬目を丸くしたものの、彼らがなぜそう反応したのか気づき、

レイルはテルミト亭の玄関口へと振り返った。

ウルゼック、ロイド、ミランを従え、店内から姿を現したのは皆が待ちかねた人物、ユイリス・レンフィアだった。

彼女の姿を見た人々は、歓声から感嘆の声へと変容をせる。ユイリスは完全にかつての姿を取り戻していたのだから。

昨日まとつていた戦闘服の上に、金色の縁取りがなされ鞘同様の白磁器のような光沢を放つ白亜の軽板金鎧を装備し、左腰には聖剣エル、そして右腰にも白鞘の小剣を下げている。

また、左手には丁度背中一杯が隠れるぐらいの大きさの、軽板金鎧同様の意匠が施された長方盾を持っていた。軽板金鎧の胸の辺りと、盾の表面には金色の十字章が燐然と輝きを放っている。

あれが、昨晩ウルゼックが教えてくれたユイリスの聖なる装備の全て。フレアミス大戦後、彼女が故郷の大地に封じてきた武具をこれからのためにとウルゼックが運んできた、かつての彼女を支えた伝説の武装だつた。

聖鎧ルクトテクター、聖小剣アリエル、聖盾ファー・マランツ。嘘か誠か天の国の金属でできているというそれらは、圧倒的な存在感を放つていた。

聖剣エルの凄まじいまでの破壊力を見せつけられた今となつては、彼女の聖なる装備全てが唯一無二の存在であることは容易に窺える。全ての装備を身につけた彼女を目にするのはレイルも初めてのため、彼も目を見開いて見入ってしまう。

勇壮なる姿のユイリスは、レイルの両親と別れの挨拶を交わし始めていた。

「それではロイドさん、ミランさん。短い間でしたが本当にお世話になりました。この恩は一生忘れません」

言つて頭を下げるユイリス。するとロイドとミランは頭を振つて応えた。

「よしてくれよ、ユイリス。俺たちはお前さんに命を救つてもらつたんだぜ？ 恩人どころか天下の聖女様に頭下げさせるなんざ末代

までの恥になつちまうよ」

「そうよ。貴女がいなかつたらどんなことになつていたか。みなを助けてくれて本当にありがとう」

今度はロイドとミランが頭を下げる番だった。ユイリスは慌てた様子で、

「止めてくださいよ、お2人とも。私は当然のことをしましたまです」と2人を制止していたが、彼女はすぐに何かひらめいたようで表情を一変させる。

「わかりました。なら、それではお互い様、貸し借りなしといふことでいいがですか?」

茶目っ氣たつぶりに微笑むユイリスに、ロイドとミランは目を丸くして顔を見合わせ、一本取られたという風に破顔していた。

レイルの両親との別れを済ませた彼女は、続けてウルゼックと対面した。

「ウルも色々ありがとうございました。本当に助かった」

「困った時はなんとやらだ、氣にするな。それに、不出来な妹弟子を持つ身としては、しつかり面倒を見んと亡き戦師に申し訳が立たんからな」

相変わらずの辛口ぶりだが、ウルゼックの表情はとても穏やかだつた。ユイリスも彼の表面的な言い回しなどまったく氣にしていない様子で、名残惜しそうな雰囲気を湛えていた。

「また、いつかどこかで」

「ああ。また、いつか」

最後に短く言葉を交わした2人。それ以上語らずともわかり合つている様が窺える。レイルは、そんな2人が羨ましく思えた。

世話になった人々との別れを済ませたユイリスは、最後に残った1人へと空色の瞳を向けた。

いつの間にかに彼女に見つめられていたレイルは我に返つて驚くが、彼女は黙つてこちらへ双眸を向けているだけだ。

と、何かを思いついたのか、その身なりにそぐわないほどの愛ら

しい微笑みを浮かべると、早足で自らの馬の元へと向かうユイリス。聖盾を馬の側面に括りつけると勢いよく身を翻らせて馬上の人となる。

レイルを見下ろし、彼女は言った。

「途中まで見送ってくれるわよね？」

悪戯っぽく笑みを浮かべた彼女の、なんとも『らしい』発言に一拍目をしばたかせたものの、彼はすぐに破顔した。

「見送るよ。そうしないと、ユイリスが寂しくて泣いちゃうから」茶目っ気には軽口で応える。そういう、これまで通りの態度で応えたレイル。

昨日、グエインたちを叩きのめした後のユイリスに、彼は一時妙にかしこまったく態度をとつてしまつた。それに対し、ユイリスは一瞬寂しそうな表情を見せた。

その場はわからなかつたレイルだが、その晩に省みて気づいたのだ。なぜユイリスが微細な変化を見せたのか、を。

これまで自然に接していた自分が急に英雄や偉人に相対したような態度を取つたからこそ、彼女は寂しそうな表情を見せた。そのことに気づいたからこそ、慌てていたからというのもあるが自らが取つてしまつた反応を改めたのである。

もし自分が同じように急によそよそしい態度を取られたらやはり寂しいに違ひない。

だから彼は、師匠がフレアミスの聖女だとしても、ユイリスはユイリスと割り切ることで普通に接する態度を取り戻したのだった。

鋭いユイリスのことだ。そのことに気づいてくれたのだろう。彼女はとても嬉しそうな大輪の笑顔を咲かせ、

「失礼ね。でも、今日はレイルを立ててそういうことにしておいてあげる」

と、うそぶいていた。

その温かいやりとりがたまらなく嬉しい。やはり彼女は、聖女であらうが剣聖であらうが、ユイリス＝レンフィアそれ以上でもそれ

以下でもないのだ。

レイルは、噴出しながらも笑顔で頷くと、彼女の後ろへと飛び乗つた。

「それではみなさん、どうぞお元氣で」

軽く会釈をして挨拶をすると、コイリスは馬を前へと進ませた。

「お前さんも達者でな」

「またサイレアに来るんだよ」

レイルの両親の手向けの言葉とウルゼックの無言の見送りを背に受けつつ、同じく騎乗し続くステラを従え、コイリスは歓声を上げる群衆の間を抜けて馬を走らせる。

レイルは、後ほんの少しだけコイリスと時間を共有できる嬉しさに喜びつつ、彼女の小さくも大きい背中を見て、あらためて自身の師匠が稀代の英雄であることを感じるのだった。

サイレアの町中を抜け、たどり着いたのはギヨーム河岸。

厳しい修練を毎日重ねた場所であり、なによりレイルが初めてコ

イリスと見えた、あの河原だった。

馬上から降りると、同じく下馬したステラがコイリスの馬の手綱も引き、気を利かせて少し離れた所にある木立の下へと離れて行つた。

「あれからもう何か月も経つた気がするけど、まだほんの半月位しか経つてないのよね。時の流れって、本当に早いわ」

修練で何度も転げ回った河べりに並んでゆつたりと腰を下ろし、雄大なギヨーム河の水面を並んで見つめていると、コイリスがしみじみと感じ入るような口調で言つた。

確かにその通りだ。何か月どころか、もう何年もコイリスと過ごしてきたかのような思いにとらわれることがある。それはこの半月、本当に毎日密度が濃く、充実していたことの証でもあった。

それも、今日で終わる。急に寂しさが込み上げてくるがなんとか

押し留めると、ユイリスがその美しい双眸を真っ直ぐと向けてきた。真剣な眼差しだった。

「ねえ、レイル。貴方はこれからどうするの？ 騎士になりたいって言っていたのは、そもそもグエインを倒すことが目的だったのよね。そのグエインはもう倒してしまったし、目的を達成してしまつたからには、もう騎士を目指す必要はなくなってしまったでしょ？」

彼女の指摘は的を得ていた。

確かに騎士になりたい すなわち、力が欲しかったというのはグエインを倒しミスリイを守るために便だった。

力を得て、グエインを完膚なきまでに倒し、ミスリイへの脅威も取り除いた今、騎士を目指すという方便は形骸化している。ではいつたいこれからどうするのか。その彼女の問いかけに、既にレイルは明確な答えを自ら導き出していた。

「俺は、ユイリスのような剣士を目指したい」

ユイリスから視線を外し、再びギョーム大河を見やりながら続ける。

「思つたんだ。グエインに1対1では勝てたけど、あいつが仲間を引き連れてやつてきたら結局ミスリイを守ることができなかつた。でも、修練を重ねて強くなつてたら、そんなことは防げるだろし、なによりもっと沢山の困っている人や酷い目に合つている人を助けられるんじやないかって」

話の間を取るために一息置き、レイルは言った。

「ユイリスみたいに、自分たちのことだけじゃなく、多くの人たちのことを考えて、多くの人を救いたい 僕に、その力があるなら」それはこれまでの自分とこれから自分の行く末を真剣に考えて出した結論だつた。

考えた時間はごく短くはあるものの、じいじばらくの時間を顧みて、さらにユイリスという人物の功績をこの目で見たことから、たどり着いた道。

決して楽な道ではないだろつ。

だが、この道を選んだことに迷いはない。

決意の炎を胸に燃やし、レイルはあらためてユイリスを見やる。

すると

「そうね。貴方には素質があるわ、強い剣士になれる。でなければ、一週間とはいへ私の修練にはついて来られなかつたらうし、なによりこの短い期間でグエインに勝てるまでにはなれなかつたわ」

「それじゃあ」

ユイリスの肯定的な物言いに、レイルは表情を輝かせる。彼女も頷いて応えていた。

「確かに、貴方にはこの地でお父様のお仕事を継いで、平和に暮らして欲しいという思いはあるわ。でも、貴方ももう大人だもの。考えに考え抜いて出した答えがそうであるなら、私が異論を挟む余地はないから。貴方の考えを尊重することが、貴方のためを思つこととに繋がる 私はそう思つてゐるわ」

「反対されると思ってたから、素直に嬉しいな」

「それはなによりだけど、このことはちゃんと両親に相談するのよ。その上で自分の意志を貫き通すならいいけど、それをせずに前へ進むのことは反対だからね」

「もちろんわ。父さん母さんとはしつかり話し合つて、わかつてもらうよ」

笑顔で話した彼の言葉を、彼女は黙つて受け止め、黙つて頷いていた。

しばしの間の後、2人は互いに指図し合つたわけでもなく、ほとんど同時に立ち上がり、向き合つた。

「最後にレイル。貴方に覚えておいて欲しいことがあるの」これまで最も真剣な眼差しを向けてきた彼女は、ゆっくりと語り始めた。

「剣は人を殺すための武器。剣術はいかにして人を殺すか、そのことだけを追及した方法。それは絶対普遍の原理原則。どこまで行つ

てもその根源的な要素は変わらないわ。私から貴方が学んだ技術の根底に息づくものは、あくまで敵を殺すためのものだということを決して忘れないで

それは、レイルが踏み出そうとしている道に必ずつきまとつ真理。当然のことながらレイルもわかつていた。

その上で、彼は自ら道を選んだのである。

彼もまた、これまで最も真摯な表情を浮かべ、わかつた、と応えた。

納得したのか、ユイリスは表情を緩めるとレイルの肩に手を置いて続ける。

「でもね、力というものはその使い方で多くの人を救えるというのもまた確かのことなの。正道を踏み外した力は単なる暴力にしか過ぎない。けれど、力を持たずに正道を歩いても、時には正しいことを為せないこともある。昨日のグエインたちとの『ざこざ』が良い一例。相手を殺すことなく、力があればねじ伏せて人を助けることができる。逆にあの時、私に力がなければ、みんなを助けることはできなかつた」

もう片方の肩にも手を載せ、真っ直ぐに空色の双眸を向けてきたユイリスは、穏やかな微笑みを浮かべていた。

「使い方で人を傷つけることも、助けることもある。力というものは両極の意味を併せ持つてているということ。それが私から貴方への、『最後の教え』よ」

最後の教え　その言葉が胸に迫る。先ほど押し留めたはずの寂しさがぶり返し、込み上げてくる。

気づかれないよう、なんとか踏みとどまる。肝に銘じておくよ、と答えるのが精一杯ではあったが。

それでもユイリスは満足したようで、両肩に置いていた手を離すと、今度は両手を腰にあてて妙にしゃちほこばつた。

「私からは以上。後はまあ、ウルゼックに託してきたから、貴方のこと」

沈みかけていたので、危うく聞き逃すところだつた。

「ウルゼック？ 託してきた？ そんな話は聞いていない。一転、

レイルは呆けた顔をしてしまう。

「そんな顔しないの。彼は私たちの隊に匹敵しうる存在である鷹剣士結社の元筆頭剣士で、話したと思うけど私の兄弟子。貴方もわかつていると思うけど、とても信頼のおける人物よ。多少、辛辣な部分はあるけれど」

それが問題なのが、彼女は平気な顔をしている。

だが、力を抜いたような優しい表情へとすぐに変化を見せたことで、レイルは気づいた。

彼が落ち込みつつあるのをユイリスは察し、元気づけるためにもしゃちほこぱつたり軽口を混ぜた話をしたりしているということを。彼が気づいたことまで察しているのか、ユイリスは優しい顔のまま柔らかな語り口で続けていた。

「だから、安心して彼の教えに従えればいい。私の剣は私にしか使えない術だから、私よりも長年先生に師事を仰いだ彼からならもつと多くのことを学べると思つわ」

満面の笑顔を浮かべるユイリス。それが、彼女なりの別れの挨拶なのだろう。

「そろそろ行かなくちゃ」

そう言って木立の方に向かつて口笛を吹く。

甲高い音に反応したステラは、手を振つて応えると2頭の馬を引き連れてこちらへと戻ってきた。

鐙に足をかけ、軽板金鎧を身につけた上に2振りの剣で武装していることなどまるで感じさせないかのようにユイリスは身を翻して騎乗した。

「そうだ。貴方に話していないことが最後に1つだけあつたわ」

藪から棒に一体何を、と首を傾げるレイル。

「私の本当の名前のこと」

「本当の、名前？」

「そう。コイリス＝レンフィアというのは、旅を続ける上で名乗つていたあくまで仮の名前なの。一部で私の名前、あまりに有名になりすぎてしまったから。ずっと黙つて『ごめんなさいね』申し訳なさそうに説ぎるコイリスだが、これまで沢山のことを秘密にしていた彼女のことである。いまさら一つひとつ何か出てきても驚くことではない。

そのことを云ふると、コイリスは、違ひないわね、と小さく苦笑いした。

「私の名前、本当の名前はね 」

真の名前を口にしようとしているコイリスを、レイルは軽く手を挙げて制止する。

「いや、やっぱり。聞かないでおくれ。だって、俺にとつて、コイリスはコイリスだもの」

それが心の底からの思い。

様々な事情のある彼女のことである。仮の名前を名乗ることもあるだろう。

ただ、コイリス＝レンフィアといつ名前は、レイルにとっては唯一無二のものだ。彼が助け、また彼自身を助けてくれた女性は、彼にとつてはやはりコイリス＝レンフィアその人なのである。丁重に彼女の申し出を断つた彼へ、コイリスはとても嬉しそうな眼差しを向けていた。

「自分の力でもっと色々なことを見聞きして、その上でコイリスのことも知ることができたら、いつかきっと知ることができるように違うないよ。俺はそう信じてる」

「信じる いい言葉よね。私も信じてる。いつかきっと、私の名前を貴方が知ってくれることを」

しばし見詰め合い、2人は『信じる心』で結ばれていたことを確認し合つ。

黙つて頷くコイリス。

呼応して、レイルも何も言わずに頷いた。

別れが、やつてきた。

「元気でね。いつかきっと、また会いましょう」

そう言つて軽く手を振り、彼女は馬を前へと進ませた。彼女の後方には一ちらへと会釈をしたステラが続く。

「コイリスこそ、あんまり無茶しちゃ 駄目だよ！」

ゆつくりとではあるが次第に遠ざかっていく恩師の背中を、手を振つて見送る。これに、コイリスは再び手を挙げて応えていた。そしてレイルは、湧き出しそうになる涙を堪えながら、腰を折つて深々と頭を下げた。

「お世話になりました！ ありがとうございました、先生！」

それは、初めて彼が師匠のことを『先生』と呼んだ瞬間であった。こうして、レイル＝フュンフルは、永遠の恩師ユイリス＝レンフイアと別れの時を迎えた。

彼が素質を開花させ剣士として大成し、彼女が復活させたエウロニア史上最強の剣士隊へ馳せ参じるのは、もつ少し未来の物語である。

剣と勇気を、『えてください 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8748f/>

剣と勇気を、与えてください

2010年10月8日14時45分発行